
麻帆良に来た皇子様？

FUMI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良に來た皇子様？

【Nコード】

N3964I

【作者名】

FUMI

【あらすじ】

目が覚めたら自分の部屋じゃなかった「ここどこっ?」

この作品はかなりのチート要素が含まれております。そういうのもOKな方はどうぞごらんください

プロローグ（前書き）

この作品は思いのままに書き綴った。小説、初心者作品です。
べつぞ長い目で見守ってください。

プロローグ

目が覚めたら自分の部屋じゃなかった

「ここどこ?」

起きてまだ寝ボケていたが周りを見て一気に覚醒した

あたりを見回すとギリシャ神話に出てきそうな神殿とこれまた

SFにできそうな機械が並んでいた

「ここは神の間と呼ばれている場所です。」

いきなり後ろのほうから声が響いた。

(はあ? 神の間? なにまだ夢か? それにしてもすごい場所だなあ)

「これは夢ではありませんよ。あとここは世界を観察する場所になります。」

「へっ?」

(なんで夢だと思ってたことが?)

心の中で思ってたことを言い当てられ動揺していると

「それは私が神様だからですよ。」

声のするほうに振り向いてみると神秘的な女性がいた

「え〜とその神様が俺に何の用でしょうか?」

とりあえず用件を聞いてみると

「その前にあなたの名前を聞いてもよろしいですか?」

「え〜つと俺は白尾 命。」

自己紹介をすませると

「では命君、君には異世界に行ってもうことになりました。」

いきなりのトンデモ発言に動揺を隠せないでた

「ちょっ・ちょっと待ってなんで俺が異世界なんていかないといけないんだ?」

「それは厳正なる審査の結果です」

と神様の後ろからビンゴに使うようなものが出てきた

「ってでかすぎつだろ! ?あと厳正なる審査ってそれはただのク

ジだろー！！」

そうでかすぎなのだ軽く見積もっても50mはありそうだ

「ともあれ、あなたは選ばれたです。受けてくれませんか。」

「まああのままの人生だったらやることなんてなかったからな、受けてもいいぜ。」

「ありがとうございます、さっそく異世界に行ってもらいますがどんな世界がいいですか？」

リクエストがあればそこにいってもらってもかまいませんが、異世界に渡るのにリクエストを聞く神様

「たとえば剣と魔法の世界とか宇宙が舞台の世界とかか？」
と聞いてみると

「はい。どんな世界でもいいですよ。漫画やアニメの世界でもその答えを聞いてあることを思いついた

「それじゃネギまと天地無用のクロスでもいいのかよ？」
結構無茶な願いかもしれないけどいってみると

「はい、大丈夫です。他になければその世界に送ることにしましょう。」

おっ 結構無茶な願いも叶うんだなと思っっていると

「次にあなたの改造を行います。肉体と精神と頭脳。」

おっと考えごとしてる間に話は進み始めたか、改造か聞こえは怖いけど

ネギまはもちろん魔法での戦闘があるはずだし天地無用なんて宇宙を舞台に

してるところもあるから頭もよくないと生き残れないかもしれないかな、中途半端な

改造じゃ生き残れないから徹底的にやってみるか

「では肉体ですが生体強化の10倍を、魔力はネギまの近衛木乃香の5倍で気も同じくらいで

頭は宇宙一の天才科学者の白眉鷲羽と同じくらいでどうでしょうか」

自分で言ってみてみかかなりのチートっぷりだなこんなやつ勝てるのいるのかね？

でも天地無用だからごろごろいそうだけでもまあネギまだつたら大丈夫かも

しれんな

「わかりました。では改造をおこないます。」

そういうと神様の周りにウィンドウが出てきてなにか操作し始めた。

数秒待つと自分の周りが光はじめさらに待つと光がおさまると神様が

「これで改造は終わりました。どうですかなにかおかしいところはありませんか？」

と言ってきたので体の調子をみると

「なんか体の中から力があふれてくるしかもその力の使い方が頭の中に浮かんでくる

じゃないかまったくの未知の力だったはずなのになんだか最初から知っている感じだ

これが魔力でこっちが気か・・・なるほど・・・これをこっすれば・・・こっ混ざって・・・

できたこれが咸卦法か・・・」

なんか頭に浮かんだ力の使い方を行っているといきなり咸卦法ができてしまった。たしかこれって

究極技法つていわれてなかったけ？すっげなあこの頭脳なんて力を使えることにはしゃいでいると

「問題はないようですね。それでは次にあなたに3つ力をあげましょう。あなたの頭の中に

想いえがいていたことでもいいですね。」

思い描いていたものって天地無用のアレとかテイルズやブリーチのコレとかな？

「それではまず樹雷・皇家の樹代1世代を・・・」

そうそう天地無用の船なら皇家の樹か魘皇鬼や福みたいなのをほしくなるだろう・・・ってマジ

ですかアレあればもう無敵じゃね・・・

「船の形状などどんな感じにするか思い浮かべなさい」

そういうとまた周りにウィンドウがあらわれた

「そうだなあ・・・」

やっぱり・・・（作者に創造力が足りない為割合させてもらいます）

「はい。でわこんな感じに出来ましたが大よろしいですか。」

見せてもらった船の外観は思い描いたものと一緒で関心していると

「ではこの船の名前を決めてください。」

名前かあなんか聞こえるああなるほど君かもう存在してるんだから意思があっても不思議

じゃないよな。そうかそれが君の名前なんだね

「わかったよ龍虎皇・・・こいつの名は龍虎皇だ!!」

「わかりました。次は2つ目は・・・」

2つ目かだつたらこの強靭な身体と膨大な魔力と気を使うならそれにふさわしい

技や魔法を使えるようにならないとな。ゲームとか漫画やってい
る時からこんな技や魔法

使えたらとか呪文の詠昌文さがしていたっけ

「2つ目はテイルズシリーズに出てくる技や魔法などをすべて使
えるようそれとアイテム類の

武器各種、アクセサリ、消耗品。あとブリーチの鬼道となりま
す。消耗品の方はは船の

ほうで買えるようにしときましたから。鬼道はあなたがわかる範
囲でしか使えませんので気を

付けてくださいね」

おっラッキーこれで消耗品は気にせず使えるしな、まあ防具は別
に必要じゃないだろう。

った。

訓練はKOS・MOSの力と神にもらった力の確認をすることに
した

「マジ半端ねえ〜これが皇家の樹の力、光鷹翼はKOS・MOS
のD・TENERITAS（相転移砲）をも防げ
るよかよ。」

テイルズの魔法もスゲーなあ見た目も派手だし使い方は考えた方
がいいな。ブリーチの鬼道も

結構使えるな縛道を基本に使えばいいし、破道も牽制用にも使え
るのし必殺技なもの

あるしな

~~~~~訓練終了~~~~~

「それではこれから世界を渡ってもらいます。行き先に希望はあ  
りますか？」

そうだないきなり麻帆良にいったらせつかくの天地無用の世界が  
台無しだから当分は宇宙を

舞台にしようかな

「じゃあネギまの原作開始15年ほど前でお願ひします」

「わかりました。・・・それでは送ります」

そういうと僕たちの周りが光はじめた

「それではいつてきます」

そういうと白い光に包まれて意識が途絶えようとした時なにか不  
吉なセリフが聞こえたような

気がした。

「さて少しはサプライズというものを行いますか」

神様のつぶやきは誰もいなくなった神殿に吸い込まれていった

## プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか？感想の良いところ悪いところありましたら  
どうぞおねがいたします。少し訂正原作開始5年 15年。こう  
しないといけないので。さらに精霊達は無くします。少し出しづら  
いので

## 樹雷編1(前書き)

何かの手違い(神のサプライズ)か送り込みではなく転生ものになりました。

そのへんもどうぞよろしくお願いします。

## 樹雷編 1

目が覚めたら目の前には髭もつさりなおっさんがいた

「おぎゃーおぎゃー」（なに〜このおっさん〜）

「おぎゃー？おぎゃあーおぎゃあー」（どこどこ？地球なのかあ〜っておっさんだれ〜）

ん？なんでおぎゃーなの？言葉がちゃんと喋れネエー！？

「ほらあなた急に覗くからこの子が驚いてますよ。」

「しかし船穂久しぶりに時間ができたのだ、しかもいつも寝てるではないか起きてるときに会えたのは生まれてから初めてではないか。」

「うれしいのはわかりますけど少し落ち着いてください。それはそうとあなたこの子の名前はちゃんと考えてきてくれましたか？」

ええ〜と聞き捨てならない名前が聞こえてきたような船穂って確か天地の爺ちゃんの遥照の母親で樹雷皇阿主沙の奥さんじゃなかったけ？

「うむそのことならちゃんと考えてきたぞあの出奔してしまっただつの名を1つもらい「命照」（みょうしょう）と名づけるこの子の名前は柁木・命照だ！」

なんだか知らないが新しい名前になってしまった。っと呆けている場合じゃないあの神様間違えやがったなこれじゃ送り込みじゃなくて転生じゃないかよ。そういうえは最後に聞こえたサプライズってこれかよこんなサプライズなんていらさないよ。

「お姉さま、赤ちゃんの様子はどうかしら？」

あら美砂樹さんいまちょうど起きてますよ。たったいま阿主沙様からお名前をいただいたところです。」

「きゃーかわいいわー、えっそうなのどんな名前なんです」

「命照と名をいただきました。遥照の名を1ついただいたそうで」

そうなのじゃ改めてよろしくね。命照ちゃん」

はいよろしくです。ええ〜となんて呼べばいいのかな？今は喋れないからいいけど、ああ〜なんか驚くことありすぎて疲れたな眠くなってきた。

「あらお姉さま命照ちゃん寝ちゃったわよ」

「そうそれではお茶にしましょうか。命照の寝顔でも見ながらね。」

「あらあらそれもいいわね。」

「わしも付き合おう」

「あら〜あなたあ〜お仕事は大丈夫なの〜？」

「美砂樹〜たまにはいいではないかあ〜」

次の日

さているいろいろ混乱することがあったが少しまとめようか。えーとまず俺は樹雷皇の第4子で次男として生まれたんだなえーと母親は第一皇妃の船穂様で兄が遥照でと今は地球に出奔していると異母姉である阿重霞と砂沙美は現在、兄の遥照を探しに行っただっきり行方不明となっているってこんな感じだと思っけどそうなると天地無用の第1期開始少し前あたりかあんまり本編とはかわらないでいないとなそういえばKOS・MOSはどこにいるんだ？送り込みならば近くにいますか船の調整槽にいるはずなんだか転生みたいだしどうなるか見当もつかんな。そのうち会えるといいが・・・

半年後

ふう〜最近やっと自在にハイハイができるようになってきたなそろそろ天樹（樹雷皇宮）のなかを動き回るか。

（・・・はここに・・・私は・・・にいる・・・）

ん？なんだこの声は聞き覚えのある声だ。こっちの方から聞こえるな。それにしてもここは広すぎだろ結構歩いたはずなんだがおっとこっちの方かふう〜疲れた一休みってそういえば夢中で来てみたも

ののここどこだ？ん？あれ？あの扉確かいつもはしまってるはずなんだが開いてるな行ってみるか。

~~~~~

同時刻

船穂は瑞穂、美砂樹は霞鱗、阿主沙は霧封からなにか不思議な波動を受けた

(新しいお友達が生まれるよ)

そんな波動だった。その事が気になった船穂は廊下に出てみると角を曲がる命照の姿を見つけ驚きながらもこんなところにいることを不思議に思い後をついていくと、途中で美砂樹と合流した。

「お姉さまこんな時間にどうしました？」

「美砂樹さんこそどうかしました？」

「私は霞鱗ちゃんが何か言っているようでそしたら命照ちゃんを見かけて」

「そう私もなの。では一緒に行きましようか」

「ええお姉さま」

その後、皇家の樹の間の前につくと扉が開いていた。

「ここが開いているということは皇家の樹に呼ばれたのね。」

「それだと私たちの樹が言っていたことってこのことかしら？」

「いきましよう」

命照が入っていったこと確信すると船穂たちも転送ポートに乗った。そこは何本もの第二世代が浮かんでおり先に進んだであろう命照を歓迎していたようで樹達の放った光やメロディーなどの余韻が残っていた。しかしいくら進んでも命照の姿が見えない。とうとう最奥の扉まで来てしまった。

「ねえ〜お姉さまここまでできてしまったけど命照ちゃんは第一世代の所なのかしら？それとも私達の樹、瑞穂ちゃんと霞鱗ちゃんがいした所なのかしら？」

「そうね。私達と同じ場所の可能性もあるけれど私は命照は第一世

代の所にいると思います。」

「でもそうになると私達では第一世代のエリアにはいけませんよ」

「その役目わりに任せてくれまいか」

船穂達の後ろから声がかかり振り向くとそこには夫、阿主沙がいた。

「あなた」

船穂と美砂樹は同時に驚きの声をあげた

「あなた、どうしてここに？」

「いやなに霧封がななにやら騒がしいのでな見回りを兼ねて散歩をしていたら皇家の樹の間に入っていく命照を見てなそしたらお前たちまで入っていくではないか。急いで追いかけてきたのだそしたらここにお前たちがいたんだ」

「ではあなた命照のこと任せても大丈夫ですね」

「ああでは行ってくる」

そういうと阿主沙は転送ポートに乗り込んでいった

「ここに来るのも久しぶりだな。あの時は魅月と一緒に来たのだったなもう何百年だというのにここにくると昨日のように感じられる。おっとそうだ命照は・・・おー！いたいたふむもう契約は済んでいるようだな。」

阿主沙が見つけたのは皇家の樹が発する光を全身に浴びはしゃいでる命照の姿であった

「それにしてもまだ生後半年しか経っていないのだからこの樹の名がわかるのは少し先の話だな。ほら命照お前はわしたちをあまり困らすな。お前の兄妹はみんなここを出てしまったのだ。お前はそうなるなよ。」

阿主沙はそういいながら命照を抱き上げた。

「この樹がお前の樹か、名はまだわからんが命照をよろしく頼むぞ！」

そう樹にいうとそれに応えるかのように樹は葉を光らせた

~~~~~

次の日

昨晚、樹雷皇阿主沙は自分の子命照が樹選びの儀をしたことを各当主や主だったものに伝えた。しかしまだ生後半年の命照が第一世代と契約たということ信じない者もいた。立会人が親である船穂と阿主沙に美砂樹であった為、柁木家の者のみとういのも拍車をかけていた。

「あなたたち阿主沙ちゃんは第一世代のマスターなのはわかっているでしょ。皇家の樹の間の第一世代のエリアに行けるのは今、阿主沙ちゃんしかいんだから。」

そう声をあげたのは樹雷の鬼姫こと神木・瀬戸・樹雷であった

「みなのもも今回の樹選びの儀に関しては我が樹、霧封にかけて真であるここに誓う。今ここは我が子、命照の樹選びの儀の結果を喜んでくれまいか」

そう言い終わると皆納得してくれた。その後は主役がいままお祝いの宴会が始まった。

~~~~~

同時刻

ふーそれにしても昨日聞こえてきた声が龍虎皇だったなんて龍虎皇はずっと待っていてくれたなんてうれしいじゃないか。後話したらKOS・MOSは今、龍虎皇が亜空間にいるみたいらしい、今度自由に行動できるようになったら迎えに行くことにした。それにしても向こうの広場はすごい状態だな俺のお祝いらしいんだが主役がないのによく盛り上がるな。いや赤ん坊の俺が行ったら怖い目にあいそうだ。さて龍虎皇とも会えたしKOS・MOSの行方も分かったし本格的に動けるようになるのは数年はかかるからのんびり行くか。

樹雷編 1 (後書き)

どうだったでしょうか？

いきなりの転生ものになりました

しばらくは樹雷編です。

どのくらいかはわかりません

樹雷編 2

五年後

「命照様、朝です。」

朝、少し寝ぼけた意識に強い朝日と最近聞くようになった侍女の平坦な声で、起きる時間になったようだ。相変わらずあまり感情のこもっていない声だか心地よい気がする。

「うーん、KOS - MOSももう少しだけ寝かせて・・・。」

「ダメです。起きませんと実力行使させてもらいます。」

「わかった。起きるよ、起きますよ。」

「最初からそうしていただければ1分45秒も無駄にせずに済みました。着替えはそちらにご用意してありますので、着がえてください。私は朝食のご用意いたしますので。」

さて着がえますか。まったくマスターをなんだと思ってるんだKOS - MOSは、まったく毎朝こんなかんじだぜ、ん？なんでKOS - MOSがいるのかだって？それは数か月前の遡る。

~~~~~

命照の樹選びの儀が終わって五年の歳月が過ぎた。五歳にもなると活発に動き回り侍女たちを困らせ始めていた。言葉もすっかり喋れるころには皇家の樹の名前も父母たちに教えることができ正式に皇家の樹第一世代艦龍虎皇となることができた。五歳の誕生日に合わせるように船の外装や内装などの取り付けや設置などの作業を進めていた。その作業の指揮を執っているのは母船穂と義母美砂樹である、本来であれば命照本人が指揮をとらねばいけないのだがまだ幼いからということで母二人で指揮を執ることになったのである。しかしながら外装に限っては樹と命照による相談で決めることにした。

（外装は某花の名の戦艦式番目のような感じで艦橋部分をなくし真

中にコアユニットを置く)

アレを見つけたのは内装の最終チェックの時、母船穂達と樹がある  
広間を見ていたときである

「おねえさま」

「どうしました、美砂樹さん？」

「あっちの方に不思議な転送ポートがあるんですけど・・・」

「転送ポート？変ですね。転送ポートはそちらには設置していません  
ですけど。」

「そうなのよ。しかもそのポートすこし変なの」

「変ですか。では行ってみましょう。」

そういうと美砂樹の後を歩いていくとちょうど樹の裏側あたりの例  
のポートがあったそのポートは全体を樹の枝に覆われていて乗るこ  
とができない。

「確かに変ですね。」

「でしょ。どうしますお姉さま？」

とここをどうするか相談しているとずっと静かにいていた命照が船  
穂のそばを離れ転送ポートに近づいたその時ポートを覆っていた大  
量の枝がそろそろと外れていった。

「命照なにかやりました？」

「いいえ船穂ママ何もやってはおりません」

ううう恥ずかしー二人とも母上と呼ぶことを嫌うんだよな、一度母  
上と呼んだら船穂ママと呼ぶまで部屋を出てはいけませんとかいわ  
れたよ。

「お姉さま、ここは命照ちゃんの船なんですから大丈夫ですよ。そ  
れよりもこれがどこに繋がっているか調べませんか？いいわね命照  
ちゃん」

「はい。美砂樹ママ」

「そうですね。先に進んでみましょうか？」

そういうと三人は転送ポートに乗り込んだ。

「ここはいつたいどこでしょう？」

転送された先は今までとは全く違う場所だった。通常、船内は基本的に樹を配置させるが、ここはまるで研究所のような所であった。なんか見覚えのある場所であっそうかここはゼノサーガのヴェクタ1のKOS・MOSがいた研究所だなんてそんなものがこの船にあるんだ？

「ここはいつたいなんでしょう。まるでアカデミーの研究所のようですけど」

「美砂樹さん、あそこに何かあるみたいよ。」

「ほんと、これはまるでスリーベットのように見えるけど」

「なにがあるんですか？ママたち」

そういつて近づくと、何かに反応したかのようにベットみたいなものが動き始め扉が開き始めた。

あれって確かKOS・MOSの調整槽に似ているけど、まさか！？あの中にいるのは……

「美砂樹さん、何か出てくるみたいです。気を付けてください」

「わかっていきます。命照は守ってみせます。」

二人はそういつと臨戦態勢をとっていた。

(ピツSEARCHING・・・旧名・白尾 命、現名・柁木・命照・樹雷・・・現状確認中・・・確認終了。現在付近に生体反応3、内一つにマスターと同じ反応ありしかし過去のデータと照合すると該当する姿形ではない、しかしデータ以外はマスターだと認められている)

「そのあなた、いつたい誰なのなんでこの船に乗っているの！？」

答えなさい！」

「KOS・MOS！」

「命照ちゃん？」

「命照？」

「KOS・MOS・・・やっと会えた・・・」

俺はKOS・MOSに会えたことにより周りが見えなくなったのかKOS・MOSのもとに走って行った。

「命照ちゃん、この子は何なの？知っているならママたちに教えてくれない？」

あつやべどうしょ。神様にもらいました。っていつても信じてもらえなさそうだしそんなことしたら俺のことも変に思われかねないな。「え」とこの子は・・・「私は龍虎皇に作られたアンドロイドです。」「ってKOS・MOS?」

「そうアンドロイドなのそれも龍虎皇に作られた・・・本当なの命照。」

「はいそうです。」

「それにしても命照ちゃんが知ってるのは変じゃない？」

「それは樹選びの儀の際に龍虎皇に教えられましたから私にプレゼントをあげるとか・・・」

「わかりました。とりあえずこのことは樹雷皇に報告します。結果は教えますのいいですね、命照それと「KOS・MOSです。」「よろしいですね、コスモスさん」

「わかりました。母上「ママでしょ。」「はい船穂ママ」

「了解しました。」

ふう〜とりあえずこの場合は切り抜けた後はKOS・MOSをそばに置いておけるようにしないとな。

数日後

「命照すこしいかしら。」

んっ？船穂母さん？なんだろう？

「はいどうぞ」

そういうと船穂母さんがKOS・MOSを伴って入ってきた

「あれKOS・MOS?どうしたの？船から出てはいけなかったはずだけど」

「そのことをいいにきました。コスモスさんですけど今日からあなたの侍女にしますのでよろしいですね。」

「えっとKOS・MOSが侍女になるのはいいですけど何があつてのですか？」

「あれから樹雷皇や瀬戸殿などと話し合いであなたの侍女にしてはどうかということになったのでコスモスさんには侍女としての能力をみることになったのですが事務能力、戦闘能力など行いました。その結果申し分なしとなったのでここに就いてきました。」

「わかりました。そこまでしてもらいありがとうございます。KOS・MOSこれからよろしくな。」

「はい。命照様」

~~~~~

っということがあってKOS・MOSはここで俺の侍女をやってもらっているわけだ。

「どうしました。朝食の用意が終わりましたので着替えが終わりましたら食べてください。」

「うん。わかったよ」
さて朝飯でも食べるか・・・うまうま相変わらずKOS・MOSの料理はうまい

KOS・MOSのことで少し変わったことがある。KOS・MOSのヘッドギアみたいなのが樹雷特産の樹から作ったのかと思える木製の物に代わつてるところとか全体的に機械的な部分はすべて木製になっていたが、KOS・MOS曰く装甲面は前より強化されているとのこと、でもヘッドギア以外の場所は侍女用の着物を着ているのでわからないけど、初対面の人にはKOS・MOSがアンドロイドだとは思われない、でもわかる人にはわかっちゃうけど

あとこの五年でいろいろと変わったことがある、半年ぐらい前に姉の阿重霞と砂沙美が見つかったという報告が母さん達にもたらされた。

なんでも船穂母さんの生まれ故郷である地球にいるようだ。

なぜわかったかという地球のそばで津名魅のエネルギー反応を探知したのとこととGPの一級刑事が神我人という犯罪者に関しての報告書を提出した際に樹雷の機密に関する事まで書いてあったことで判

明した。

なんでもそのGPの刑事さんの報告書を要訳するのに四日もかかったらしくその間他の機能がマヒしたらしいどんな報告書だったんだろう。

それも受けて近々父さん達は地球に行くらしい。ついでに俺もついていくことになっていいるなんでも兄妹たちに俺を見せに行くのも目的のようだ。

他にも色々変わったことはある。たとえばKOS - MOSが来てからは龍虎皇の中で戦闘訓練をやったりしている。

忘れてるかもしれないが俺の中には膨大な魔力と気がありその訓練や武器を使つての技の訓練もおこなっている。道具袋はKOS - MOSのいた施設の金庫みたいなところに保管されていたのをKOS - MOSが持つてきてくれた。そろそろ龍虎皇の最終チェックも終わるそしたら処女航海で地球に行くんだ。

もう一つ変わったことがあるそれは転生して5年、原作の知識がだんだん無くなり前世の記憶もただの知識になり始めていた。それはつまり……

樹雷編2（後書き）

次回は地球で兄妹たちと初対面です。加筆で最後にこの小説のあり方を少し変えた気がします

地球来訪編 1

チユン・・・チユン・・・

ある昼下がりに俺は船穂母さんとある神社の階段を上っていた。

「船穂ママここに兄上がいらつしやるのですか？」

「ええ、そうですね。この神社にあなたの兄、遥照がいますよ」

そういつている間に階段の終わりが見えた。そこには境内を掃除する少年の姿があった。

「もしいいですか？」

「はい、何ですか？」

「この神主はご在宅ですか？」

「じつちゃんですか？確か社務所の方に・・・俺呼んできますね。」
そういうと少年は社務所があるであろう方向に走って行った。

あれが杵木天地か・・・まあ普通にみえるがその力頂神をも超えるものがあるか。

「じつちゃん、じつちゃん」

「天地様？・・・つ船穂様！？」

おっとアレに見えるは姉に阿重霞だ、母上を見て驚いてる

「船穂様、つてことはお母様も・・・」

「お家の方にいらしているはずですよ」

「ひいゝ急いで行かなくては船穂様ではすいませんが」

「ええ、いつてらつしやい」

「はい、ああまずいですわ。それにしても船穂様の隣にいた子はどなたでしょう？」

あつ阿重霞姉さま行っちゃった。俺には気付いたようだけどやはり美砂樹母さまの方が気になるみたいだ。

「じつちゃん！じつちゃんを訪ねて子供連れの女の人が。じつちゃんてば！」

「騒々しいぞ天地、ちゃんと聞こえておるわ。まったく・・・母上」

おおあれが兄か以外に老けてるのは、あれで700歳軽く超えてるんだもんな。

「そんなところではなんですから、どうぞ中へ、茶でも入れますので。」

「では、お言葉に甘えましょ。さあ行きましょ。」

そういつて中に入って行った。

「粗茶ですが」

「ありがと」

「どうも」

何とも言えない空気が・・・あつお茶うまつ

「ここに帰ってきた・・・」

「この星もずいぶん変わったでしょう」

そりゃ母上が地球を出て700年以上だもんな、変わるだろ

「遥照、いつまでその姿でいるつもりです。」

「母上はだませませんね」

あつ母上当然つて顔してる。

「いままで誰にも見破られたことはないのですが」

おおゝ姿が変わった。あれが本来の姿ですか、若っ！？おつと外で天地君が聞き耳立ててますね

「んっ？」

「母上？まったく・・・天地広場の掃除が終わったら階段の掃除をやつとれよ」

ああー急いで走って逃げてくな

「ふふふ、とんでもない子」

「最初は天地を身代わりにと考えたのですが」

「樹雷の枠の収まるかしら？」

「凡人ですから」

「して母上、今回の地球訪問は何用でございませうか？」

「阿重霞ちゃん達の意識調査と700年もかわいそうな母を放って置いた息子の姿会いによ。」

「最初は麵子を手土産に樹雷に帰ろうと思いましたが。でもそのいろいろありまして・・・」

「もー男の子なんて生むもんじゃないわね。どこかに行ったつきり母親より好きな女を選ぶのだから。かわいそうな阿重霞ちゃん。あなたはそんな子になっちゃだめですよ。」

「そっぴいええ兄上と阿重霞姉さまは婚約してたけど兄上がいなくなつてそれも解消されたんだっけ？それでも会いに700年もかけて会いに来たのに当の昔に結婚して子孫がいるんじゃないか」

「そっぴいええ先ほどから気になってたのですがその子はいつたい？」

「紹介するのが遅れてしまいましたね。命照、挨拶なさい」

「はい、船穂ママ。」

「ママ！？いつたい？まさか！」

「はじめまして兄上、私は榎木・命照・樹雷です」

「兄上つて、えっ？」

「うわ、戸惑つてる戸惑つてる。」

「遥照、つまりこの子はあなたの弟ですよ」

「弟ですか、母上いつの間にはやはり700年の間ですか？」

「そうですねほんの5年前ですよ」

「そうですね。わかりました。命照と言いましたか、はじめまして、遥照です。不肖な兄ですがよろしくお願ひしますね。」

「はい兄上、私こそよろしくお願ひします。」

「さてそろそろ行かなくてはもうすぐ父上がやって着るはずだ。」

「それじゃ、お茶おいしかったわ」

「船穂母さんがそっぴいいうと立ち上がり外に出ようとすると」

「あちらへおいででしたら天地に案内させましょう。私はもう少しあとで行きますので・・・天地、天地。」

「兄上、声変えるのうまいなあ一瞬だもん、あつ天地殿が走ってきた。」

「なに？じつちゃん」

「ちよつとこの方たちを家まで案内してくれ」

「わかつたよ。ではいきましょうか。ええ〜と？」

「自己紹介がまだでしたね。私は船穂、この子は命照です。」

「俺は……」

「天地殿ですね。」

「知ってるんですね。じゃ行きましようか船穂さん、命照君」

君ですか。皇宮では誰もかしこも様か殿だから新鮮だな。

階段を歩いている最中天地兄さんはまあちらちらと船穂母さんを見
てるな。なんか母親を見ている感じだな。

「あの……」

「はいなにか？」

「ああいえ……その……」

むう〜もどかしい

「天地殿は幼いころこの子ぐらいの時にお母様をなくされたそうで
すね。さぞ寂しかったことでしょうね？」

そういえばそうなんだよなこのころの天地兄さんはなんで死んだの
か知らないんだっけ？

「今はどうです？」

「今はうるさいくらいです」

「阿重霞ちゃん達を連れていったら寂しい？」

「みんなで樹雷に来る？」

「えっ？」

母さん、ずばずば言うね。まあ確かに樹雷にすれば寂しいなんて感
情は受ける暇ないな。でもまあ来ないんじゃない？天地兄さんは自
分から何かに飛び込むようには見えないし

「天地殿」

「んっ!？」

母さん少し顔怖いですよ。確かに気配を感じずにこんな近くから声
がしたんじゃ警戒はするだろうけど

「鷲羽ちゃん？びっくりした。そうだこの人……」

「知ってるよ。樹雷第一皇妃船穂殿と第二皇子命照殿だね。はじめ
まして私は白眉鷲羽」

「はじめまして鷺羽殿、よろしく」

母さん顔が少しひきつってますよ。握手って母さんマジ握りだ。普通なら手なくなるよ。でも鷺羽殿は平然と受け返してるし。

「そうだ。天地殿これを持って先に行つててくれる？」

「でも……」

「大丈夫、船穂殿は私が連れていくから」

「それでは、命照、あなたは天地殿一緒に行きなさい」

おっとこの先は聞けないのね。まあ見当はつくけど母さんは魍皇鬼関係について聞くつもりだね

「はいわかりました。では天地兄さん行こう」

「わかつたよ、鷺羽ちゃんよろしくね。行こうか命照君」

さてじゃ柁木家に行くとするか。

「命照くんはその樹雷の皇子なんだよね？」

「はいそうですよ。第二皇子です。」

「第二つて第一は確か……」

「ええ遥照兄上ですよ。あなたのおじい様のね」

「だよ。ということは阿重霞さんや砂沙美ちゃんとは……」

「はい、姉上達です。少し楽しみなんですよ。美砂樹母さんつまり阿重霞姉さま達の母親ですね。にたまに話しを聞いていましたから」

「あははは……どんな話かは聞かないでおくよ」

「どうしてですか？」

「いや……その……そうだ早く行って会おうよ」

「なんかはぐらかされた感じがしますがまあいいでしょう。じゃさっさと行きますか」

話しをしていいいたらもう門の前についてしまいましたね。

栈橋を渡っていくと何やら楽しげな笑い声などが聞こえてくるな

「なんか声がするからこっちに回ろうか」

「ええいいですよ」

リビング側の窓から入るのかこの声は美砂樹母さんの声か

「ただいま、にぎやかだね」

「あつ天地兄ちゃん」

「みゃうん」

おつと天地兄さんに駆け寄る少女と猫みたいなの

「ただいま」

「あらあら、あなたが天地ちゃんね。うん」

あらまあ抱きついてら美砂樹母さんもかわいいものに抱きつく癖どうにかなんないかな。俺もたまに被害を受けるんだよな

「なっなっおつお母様！」

「おいてめえ天地から離れやがれ！」

さらに二人の女の人が美砂樹母さんに食ってかかる

「まあまあ甘えん坊さんねえ」

何を勘違いしたのか二人を抱く美砂樹母さん

「なはあ」

「だめだこりゃ」

もう二人はあきらめたようで脱力してら

「この人が？」

「母の美砂樹です。」

その横では砂沙美姉さんが呆れたように天地兄さんに説明してる

「美砂樹ママもうそのくらいにしたらどうですか？」

「お母様、この方はどなたなのですか？ママって？」

「あら命照ちゃん？命照ちゃんもなのね」

そういうと美砂樹母さんは抱きついてきた。

「いえそういう意味ではないのですが」

「ねえお母様その人はいったい誰なの？」

「あら？説明してなかったかしら命照ちゃんはお姉さまの子供なのよ」

説明してませんで姉さんたちかなり驚いてますけど

「えっどうということなのですか？船穂様のお子様は遥照お兄様しかいないはず？」

「やーねえ、正真正銘のお姉さまの子供よ。」

「ええ〜そうなのじゃあ砂沙美達の弟なんだ」

「そうよ砂沙美ちゃん。命照ちゃんご挨拶なさい」
「やっつとですか？俺、何回自己紹介するんだろ」

「はじめまして私、柁木・命照・樹雷です。よろしくお願ひします
ね。姉さん達」

「よろしくね。命照ちゃん。砂沙美、お姉ちゃんなんて言われるの
初めて」

「はじめまして命照」

「なんとか受け入れられたか」

「ママ、そろそろ」

「えっ？もうそんな時間？」

「はい。父上、樹雷皇が来ます」

「じゃみなさん外に出ましようか」

外で待つと船穂母さんが来て数分後、樹雷皇降臨

「元気そうだな、阿重霞、砂沙美」

「お久しぶりですお父様、この方が天地様です・・・」

「そうか、帰るぞ阿重霞、砂沙美。」

「お父様、天地様はお兄様の・・・」

「私の命に背き地球人とできた孫など知らん・・・」

「あら私はその地球人ですけど」

「私はその息子ですけど」

「お前達？砂沙美お前はかえるよなあ」

「私も帰らないよ。無理やりだつて言うなら砂沙美、お父様のこと
嫌いになつちやうんだから」

「砂沙美い〜」

全滅だね。

「お前達、どうしてもここに残るといふのだな。」

「砂沙美ちゃんはどうなの？」

「だつて砂沙美がいないとみんなちゃんとご飯食べられないんだも
ん」

「あなたそういうことなんですけど」

「わかったお前たちの好きにするがよい。ただし私の選んだものと
その者が勝てたのならな」

ここで降りてくるは、未来の天然王

~~~~~割合~~~~~

~~~~~

「きゅ」

「天地兄ちゃんの勝ち」

空から降ってきた美星さんの船のおかげで？勝った天地兄さん。

「あのーすいません鷺羽さんまた修理お願いしたいんですけど」

あのあとなんだかんだで夕方までみんなでお茶のみかわしてました。

「それでは天地殿、ご迷惑になったと思いますけど・・・」

「いえ、なにもお構いできなくて」

「天地ちゃん、魍子ちゃん、鷺羽ちゃん、美星ちゃん」「はい」「それ
から魍ちゃん」

「おかあさま」

「砂沙美ちゃん」

「阿重霞ちゃん」

「ええ」

美砂樹母さんは別れを惜しむかのように名前を呼んでは抱きついて
るし、あれあそこにいるは兄上？

「父上」

「遙照か。阿重霞と砂沙美を頼んだぞ」

「その事は天地のやつに任せておりますので」

「そうか」

「はい、それにしても私に弟ができていたとは驚きました。」

「命照があやつはお前より優秀かも知れんぞ」

「なんとそれだと樹雷も安泰ですな」

「だがお前が第一皇子である事実は変わらん。それにあと二千年は
待っててやる。」

あつちでは親子の会話ですか。

「ではお世話になりました。天地殿お元気で」

「船穂様もお元気で」

「みんな元気でね。阿重霞ちゃん、砂沙美ちゃんさようなら」

「お母様さようなら」

「また遊びにくるからね」

「それでは姉さん方お元気で」

「またね命照ちゃんお母様をよろしくね」

「はい、姉さん達も手紙くらい送ってきてくださいの」

「うん」

「それではみなさんさようなら」

~~~~~ 皇家の船内 ~~~~~

ふふふと終わったこれで自分の時間がとれる

「ふふふ天地、私があ程度の度であきらめるとは思つなよ」

父上がなにか不気味な声あげながらなんか言ってるし

「なんだかんだ言つても天地ちゃんのこと気にいったのね」

「かわいそうな天地殿」

「そうですね。もう認めてもいいのに」

「ママ達」

さて長年の計画を遂行させるんだ

「なんですか？」

「父上がこの様子では樹雷に帰るのはもう少し先になりそうなのでせつかくの地球なので観光してこようと思うのですがいいでしょうか」

そう計画とは観光なのだ。中身は地球人なのだがあまり旅行したことないのでこの機会にこつと前々から計画していたのだ

「そうですね。いいでしょう。コスモスも一緒にというのが条件ですけど」

「いいのですかお姉さま」

「それくらいいいでしょ母の故郷をみるという名目なら」

「そうですね。命照ちゃん、あまり危険なことほしくないようにね」

「はい。ありがとうございます。では一旦、船に戻り支度をしてきますね」

「はいいつてらっしゃい」

さていきますか。とりあえず京都かな

## 地球来訪編1（後書き）

船穂達の敬称がまばらです。二人にはママと言ってますが、それ以外では母さん、母上、母様とバラバラになってますがご容赦を  
次回は地球観光京都編です、やっと少しネギまキャラが出る予定です  
すし魔法も出ます

## 地球来訪編 2

さてやってきました。京都に。前の世界では修学旅行ぐらいでしか来れなかったから個人で来たかったんだよな。

「命照様、このような所に来て何をなされるおつもりですか？」

「なにつてただの観光だよ。」

「そうですか。ではどこからまいりますよう？」

そうだな、神社仏閣を回るのも悪くないし京都料理を食べに行くのもいいなあ。そういえば地球の着物も樹雷にも引けを取らない物だつて聞いたこともあるな。ふむどうするか

「まあまずはこのあたりを少し散策するか」

「はい。わかりました。」

そういうと俺はKOS・MOSを連れて京都の街を歩いて回ることにした。まず付いた先は定番の清水寺

「ふーむ。いい景色だなあ。周りの風景もよく合っている・・・がいかんせん人が多い。なんなんだこの人ばかりは・・・しかもさつきから何故か知らんが写真をお願いされるのだが何故なんだ？俺はただの子供だぞ」

「あのか僕？お願いなんだけど私達と一緒に写真とらない？」

またかこれで15回目だぞ何を見ていたんだ。あつまた

「申し訳ございません。写真はお断りさせていただきます」

「そうですかわかりました」

こうやってKOS・MOSが追い払ってくれてはいるんだけどやり取りを見ていないのか同じ事は繰り返し返されるんだとね

「なによあの人、私達はあのかわいい男の子と写真を撮りたいのに・

・・・」

なにか声が聞こえたがまあ気のせいだな

「KOS・MOS、次いこうか」

「了解です。命照様」

ふう〜次は静かな所がいいな

やってきました名も知らぬ神社らしき所、どこなんだ？適当にバスに乗って適当に降りて適当に歩いたらこんな所についてしまった

「KOS・MOSここがどこかわかる？」

「申し訳ございません。先ほどまで確認できたのですがこのあたりに来ましたら急にデータの受信状態に不具合が起こりまして現在検査中です。」

「そうかわかった」

KOS・MOSにかぎって？何かしらの悪影響を与えるなんてここは結界でも張っているのだろうか？

「しょうがないこの階段を上がって神社でもあつたらここがどこなのか聞いてみよう。龍虎皇とリンクすればすぐにわかるんだがまあなにか危険があれば龍虎皇から何か言ってくるだろう」

「了解しました」

さて登るか・・・なにやら嫌な予感がするんだが・・・龍虎皇？・・・なに地球人以外の反応を見つけたって？なんでこんなところにそんな反応が・・・まさか密漁者？

「KOS・MOS！」

「はい」

「この周辺に地球人以外の生体反応はあるか！？」

「しばらくお待ちを・・・反応3左九時方向距離1500・・・その付近に地球人らしき反応3」

ちつ3人が大丈夫だが、地球人も3人とは面倒な

「わかった、ではそこに向かうぞ」

「了解です」

全速力で反応があつたあたりに行くとなにやら戦闘の痕跡があたりこちらにある。

「KOS・MOSあつちだな」

「はい反応は移動してますが速くはありません。もうすぐ見えてきます。」

そういつている間に戦闘注意域に着いたぞ

「斬岩剣!!!」

「おっと、まだやるっていうのかい、おっさんよ。いい加減鬼ごっこは飽きてきたんだがな」

「つく、なんなんだこいつ達は私の剣が聞かないなんて!？」

「お父様」

「長」

「安心しなさい。木乃香、刹那君こんなやつら私がやっつけますから」

戦闘してたのは原作では関西呪術協会の長、近衛詠春にその娘、近衛木乃香、その護衛、桜咲刹那の三人だった。対する敵さんはつとマリオネット使いにバイオモンスター使いに、ん？あいつはなにもつれていないなということは肉弾戦かそれか何か隠し玉があるのかわからんな

「何遊んでるんだよ。さつさと捕まえねえか。今この星にはやべーやつらが来てるて言うじゃねーか」

「その事ならもう大丈夫だぜ、そいつらならもう帰ったからよ。だから監視網の薄いこのときに来たんだよ」

「だったら監視網が厚くならないうちに仕事を済ませちゃおうぜ」

「「おうよ」」

なるほど樹雷皇が来るっていうんでGPのやつら監視の網解きやがったな。あとで抗議のメール送ってやる

「あいつらは何を言っているんだ？お前達何が目的だ!」

「おうおう威勢のいいことだ。いいぜ教えてやるそれはなこの星の人間の中でも特に力のある奴らを捕まえて洗脳してよ俺達ダルマーギルドの戦闘兵に仕立て上げるのよ」

「ダルマーギルド？お前達魔法界の者か!？」

「魔法界？何だそれは？俺達は銀河一のダルマーギルドの者よ」

「もついいじゃないか兄弟、こいつならいい戦闘兵になるぜ」

「そうだな。その子供ならその手のやつらに高く売れるしな」

「「ぎゃああはははー」「」

「うわー計画駄々漏れ、それにしてもむかつくな。そろそろでるか

「行くぞKOS・MOS」

「了解です」

「そこまでだ!!」

「誰だ!?!?!なんだ子供と姉ちゃんかよ。おいこんなところにきたんだ。生きて帰れると思うなよ」

「兄弟、あいつの来ている服、ありゃ樹雷の者だぜ」

「なんだとあいつらは全員帰ったんじゃないのかよ!?!」

「君!?!ここは危ない!早く逃げなさい!」

「あーその密漁者、ここが樹雷皇家直轄の植民地だと知っての行いかな?」

「なにーそんな話は聞いたことねえぞ」

「やっぱりそうだよ。一余このことシークレットだし」

「そうかでは樹雷皇家第二皇子柁木・命照・樹雷の名においてお前たちを捕縛する!KOS・MOS!」

「了解です。命照様」

「樹雷第二皇子だと!?!そんなの張ったりだこんなところにそんな奴が来るはずがない!」

「おうよ。とっ捕まえてうっぱらってやる」

「やれやれわからんやつだな。まあ水戸黄門でも最初は気付かないしな

「KOS・MOSそっち一人頼むぞ。」

「了解、命照様も気をつけてください」

「わかってるって」

「さーて初めての实战だが大丈夫かな。」

~~~~~

KOS・MOS VS マリオネット使い

「さて私の相手がこんな小娘とは仕方ない、お前達適当に相手なさい」

そういうと男の周りに4体のマリオネットが出てきた

「識別完了、撃破対象C級マリオネット、攻撃開始、R・CANNON」

KOS - MOSは腕を銃に換装すると立て続けに4体のマリオネットを撃破した

「なに！？私のマリオネットを一瞬で撃破だと、それにその腕、そうかお前はアンドロイドだな」

「そうですねにか」

腕を元に戻してそう答えると

「そうか、ではお前を捕獲して私のコレクションに加えてやつ出てこい私の最高傑作！」

男が叫ぶとKOS - MOSの周りに10体以上のマリオネットをが現れた

「お前がさつき壊したのは最低ランクの物だしこいつらは最高ランクのマリオネットだしかもこの数、降参した方が身のためだぞ大丈夫お前の躯体は私を手を加えて大切にしてくれる」

「お断りします。それに私を倒したかったらこれの100倍は連れてくるのですね。F・GSHOT」

「なめるなあーーーーー！」

~~~~~

命照 VS バイオモンスター使い&超能力者

少し離れた所で起こる爆音を聞きながら俺は二人の密漁者と戦っていた。バイオモンスター使いと案の定超能力者とだ、とりあえず動けない3人とかばいながら何とかやっている感じだが。

「むう〜まずいなあ」

「君大丈夫かい！？」

「ええ大丈夫ですよ。」

しょうがないなアレをするか。・・・龍虎皇頼んだよ。・・・ああ頼りにしているさ

「ここを動かないでくださいね。」

そういうとバイオモンスターに向かって走り出した

「おいおい守らなくていいのかよ」と

超能力者の方が3人に向かって攻撃すると3枚の盾のようなものが3人の前に現れて攻撃を防いだ

「何だと!？」

「あれはもしかや光鷹翼!？あの子供本物だったか」

ふう〜これで守りは大丈夫、これは使わない予定だったのだが、まだまだ修行が足りないな。

「さていくぞ!」

手に持っていた光鷹剣を握りしめ敵に向かっていった

「魔神剣!!! 虎牙破斬! 驟雨虎牙破斬!」

「なんだその技は、僕のかわいいバイオモンスター達が」

チャンス!

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 焦

熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ 破道の三十一「赤火砲

!!!」

「なんだ!ふぎや!」

「さらに縛道の四「這縄はいなわ」

「なに動けね!？きさま何しやがった!？」

ふむ力がない奴はなにも見えないのが

「貴様!よくもやりやがったな、食らいやがれ!」

「大地の護りよ・包め・バリアー」

あぶねー間に合ったぜ

「なんだって!？俺様の力が効かないなんて何なんだそのフィール

ドは!？」

「今度はこつちから行くぜ。「この重力の中で悶え苦しむがいい・

・グラビティー」

「なんだこの異常な重力波はくそ動けねえ!」

「あれは重力魔法!？しかしあの人が使っていたのとは少し違う?」

「縛道の四」這はいなわ縄つとこれでおしまいだ」

~~~~~  
ふう〜疲れた初めての实战がこの結果なら文句ないだろう

「命照様、こちらも終わりました。」

「御苦労さま、KOS・MOS、このあとこいつらを船の牢に入れてからGPに引き渡すから連絡の方お願い」

「了解しました。」

「疲れた。少し寝る」

「お疲れ様です。命照様」

本当に疲れたもう少し体力つけないと帰ったら修行しなきゃ

「ええ〜と君達危ないところを助けていただいたいてありがとうございます」と事情を聞きたいのだがいいだろうか

「はい、命照様を落ち着いて寝かせたいのでお願いできますか」

「ああ近くに私の家があるからそこで」

「わかりました。案内お願いします」

「ではこちらです」

そついうと詠春は安心して寝ている2人を抱き上げ歩き始めた。KOS・MOSは密漁者を船に転送してから後を追った

地球来訪編2（後書き）

どうだったでしょうか？BLEACHの鬼道やテイルズの魔法に技を出してみたのですが戦闘シーンは難しいなので今のところはほぼ一方的なご容赦を
次回は近衛邸でのひと時です。

地球来訪編 3

チユン・・・チユンチユン・・・

「知らない天井だ・・・さてボケはここまでにしてここはどこだ？」

そっぴいながらあたりをキョロキョロしているところから視線を感じて振り向いてみると扉の障子を少し開けてこちらを見ている顔が二つ

「君達は・・・」

命照が声をかけると覗いていた二人は驚いてどこかにいってしまっただ。どうしようか迷っていると障子が開きKOS・MOSが入ってきた

「命照様起きられましたか」

「ああKOS・MOSおはよう。それにしてもここはどこだ？」

「その事でしたら、ここは「命照君、起きられましたか」この方のお屋敷です」

KOS・MOSが話そうとしていたところに別の人が入ってきて中断された。入ってきた人物はあの日助けた男性と先ほどここを覗いていた女の子であった。

「ええっと」

一応知ってはいるが知らないふりをすることにした

「申し遅れました。私は近衛 詠春と申します。こちらは娘の木乃香と家で預かっている刹那君です」

「近衛 木乃香や、よろしゅうな」

「桜咲 刹那です、よろしく・・・」

3人は自己紹介すると布団の周りに座った。

「これはご丁寧には、柁木 命照といます。よろしく」
命照は樹雷の名を出さずに自己紹介する。

「命・・・照・・・君やな、ちよつと言いにくいなあゝねえみよう君っ

「てよんでもええか？」

「こら木乃香、初めての方になれなれしいですよ」

詠春は木乃香をたしなめると命照は

「いえいいですよ。好きに呼んでもらっても」

「ええの？じゃうちのことはこのちゃんって呼んで」

「わかったよ。このちゃん」

「このちゃん・・・」

「なに？せつちゃん？」

木乃香の後ろに隠れるようにしていた刹那が木乃香の袖を引っ張って何かを伝えてる

「みよう君、せつちゃんもうちと同じように呼んでもいいかって」

「ん？いいよ。じゃあ俺もせつちゃんって呼ばせてもらおうね」

「（こくこく）」

余程恥ずかしいのか首を振るだけではあるが顔はうれしそうだ

「木乃香、刹那君、私はこれから命照君と大事な話があるから外で遊んできなさい」

「えゝもうちよつとええんとちゃう？」

「木乃香」

「別に一緒にいいですよ。」

「ですが、それだと・・・」

「

「それで詠春さん、話とはなんですか？」

先に問いかけたのは命照だった

「ええそれはですね。昨晚のあの侵入者なんですけどいろいろと調べさせているんですが何も出てこないんです。命照君、あなたは知っているんですよ。あの者達のことを教えてもらえないでしょうか」

「わかりました。ですがその前にKOS・MOS昨晚、俺が倒れた後のことを教えてくれ」

「了解しました」

詠春の問いかけを先延ばしにしつつKOS・MOSからの報告を聞く

~~~~~回想ちゆう~~~~~

「KOS・MOS後のことは頼むぞ」

命照は倒れながらKOS・MOSにそう伝える。いそいで抱きかかえると命照の安否を確かめる

「命照様!?!?!眠っている。お疲れ様です。後のことはお任せください」

KOS・MOSはそういうと密漁者をGPに送りつける手配をするためにその場を離れようとするその後ろから引きとめる声が出た

「ちよつと待つてくれないか?その子は大丈夫なのかい?なんだつたら私の屋敷はすぐ近くだから休んでいったらどうだい?」

「そうですね。お言葉に甘えさせてもらいます」

(この方たちに事情も話さないといけませんし、このまま船に行ったら先ほどからいる方達に探知されかねませんし)

「ありがとうございます。ではこちらになりますのでついてきてください」

詠春はそういうと緊張から解放された木乃香たちを抱き上げて進んでいった。KOS・MOSは片手に命照を抱きもう片手で3人の密漁者達を引きずっていった

近衛邸

「着きました。ここが私の屋敷です。」

着いた先は事件が起きる前、命照が登って道を聞こうとした階段の先にあつた。屋敷は純和風の大きなお屋敷である

「誰かいませんか!?!」

詠春は少し声をあげて叫んだ

「はい。お帰りなさいませ。旦那さま・・・そのお姿はいつた?」

「ああ木乃葉さん。話しは後でしますので布団の用意をしてもらってもよろしいですか。」

「わかりました。2つでよろしゅうございますね」

「いや、3つ頼むよ。お客さんがいるんだ。」

「あら、かわいい男の子ですなあ。失礼、はい、よろしゅおす」  
そういうと女性は奥に歩いて行った。

「では、命照様のことしばらくよろしいですか」

KOS・MOSはそういうと命照を下し詠春に告げる

「あなたはなにに行くのですか？」

「この者たちを届けに行つてまいります」

KOS・MOSがそういうと密漁者達を引きずりながら猛スピードで駆けて行った。

「あつ待つてください」

呆然としている間もなく妻木乃葉がやってきて布団の用意ができた  
と伝えられたのでしようがないので寝ている3人を寝かせに行くこ  
とにする。廊下を歩いているとKOS・MOSを追っていたものが  
返ってきた

「ご苦労様です。早かったですね」

「若、申し訳ございません。見失いました。気配もなくとても速く  
追いつけませんでした」

「わかりました。下がっていいですよ」

(うちの手の者をまくなんで、なにか転送魔法でも使ったのでしょ  
うか?)

詠春が思ったことはあながち間違えではない。KOS・MOSは近  
衛邸を出て猛スピードで監視の目を振りほどき反応がなくなったと  
ころで龍虎皇に轉移したのだ。船に戻った後はGPに連絡し密漁者  
を引き渡して戻ってきたのである

~~~~~回想終了~~~~~

「報告はこれで終わりです。後は書類で」

KOS・MOSの報告を聞いて

「なるほど、ありがとう報告書は後で見せてもらつよ」
などと言っているとしびれを切らしたのか詠春が

「命照君先ほどの答えはどうなんですか」

「あつすいません。例の者達のことですけど今のあなた達にお教え
できません」

「何故なのですか？あの者達がいつていたことは私達にはわからな
いことなのに命照君、君は知っているんですね。何故教えてくれな
いのです」

詠春は詰め寄りそうになるくらい気分が高ぶっている

「私達は一般人ではないのですよ。いくなれば裏の人間、きっと君
もそうなのでしょう。魔法関係の秘匿は無用です。お願いします」

「裏の人間の意味はわかりませんがわかりましたいいでしょう」

「命照様いけません決まりが」

「わかっている。しかし自分に起きたことぐらい知ってもいいじゃ
ないか。責任だったら俺が取る」

「わかりました。そこまで言うのなら・・・プログラム発動・・・
閉鎖空間構築・・・完了しました。これでこの空間は閉鎖されまし
たので外部に漏れることはありません」

「KOS - MOS ありがとう」

「これはいったい？」

KOS - MOS が結界を張りこの部屋を閉鎖し外部との接触を断つ
たのである。

「では詠春さん、これから話すことは全部事実ですのでいいですね」
「はいわかりました」

~~~~~説明中~~~~~

~~~~~

「っといわけです。これでわかったでしょう」

小一時間の説明を終えて一息ついている命照に比べ詠春は真実を受け
入れている最中なのか放心状態になっている。

「いくなれば、あなた達の言う魔法秘匿の法と同じなので
す。今回はあなたの熱意に敬意を払い説明しましたが、このことは
他言無用ですよ。お分かりですね」

「ええわかりました。私も魔法に与する者、秘匿重要性は重々承知

です。では部下の者にこの件に関しては詮索無用と伝えてきます」

「それと説明だけでは何ですから、証拠をみせて上げましょうか」

「それはいつたい？」

「あーそうだあの子たちも呼んでもらえますか。さっきから会いた
いっているやつがいるんですよ」

「えっ？それは・・・わかりました。少しお待ちください」

そういつて詠春は木乃香達を呼びに出で行った

数分後に詠春は二人を連れて帰ってきた

地球来訪編3（後書き）

今回は少し長くなったので分けます。木乃香と刹那の口調がわかりません。すこし変だとは思いますがご容赦をいろいろと変えています。

地球来訪編4（前書き）

前回の続きです。どじろ

詠春はそういうと外に出て行ったこの時はまだKOS・MOSの張った結界は働いていたが詠春が出ていくと同時に消滅した。その後、数分もしないで扉が開くと詠春は二人を連れてきた。木乃香達は花冠を作っていたのか、その手には少し歪だが花冠が二つあった。

「これな、みよう君のために二人でつくったんよ。受け取ってくれへん？」

「……………どうぞ…あげる」

二人で差し出す花冠を命照は両手で受け取る

「ありがとう。大事にするよ」

花冠を受け取ると二人は向かい合って笑った

「お礼に俺のとおっておきの所に招待するよ」

「命照君、さっき言っていた証拠って奴かい……………」

詠春は先ほどいた証拠という事なのかと聞いた。それで命照は

「ええそうですね、じゃあ三人とも目をつむって俺がいいというま
で目は開けちゃだめですよ」

「ええ、わかりました」

「うん、わかった」

「(コク、コク)」

三人は目をつむった。そんな三人を見た命照は

「よしじゃいくよ」

そういうと五人の周りが光はじめとあるところに転送された

「もう目を開けてもいいよ」

命照は二人にそういうと二人は目を開け驚いた

「ここどこ？むちゃきれいな場所やな」

「(ぱあ〜)きれえ〜」

ついた先は龍虎皇の力で亜空間に固定してある自分の居住区であった
「気に入ってくれた？」

「ここは一体？」

詠春は目の前に現れた風景に驚いていたが木乃香達は驚くどころか
楽しそうに見えた

「うん、ここどエライ場所やね。でもむちゃ気に入ったでえ」

「（ぽお〜コクリ）気に入りました」

「それはよかった。あとねこれもあげる」

そういつて差し出したのは皇家の樹の枝で作った櫛とペンダントだ
った。櫛は一對のものでマールブル状の朱色の樹液の宝石あり樹雷伝
統の模様が入った物、ペンダントは3cm位で真中に藍色の樹液の
宝石が入っていて周りには櫛同様樹雷伝統の模様が刻まれている物
である

「えっ、こんなすごいもん、貰えへんよ」

「そうだよ・・・」

「いいんだよこれは俺が作った物でうちではありふれたものだから、
受け取ってほしいんだ」

命照はそういうと二人は相談し笑顔で受け取った

「うちは櫛、もらうな」

「じゃあうちはペンダント・・・」

「ありがとう」

「それへんやで、礼いうんはうちらや、せっちゃんせーの」

「おおきにな」

二人はそういうと命照に抱きついた

「あつちよつと・・・危ないよ」

「えへへへ」

「命照君、あとで話があります」

「えっ詠春さん？」

ほっぺにチューだけだったけれど詠春は黒いオーラを放ち命照に話
しかけた

その後命照は部屋で少しお茶をしようと言ったが木乃香はまだ外で
お散歩したいと言ったのでKOS・MOSを同伴させ木乃香と刹那

は散歩に行っている。

命照と詠春は部屋でお茶をしていた

「命照君、これが証拠なのです。確かに広すぎますけど我々でも作り出せますよ。」

「ああここは私の部屋ですので証拠の方はこちらです。」

そういつてKOS・MOSに通信を入れた

「KOS・MOS二人をブリッジに連れてきてくれ」

「（了解しました）」

「命照君、ブリッジって一体？」

「ついてくればわかりますよ」

そういつて命照は詠春をつれ転送ポートに乗った

着いた先はちよつとした公園のようだった

「ここは・・・」

「あつみようくんや」

先についていたのか木乃香が命照の所にやってきた

「詠春さん、さっきから言っていた証拠とはこれですよ。」

命照がその声を上げると壁の部分が透けて外が見えるようになった

「これは・・・黒い壁になっただけ？いや違う・・・まさか！」

「そう、ここは宇宙に浮かぶ船の中さ」

そういつと目の前に地球が現れた

「わあ〜きれ〜、ねっせつちゃん！」

「すごーい」

木乃香と刹那は目を輝かせて周りの風景を地球の姿を見ていた

「しかしさきほどの部屋があつた所から考えるとかなりの広さになるはず・・・いくらなんでも地球からわかるはず・・・」

詠春は命照の部屋を見ているので船というならかなりの大きさになっているだろうと考えていた

「ああそれな、さっきの部屋は亜空間に固定しているんだ。こいつの力でな」

命照は地球の見える方の逆の方を指差した

「えっ誰ですか？」

「こいつだよ、こいつ」

命照は奥の方にある樹の方い歩きその樹に触った。

「冗談ですよ。だって樹ですよ」

「まあ無理もないか・・・この樹は皇家の樹・・・その力銀河も統一できるほどに有り余る」

「ねえーみよう君、この子、喋るん？」

「ん？なにか聞こえるのか？」

「うん、聞こえるえ。ねっせっちゃん」

「うん、さつきから話しかけてきてるよ」

「そうか、聞こえるか、出ておいで龍虎皇」

命照がそういうと樹の葉が光りはじめた

「きゃん、くすぐつたいえ」

「（コノカ・・・セツナ・・・）」

「くん、きゃ、やあ」

そして光がおさまると今度はどこからともなく子虎が出てきた

「あゝかわええなあゝおいで」

木乃香が手招きすると寄ってきた

「きゃーホンマにかわええなあゝ」

木乃香は抱き上げ撫でてしていると今度は刹那の方にまた子虎がやってきた

「かわいいー」

木乃香も刹那も夢中になつてるとまた木虎がやってきた。そうしてだんだん数が増えてきた子虎が木乃香と刹那を覆い隠した

「木乃香！刹那君！」

「大丈夫ですよ。ただじゃれついてるだけですから」

「じゃれつくですか？」

「ええ、この子虎は疑似体、つまり本物じゃないです。私のイメージを読み取った龍虎皇の体です。この小さな龍もね」

そういつて今度は虎ではなく龍が現れた。その龍は命照の肩に止まったが詠春の所に飛んで行った

「これは……わかりました。これでも私は剣士、相手の力を見抜く力はまだ落ちては無いでしょう確かにこの龍や虎からは途方もない力を感じます。あなたを信じますよ。」

そうして子虎に埋もれた木乃香達を助け近衛邸に帰ることにした

その後は詠春と母親の木乃葉と木乃香と刹那と一緒に夕飯を食べもう一晩泊って行った。そのさい寝るときに木乃香と刹那が一緒に寝ようと言ってきたのには命照は驚いたがしょうがないので一緒に寝た次の日昼前に帰ることにして命照たちはみんなにそう告げると

「では俺、そろそろうちに帰ります」

「ええ、もう帰るん？まだええやないの」

「木乃香わがママを言わないの命照君にもいろいろあるんだから」

「でも」

木乃香はまだ納得いかないのか膨れているがそれをよそに詠春は別れの挨拶をしていた

「命照君、いろいろありがとう今度またうちに来てくれたまえ歓迎するから」

「はい、ありがとうございます」

挨拶が終わると身支度を整え門の近くまで来ると

「みよう君またあえるん？」

「みよう君……」

「大丈夫、二人がその櫛とペンダントを持っている限り俺は君達の所に行けるよ」

「じゃ約束な」

「ああ約束だ」

三人は再会の約束をし命照は階段を下りて行った

「ばいばい、みよう君またなあ、櫛は大事にするえ」

「みよう君、ほなああ」

二人は命照が見えなくなるまで手を振り続けた。

これが将来の第一夫人と第三夫人との出会いであった

~~~~~

龍虎皇内

「命照様、今回の件は始末書だけでは済まないかもしれませんよ」

「ああわかつている。しかしあの子が近い未来東洋随一の魔法使いと呼ばれるようになる近衛木乃香とその護衛白亜の剣士桜咲刹那がまた会えるといいな」

「命照様、聞いているのですか」

#### 地球来訪編4（後書き）

やっちまった。この話のヒロインは木乃香と刹那になりました。まだいるかもしれませんが当分はこれでいきます。

忘れてましたがこの主人公今の所まだ5歳ですが、本当に5歳児かっつて行動と口調ですがそこるところもご容赦をお願いします

このか達に龍虎皇を紹介

### 樹雷編 3

地球を出て父と母と合流し超長距離ジャンプによって樹雷に帰ってきた命照は地球に置いてきた龍虎皇の分身のことを考えていた。

地球を出る少し前

近衛邸を出たとある山に転移した命照は龍虎皇に呼びかけた

「龍虎皇よ、済まないが木乃香達を見守ってくれないか」

「（イイヨ、マカセテ、デモミルダケシカデキナイヨ）」

「ああ、それでいい木乃香達に何かあってもお前が元気づけられれば何とかなるさ」

「（ウン、ワカッタ）」

そういつて龍虎皇は力の一部を木乃香と刹那に渡したプレゼントの宝玉部分に忍ばせた

~~~~~

「命照様、龍虎皇様を置いてきて大丈夫なのですか？現地人との繋がりを残すことは禁止されているはずですけど」

「KOS-MOS、俺等しか知らない事だ、言わなきゃわからん」

「それはそうですが・・・」

「なに心配いらぬ。力といても姿を現すだけで他には何も無い」

「命照様、そろそろお時間ですが」

「そうか、これから父上に地球でのことを報告しに行ってくる」

「わかりました。お気をつけて」

こうして命照は父樹雷皇の執務室にやってきた

「父上、命照です。入ります」

「うむ、はいれ」

命照が入るとそこには父樹雷王阿主沙と母船穂に美砂樹と知らない

女性がいた髪はライトグリーンでポニーテルにた髪形をし二人の母とは違う雰囲気を放っていた

「どうした命照」

「いえなんでもありません。」

見知らぬ女性のことを考えていたら樹雷皇から声がかかり意識を元に戻し近くによる

「命照よ。地球での一件よくやった。がその後現地人にいろいろ説明したようだ。現地人には接触はおろか宇宙のことを説明するなどどういうことだ」

「申し訳ございません。しかし父上、たしかに現地の人に説明はしてしまいましたがその者には他言無用と念を押ししましたし信用もしていません。」

「その者が喋らないという確証があるのか？」

「はい、今地球では我々の知らない力を持った者たちがいるようです」

「力だと？」

命照は密猟者と戦う詠春のことを伝えた。命照は帰りの際、地球のことを徹底的に調べ上げその過程で魔法使いの存在や魔法界などのことも知りそのことも踏まえ報告をすることにした

「なるほど生体強化もなしに海賊と渡り合うか」

「はい、その者達は表と裏と分けて活動しているようです。表には見えないように活動するということは我々と共通することがあると申しておりました。なので大丈夫だと」

「そうか」

「それにしても地球にそのような力を持つものがいたなんて700年前は知りませんでした」

船穂は自分の故郷の秘密を知り驚きの声をあげた

「それにしても命照ちゃん、あの人と同じで地球に行ったら密猟者に会うなんて何か運命を感じるわね。地球に気にいった子でも居たのかしら？」

「美砂樹ママ！？なにをいきなり！？それよりも先ほどからいらっしやるこの方はどなたなのですか？」

「ああ紹介が遅れたな、このクソバ・・・いやこの方は・・・」

「そこからは私がいいますわ阿主沙殿、はじめまして私は神木・瀬戸・樹雷よ。そこであなたに抱きついてる美砂樹の母親よ。」

「美砂樹ママちゃとはなして、すいません、私は柁木・命照・樹雷です。瀬戸様の噂はかねがね」

「どんな噂かは大方見当はつくけどまあいいわ。阿主沙殿、報告はこれくらいでいいでしょう。命照殿を少し借りますわね。」

「好きにしる、ちゃんと返せよ」

「お母様、あまりいじめないでくださいね」

「わかっているわよ。じゃあ行きましょ」

瀬戸はそういつと命照を連れて自分の船に連れて行った

「命照殿、いきなり連れてきてごめんなさいね。ちよつとあなたに紹介したい子がいるのよ」

「はあ〜」

そんな会話をしている間に瀬戸の船に着いた

「これが私の船、樹雷第二世代艦『水鏡』よ」

瀬戸はそういつて船を紹介した。その船は名前が由来であろうつまるで水の鏡のような巨大なプールのようなところがあった

「じゃ行きましょ」

そういつと二人は水鏡に転送された。転送されたのはブリッジでそこには男女二人いた

「お帰りなさいませ。瀬戸様」

「ええただいま水穂ちゃん、でこの子が命照殿よ」

「はじめまして、柁木・命照・樹雷です。よろしくお願いします」

「はじめまして私は第三艦隊司令官兼情報部副官 柁木水穂です。」

「はいめまして私は第七聖衛艦隊司令官 平田兼光です。」

三人はお互いに自己紹介をした。命照は水穂が柁木姓だったのが気になり聞くと

「瀬戸殿、水穂殿は・・・」

「ご推察の通り、あなたの兄、遥照殿の娘になるわ。つまり命照殿にとつては姪になるわね」

「やはりそうでしたか。兄がいろいろとご迷惑をすいません」

「いいいいのよ。お父様もいろいろあるんですから。それにあなたはまだ幼いだから気にしないの」

「そうだぞ、遥照の奴のことで君が悩む必要はないんだ」

水穂と兼光は命照を慰めるように兄である遥照を責めるように言った

その頃地球では

「へつくしゅん」

「じつちゃん、風邪？」

「いやこの感じは誰かわしのことを噂してるんだろっ」

地球でのやり取りなど露も知らずに命照は自分の知らない兄の話をアカデミーで一緒だった兼光からいろいろ聞いていた

「兄上はそのころはそんな感じだったんですね」

「そうだな。いまではあいつは少し年くつたになつたが昔はそんな感じだった」

「もう兼光様、お父様のことはあまり変に言わないでください」

そんなやり取りをしていると瀬戸が命照にあることを訪ねた

「命照殿、先ほどの地球での話をもっと詳しくお願いできるかしら」
「わかりました。話の後に詳しいことをまとめたものを送ります。」

そついうと命照は先ほどした話よりももっと詳しいことを瀬戸に説明しKOS・MOS魔法関係のデータを送るよう通信をした

「なるほどね。魔法ねえ」

「信じられませんな。しかし送られてきたデータを見る限り真実ですし」

「生体強化もなしに海賊と渡り合える力ですか、確かに白兵戦では有効ですがまだ航行技術の乏しいものですから心配することはないのでは」

「そうとも言えないわよ。データを見る限り魔法とは高位次元の生命体から力を借りて行うということかも知れないということは一人で樹雷の船と渡り合えるかもしれない存在になるやもしれないわよ」

「そんなでたらめな話」

「それも踏まえて今後この者達のことをもっと知る必要があるかもしれないわね」

瀬戸はそういつと命照から提出されたデータに極秘の判を押した

「それとは別に命照殿、あなたは今後どうするの？」

「どうすると申されても、一応2年ほど修行するつもりです。美砂樹母上には話しておりますので明日からでも始めるつもりです」

「無茶よ。命照君はまだ5歳ですよ。さすがに美砂樹様に稽古付けてもらうのはちょっと・・・」

「水穂、覚悟のある男の子を止めるのは野暮つてものよ」

「ありがとうございます瀬戸様。あとは2年程修行しましたらその後アカデミーに入学したいと思っています」

「そう、ではこれからはたまに会いましょうね。いろいろとお話したいし」

「ええ私もですよ」

「気にいられたな。遥照の弟も」

「ええでもこれはこれでよかったのかもしれないね。兼光おじさま」

「まあな」

こうして瀬戸とは修行の合間にたびたび会い親睦を深める命照の姿があった

そして2年の歳月が流れるのであった

樹雷編3（後書き）

今回は瀬戸その剣と楯の登場でした。瀬戸は魔法使いの危険度に付き監視も必要かもって考えてますがまだしてません
あとこの主人公、原作知識あるのかないのかわからなくなってききました。

次回はGXPのキャラも出てくるかもです

アカデミー編1

命照が瀬戸とあって2年の歳月がたっていた。そしてここは天樹の中にある訓練場

「はっ！！」

パシッ

「ふん！」

そこで訓練していたのは命照と美砂樹であった見学者には船穂と瀬戸もいる。命照は二振りの木刀を持ち美砂樹は素手である

「とう！・・・はっ」

命照は二本の剣をうまく時間差で仕掛けるが美砂樹は苦も無く払い投げ飛ばした

「ぐはっまだまだ」

そういうと命照はきりかかった。きりかかる命照にそれを巧みによける美砂樹、さながら演武をしているようにも見える

「ここだ！」

シュッ

命照の剣は美砂樹の喉元に美砂樹の拳は命照の顔の前に会った

「そこまで！」

見学していた瀬戸の声が訓練所に響き渡る。そして汗を流したとラウンジで美砂樹は

「命照ちゃんよく2年もの間弱音も吐かずに訓練に挑みましたね。

これで私が教えられることはもうなくなりした。命照ちゃんももうりっぱな樹雷闘士よ」

「はい、ありがとうございました。」

「命照これで明日から銀河アカデミーの方に行くつもりなの」

母の船穂が心配そうに聞く

「ええそうですね。今から出発すれば今期の入学式に間に合いますので」

「わかりました。たまには帰ってくるのよ」

「はい。わかりました。」

命照は船穂にそういうと自分の部屋に帰って行った。

次の日

見送りには父樹雷皇に母船穂、美砂樹に瀬戸まで来てくれていた

「命照よしっかりと勉強に励むんだぞ」

「はい父上頑張ります。」

「命照、寂しくなったら帰ってきてもいいですよ。」

「母上え〜大丈夫ですよ」

「命照ちゃん頑張つてね」

「はい、美砂樹母上もお元気で」

「命照殿、アカデミーに着いたら案内人を用意しているからね」

「瀬戸様、ありがとうございます」

「ではいつてまいります！」

命照は皆に挨拶をし龍虎皇に乗り込み樹雷星を後にした

「いってしまいましたね。」

「大丈夫だろ、遥照のやつもいったんだそれに・・・」

「では阿主沙殿私はこれで失礼させていただきます」

「ああさつさとどっかいつちまえクソババア」

「あーらそんなことを言うのはこの口かしら〜」

瀬戸は悪口の言った阿主沙の口をひっぱた

「あらあらお母様ったら」

そこには朗らかな空気が流れていた

~~~~~

「でけーなーってそんな言葉じゃ収まらないか」

銀河アカデミーに着いて最初の出た言葉がそれだった。

銀河アカデミー樹雷皇立をへて銀河連盟所属となった銀河中の知識の宝庫であり人類の現在の繁栄を根底から支えてきた施設でもありそしてパンドラの箱でもある

「さていくか。KOS・MOS」  
「了解です」

命照はそうとうと銀河アカデミー中央星のエアポートに向け、着陸体勢に入った。

エアポートに降りつたた命照はとりあえず瀬戸の言っていた案内人を探すことに・・・その必要はなかった「歓迎！柎木・命照・樹雷様！」とでかかかとフリップをもった女性がいた

「はじめまして、私が柎木・命照ですが」

フリップを持っていた女性にそうとうと女性が

「あら、やっぱり似ているわ、あの頃のあの人に」

「はい？なんですか？」

「いえなんでもないわ、はじめまして命照ちゃん、私は柎木アイリよ」

「はじめまして、ん？柎木？」

【アイリ理事長、例の少年が到着しましたので理事長室まで来てもらえますか】

命照とアイリの間になんか通信が来るとアイリは

「命照ちゃん話は私の部屋でしましょそうしましょ」

「はあ〜？」

命照は何が何だかわからぬうちにアイリに引きずられていった

「KOS・MOS〜船の警護頼んだぞ〜」

KOS・MOSになんか伝える精一杯なのか猛スピードで消えていった  
理事長室

アイリに連れられて理事長室に入るとそこには人が数名がいた

「ごめんなさいね。遅れちゃったみたいで」

「いえ大丈夫ですよ。この人たちも今到着しましたから」

そーとうとアイリは理事長の椅子に座った。命照はとうとうと先にっいていた人たちの左後ろに立っていた

「ではあらためてはじめまして山田西南君、私はGPアカデミー校長、九羅密美守です。そしてこちらが銀河アカデミーの最高権力者

である柎木アイリ理事長です。それとようこそおいで下さいました柎木・命照・樹雷様、ご入学おめでとうございます。」

美守は自分とアイリの紹介をし西南と命照に挨拶をすると今まで気付かなかつたのか前に立っていた2人は一斉に後ろを向いた

「命照様お久しぶりです。しかしいつこちらに？」

「今さつきだよ」

面識のある霧恋は命照に気付き挨拶をする

「美守様？今なんておっしゃいました？柎木？霧恋お前の知り合いか？」

「ばか！？雨音知らないのこの方命照様は樹雷皇のご子息で第二皇子なのよ」

二人はそんな会話をしている中、命照は西南の所に歩み寄り

「はじめまして山田殿、柎木・命照・樹雷です。よろしく」

「えっあつはじめまして山田西南です。え」と

「あつ命照でいいですよ」

「じゃ俺も西南でいいよ。よろしく命照君」

「西南ちゃんその方がどんな人かわかっているの？」

霧恋は瀬戸の部下であるため会うことがたびたびあり西南の行動に冷や汗ものだった

「はいはい雑談はそれくらいに下さい。」

「本題に入りましょう。」

さてと空気を変えてアイリは話し始めた

「まず正木霧恋さんの意見から聞きましょうか。あつ命照ちゃん少し待っててね」

そういうと霧恋が西南についていろいろと話し始め地球に帰るように説得も始めた雨音に対しても意見を聞き最後には西南の最終意思を確認するそして西南のG Pアカデミー入学が正式に決まった瞬間であった

「そうと決まったらさっそく手続きに行きましょそうしましょ。命照ちゃんもよ」

西南と命照はアイリに案内と称して引きずられていった

「あ〜ちよつと〜」

さげふ西南をよそに二人を連れだすアイリであった

アカデミー事務本部

ここには命照と西南のアカデミー入学の手続きをしに来たそしてそれが終わったあと

「ああそつだ私のことはアイリでいいわよ」

そんな時アイリを呼ぶ声が聞こえアイリがそつちに向かうと

「お前が山田西南だな？」

突然、命照たちの前に人影が立ちはだかる

「・・・？はい、そうですが？どちらさま・・・」

西南に話しかけてきた男に見覚えのある命照は首をかしげた

「私は地球人がきらいだあー」

「新入生を威嚇するな！」どこっ！

「じゃかーしいわ！」ばきっ！

そんな声を聞いた命照とアイリは神速の速さでその男を吹き飛ばした

「命照君？アイリさん？」

「ああすまん。どうもあの言葉はいやでな」

「これはこれはアイリ様、それに命照様お久しぶりです。それにしてもいきなりなにをするのです」

二人の攻撃に服のみぼろぼろだが体は無傷な男は何もなかったように話し始めた

「「地球人がなんだつて！」」

二人は同時に同じ言葉を男に言い放った

「はて私は何か言いましたかな。では私は用事がありますのでこれで失礼！」

そついうと男はすすつといなくなつた

「誰ですか？あの・・・ヘンな人？」

こう形容するしかない言葉でいう

「GPアカデミーの講師よ」

「えっ教師なんですか!？」

西南は愕然としあの人の授業がどうなるか心配になった

「あれは天南静竜と言ってね。昔は樹雷皇族との婚約者候補までいった人物なんだけど実力も申し分ないんだけどね・・・当時からへんな言動はしてたんだけど」

アイリと命照は苦笑した

「まあそのときはまだバランスは取れてたんだけど天地ちゃんとの決闘に負けてからねじがはずれちゃってね今ではあんな感じなのよ」

「まあ天地兄さんは何も手は下してないけどね」

命照はあのときのことを思い出し笑いそうになった

「あのそれより天地ちゃんってやっぱり柁木天地先輩ですよね？」

やはり知りたいのはあまり関わりたくないものより知っている人のことだ

「・・・いつたいどういうことなんですか？」

「瀬戸様にも少しは聞いたと思うけど、少し詳しく教えましょう」

アイリは小さく咳ばらいをし樹雷とアカデミーについて、そして天地や霧恋にも関わってくる壮大な話であった。

話は終わり西南は一番の疑問を聞いた

「それでアイリさんは柁木姓ですけどどのあたりなんですか？」

「私？私は天地ちゃんのお爺さんの遙照なのよ」

あげた手に輝くエンゲージリングがあった

「ああーそうなんですか。つまり天地先輩のおばーさん・・・」

「おばーさんいわない!」

即座にきつつい突っ込みがかかる

「すみません」

この時まで黙って聞いていた命照はここで声をあげた

「うん？という事は・・・俺の義姉さん!」

「いきなりどうしたの命照ちゃん!？っていまままで気付かなかったの?」

「えっ?うっ!すみません・・・」

「いいのよ。私もちゃんといわなかったんだから」

命照はうつむきしゅんとなつてるところをアイリは慰めているおかげで西南の失言がうやむやになりまた西南があることを聞く

「アイリさん、瀬戸様のところで榎木水穂って方にお会いしました  
が、あの人とどういう関係なんです」

「あ、そう。あの子は私の娘なのよ。そして命照ちゃんは叔父さん  
なのよ。」

「そうなんだよ。ついでにいうと婚約者でもある」

「そうなの!？」

そう2年の間よく瀬戸の所に行ったせいか水穂とは仲良くなり命照が成人するまでにお互いに好きな人ができたら解消するという条件で婚約者の儀も行っていた

「じゃお話はこちらはここまでにして次いきましょ」

「はいアイリ姉さん」

「きゅん!もう命照ちゃんてっばかわいい」ブンブン

そういうとアイリは命照を抱き上げ振りまわした。そしてそのまま歩いて行った

「アイリ姉さん下ろして」

「いやよ。しばらくこのままで行きましょ」

そうして命照を抱きかかえたまま西南をつれて次の目的地にある  
って行った

こうして西南と歩いて霧恋のいう不運を目の当たりにし命照は今後  
の生活が楽しみになった

## アカデミー編1（後書き）

婚約者に柁木水穂登録、まあなくなるかもしれないがこれでよろしく願います。最近、前世の記憶が無くなってるんじゃないかと思われる主人公であった  
次回は木乃香達のお話です

## 地球外伝1

命照が樹雷にて母達と共に訓練をしている時とは別に、地球ではとある子達の運命が変わり始めていた

地球日本京都

「せつちゃん、川の方で遊ばへん」

「このちゃん、川は危ないからあまり近づくなつて長がゆつてたよ」

「お父様がかあ〜？ええやないの少しぐらい。いこ〜」

「このちゃんまってなあ〜」

木乃香は止める刹那を尻目に川の方に走って行った。

「このちゃん！危ない！」

「え？」

「ガウ~~~~ワン！ワン！」

「犬さん達なんで怒ってるん？」

「このちゃん危ないから下がろうよ」

「でもこの犬さん達なんか変だよ」

刹那は木乃香を庇うように背中後ろにやり野犬達の方を見た。後ろはすでに川であつた為逃げ場はなくここは屋敷から離れていて助けが来る可能性は低かつた。その時野犬達は刹那たちに向かって襲いかかつた

「ギャウ~~~~！！！！」x3

「危ない！」

「せつちゃん！」

襲いかかつてきた野犬から守るため刹那は木乃香を抱え込むように抱きついた。このとき刹那に噛みつくはずが済んでの所で体を丸めたため噛まれずには済んだものの勢いのついた野犬がそのまま刹那たちに体当たりをしてしまい刹那と木乃香は運がいいのか川には落ちず左右に吹き飛ばされてしまった

「せつちゃん・・・いたっ！」

「このちゃん！大丈夫！？」

「平気やちよつと足ひねっただけや」

二人こんなときでもお互いのことを気遣ってた

「がるるるー！ー！ー！」x3

「がうー！ー！」

そのとき野犬の一匹が刹那に襲いかかった。刹那は近くにあった木の棒で何とかなっているが爪の切り傷などがたまっていた

「せつちゃん！誰かせつちゃんを助けて〜！」

（ダイジョウブ、マモツテアゲル）

「誰や！？誰かおるんやつたら助けて」

木乃香は聞き覚えのある声だが動転していたので気がつかなかったが刹那の前に現れたそれを見たとき涙を流した

「（・・・・・・デテケ・・・）」

現れたのは小さな虎だった。

「虎ちゃん？」

龍虎皇の疑似体の子虎はすさまじい気迫を放ち野犬を追い払った

木乃香はそんな子虎を見て刹那を助けれたと安心したのかその場に崩れ落ちた

「このちゃん！」

叫んだ刹那は急いで駆け寄ったが間に合いそうもなく切羽詰まって忌み嫌っていた烏族の力である羽を出しさらに駆け寄ろうとした時、木乃香をにらんでいた野犬が木乃香に襲いかかった

「間に合わへん、このちゃん」

「（ダイジョウブダヨ、セツナ・・・）」

「えっ？」

子虎が何やら盾のようなものを作り出し野犬を防いだ。そのおかげで刹那は間に合い木乃香を助けることができた

「このちゃん！」

木乃香に駆け寄った刹那は泣きそうな顔で倒れている木乃香を覗き込んだ、

「このちゃん」

「んっせつちゃん・・・大丈夫やった？」

「このちゃん！ごめんね！ごめんね！」

「なんでせつちゃんが謝るん？ここにこよつっていったんはうちや  
でそやから謝るんはうちのほうや・・・堪忍な」

「このちゃん・・・」

二人はお互いに謝り泣いていた

「せつちゃんその背中・・・」

「あつみんとて・・・」

「天使さんみたいやー」

「えっ！？これ怖くないの？」

「なんでえ？すっごくきれいやないか」

「このちゃん・・・」

刹那は自分の秘密を知っても変わらぬ木乃香をみてうれしかった

「木乃香ー！刹那君ー！」

「あっお父様やこつちやでー」

「ああ木乃香大丈夫だったかい？」

「うん、大丈夫や、せつちゃんとみよう君が護ってくれたから」

「そうですね、ありがとう刹那君。それにして命照君がつて・・・  
なるほどそういう事ですね」

こうして無事困難を脱した二人は屋敷に帰って行くのであった。

その日の夜

「長、よろしいですか」

「刹那君？いいですよ入りなさい」

「失礼します。」

「どうしましたか？」

「長！私に神鳴流を教えてください！」

刹那はいきなり頭を下げると詠春にそういった

「いきなりですね。理由を聞いてもいいですか？」

刹那は神鳴流を習いたい理由を伝えると

「そうですね、木乃香のために・・・いいでしょう明日からでも神鳴流の道場に来なさい。」

「はい、ありがとうございます。」

「あと木乃香ですが来週に義父のいる麻帆良学園にいきますので挨拶をしといてくださいね」

「えっ？なんでですか？」

「ここにいるよりも義父の元も方が安全だと判断したからです。安心なさい君も神鳴流を扱えるようになったのなら木乃香の護衛として送ることにしますからそれまで鍛錬を続けなさい」

「はい、わかりました。」

そういうと刹那は部屋を出て行った

「命照君に出会ってあの二人も変わりました。あのとき感じた力は木乃香の力なのか？それとも・・・」

~~~~~

「そうか、刹那は自分の秘密を明かして木乃香を守ったのか。俺の知っている歴史とは変わってきているのか・・・俺とあっている時点で考えれば当たり前か」

命照は二人の行く末をあんじていた

地球外伝1（後書き）

今回は木乃香と刹那の決意の場でした。このことがあり原作のよう
に仲たがいはしない予定です。精霊の代わりに龍虎皇の子虎が助け
ることにしました

アカデミー編2

命照がアカデミーに来て3年の歳月が過ぎた。

「今日でこともお別れか」

卒業式を明日に控え船の中で命照は思いにふけていた

「この3年で本当にいろんな事があったな」

~~~~~

### エピソード1

アカデミーにはじめてきた日アイリと共に案内を受けた命照と西南は苦難を共にしたとことで仲良くなりちよくちよくあうようになつていた。

そして自分の船に招待することにした。

「へえ〜これが命照君の皇家の船、他のとずいぶん違つなつて俺、瀬戸様の水鏡しか知らないけど」

「そうね。命照ちゃんの船は第一世代はただけだけどずいぶん外装が小さいわね」

龍虎皇のあるドッグに来た西南はアカデミーにくる前に見た瀬戸の水鏡と比べていたそんな時後ろから声がして振り向いてみるとそこにはアイリと命照がいた。

「あつアイリさん、命照君、こんにちわ」

「よう西南よく来たな」

「こんにちわ、西南君」

お互い挨拶すると命照は西南によし行くぞとって転送された

「さあここが俺の船、龍虎皇だ」

船の中枢であるブリッジに転送された西南はそこには見上げるほど大きい皇家の樹、龍虎皇があつた。

それを見上げたまま歩いていると

「ようこそいらっしゃいました。榎木アイリ様、山田西南様」

奥の方から声が聞こえすぐさま視線を下げるとそこには樹雷の侍女服を着たKOS・MOSがいた

「はじめまして、山田西南です」

「なに緊張してるんだよ。こいつらは俺の侍女をしているKOS・MOS」

「あらこつちの子アンドロイドね。」

「さすが哲学士見ただけでわかるんだ」

「アンドロイドってロボット!？」

アイリはKOS・MOSに近づくとさっそく調べ始めた

「しかもこの子戦闘用ね。武装は・・・なるほど・・・亜空間転送で・・・こんな武装まですごいわね」

「アイリさん・・・どうしたんですか」

「ああ、西南君、アイリ姉さんは哲学士と呼ばれる人種なのだから興味でたものはすぐ調べるんだよ」

「はあ、そうなんだ」

アイリの豹変ぶりを目の当たりにした西南は困惑していたが

「まあほっとこうか。すまないが飲み物を部屋の方に持ってきてくれないか」

「かしこまりました」

そう力場体の従者にいうと命照は西南をつれ自室に向かった。あとKOS・MOSには後でアイリを連れてくるようにとっておいた。

「ほらくつろいでくれ、どうした？外が気になるのか？」

「えっうん瀬戸様の所よりもなんか雰囲気が違うからさ」

「ふう、ん、それに気づくなんてさすがだね。外に出たかったらどうぞ、ってやめた方がいいか」

「うん俺の運じゃ遭難するのがオチだもんね」

「命照ちゃんたいま」

「あっアイリさん・・・ってうわ~~~~」

「西南君？って落ちたー!」

アイリが部屋に来た時振り向こうとしたら足を滑らし窓から転落、

樹の幹に沿って落下、なだらかになり減速したと思っただらその進む先にいたオオカミのような動物がいて避けることもできずそのままぶつかりその仲間と共に追いかけてまわされ池の土手を走っていると足を踏み外し池に落ちそこに住んでいるイルカのようなのに小突きまわされながらもようやく岸に上がると先ほどのオオカミみたいなのにまた追いかけてまわされていた。

「おお〜見事なコンボだねえ〜」

「アイリ姉さん・・・KOS・MOS頼む」

「了解です」

そういつてKOS・MOSは飛び出すと西南を追いかけまわす動物を蹴散らして西南を救うとそのまま西南を抱きかかえ部屋まで連れてきた

「おいおい大丈夫か？」

西南はびしょ濡れながらも擦り傷一つも負わずにいた

「いやー慣れてるから・・・へっくしょん！」

「あらあら大変、命照ちゃん、西南くんをお風呂に入れてあげななきゃ」

「ああそうだな。KOS・MOS頼む」

「了解です。西南様こちらにどうぞ」

「あっどうも」

「じゃあ私も・・・」

「姉さんはここにいましょうね」

ついでにこうとしたアイリを命照は止めると恨めしい顔で命運をにらんだ

「睨んでもダメですよ。兄上に言いつけますよ」

「いいわよ。あの人なら笑って許してくれるもん」

「じゃあ瀬戸様がいいですか」

「それだけはやめて、対抗して瀬戸様まで西南くんが入ろうとするから」

こうしていいあってると先ほどから気になっていること言った

エピソード2

ある日命照はアカデミーに入ってから興味が出たのは多種多様の研究であったアカデミーに入学して数カ月ですでに特許をいくつか取りそれらすべてに対しかかなりの利益を出した。そしてたまにやってくるアイリが命照の実力を知ると哲学科に勧誘しようと今度は毎日のようにやってくるようになった。  
そんな中。

「命照ちゃんいるー？」

また今日もアイリがやってきた

「ん？アイリ姉さんいらっしやい」

そうアイリの方も見ずにそっけなくいう。命照は今度出すレポートの仕上げをしていた

「今日はねちよっと着いてきて欲しい所があるのよ」

「アイリ姉さんがちゃんとお願ひするなんて珍しいね」

レポートを書く手を休めアイリの方を向く、そうアイリが命照をどこかに連れていく時は大抵、有無を言わず連れていくことが多い。この前は天地の姉、天女に会いに行くといきなりアカデミーの極秘工房に連れ去られたり、アイリの預かっている食堂【ナーシス】で給仕の手伝いをしてちょうだいなどいつも忙しい時に限って連れて行かれるのである。その時は何故かメイド服を着せられその記憶は封印されてトラウマと化していた

「珍しいだなんて人聞きの悪いこと」

「だってそうだろ、いつもは有無を言わずに神速の速さで連れていくのに」

「うっそれはそれ、今日は命照ちゃんの力が必要なのよ」

アイリはいつもとは別人のような顔で言っていた

「それでどこにいけばいいの？」

「瀬戸様の所よ」

そういつて連れ出されたのは瀬戸の水鏡ではなくどこぞの秘密基地のような所であった

「ようこそ、命照殿」

「ひさしぶりね、命照殿」

「瀬戸様、鷺羽様、お久しぶりです」

そこには【樹雷の鬼姫】こと神木・瀬戸・樹雷と【天才科学者】白眉鷺羽がいた。

「お二人ともどうしてここに？それにここは一体？」

「それはおいおいね。まあ座って頂戴」

とりあえずちゃぶ台のような物の周りに座るとそこにメイド服を着た水穂が飲み物と茶菓子を持ってやってきた

「水穂様！？」

「お願いだからなにも聞かないで・・・」

そういうと顔を赤くしたまま瀬戸の後ろの方に立って控えた

「水穂様はどうしたのですか？」

「うん？婚約者のことそんなに気になる？」

「えっ！？いや・・・その・・・」

「あら命照殿まで・・・水穂はただの罰ゲームよ」

命照が赤くなつたのを見て気を良くしたのか上機嫌になり水穂の現状を説明するとそれまでだまって見ていたアイリが命照を呼んだ理由を説明しだした

「今日、ここに来てもらったのは命照ちゃんに船の製作を手伝ってもらいたいのよ」

「船の製作ですかなるほど西南君がらみですね。あいつの適正から考えると囿部門か、しかしなぜ私も手伝うのでしょうか。皆さんがいれば銀河最高の船も作れるのでは？」

「そこまでお見通しかあなるほどさすがは樹雷の秘蔵っ子だねえ」

「今回はあなたに経験を積ませるっていう名目もあるのよ。まあ制御AIなんかは鷺羽殿が担当するからあなたはアイリ殿と一緒にやっってもらおうと思っているの」

「わかりました。友達の西南の為ですから一生懸命がんばります」  
こうして船の製作の手伝いを引き受け完成したのが【守蛇怪】であ  
った

## アカデミー編2（後書き）

しばらくはアカデミーでのエピソードを書いていくつもりです

### アカデミー編3

エピソード3

ピンポン

「ごめんください。西南君いますか？」

雨音の家に着いた命照はさっそく呼び鈴を鳴らし西南を呼んだ

「はい、どなたですか？」ガチャ

「柁木です。西南君の新しい船をもらったそうなのでお祝いに来ました」

「えっ！？命照様！なんでここに？」

「だからお祝い」

対応に来たのは西南でも雨音でもなく霧恋で命照を見て驚いていた

「えっああすいません。どうぞお入りください」

霧恋は正気になると命照を家に招き入れた

「霧恋、誰だった？あつ命照、いらっしやい」

玄関を入りリビングに向かう途中この家主である雨音がとてもラフな格好でやってきた

「こら雨音、彼は皇族なのよ。せめて様くらいはつけなさいっていつも言ってるでしょ。それになんて格好してるの！すいません命照様」

「霧恋さん、別にいいですよ俺はまだそんなに偉くないわけだしでも服はしっかり着てくださいね」

「それで何か用なのか」

「雨音！まったくもう。なんでも西南ちゃんに用事あるみたいなの」

「霧恋さん、雨音さん、どうかしましたか？・・・あつ命照君！いらっしよい今日はどうしたの？」

また奥から来たのは西南であった。西南は命照の姿を見つけると駆け寄り何をしに来たのか聞いた

「いやなに西南君が新しい船をもらったと聞いたもんだからお祝い

を持ってきたんだ」

「そんないいのに。でもせっかく来てくれたんだから廊下じゃないからリビングに行こうよ」

西南がそういうとまだこそそと話している二人をおいてリビングに入ってしまった。リビングではエルマの代わりに知らぬ女性が猫のようなウサギのような動物と遊んでいた

「あつ西南様、お客様はどなた……って命照様!？」

「西南君、また他の女性まで手を出したのか？それにしても君は確か？……だれだったかな……どっかで見た顔なんだけど？」

「はじめまして私、リョーコ・バルタと申します」

「リョーコ・バルタ……確かGPでも上位の人気がある海賊の名だったような？」

「はいそのリョーコ・バルタです。とある事件がきっかけで西南様に使えています」

「ふん、そうなんだ。」

「そしてそこにいるのが白眉鷲羽様から頂いた魍皇鬼タイプの生体コア……」

「名前は福っていうんだ」

西南がそういうと福は返事をするように鳴いた

「みゃん」

「よろしくな。福」

そういつて福に手を差し出し握手をして頭を撫でた

「みゃうん みゃくん」

「おいおいすぐったいってやめれって」

「ははは福は命照君のこと気にいったみたいだね」

「それはそうと命照様は何しに来たんですか？」

「ああそうだ。西南君これ福と新型艦のお祝いの品」

命照は持ってきた土産を西南に渡した

「あっありがとう。これは？」

命照が渡した物は透明な箱に入った一升瓶だった

「あゝそれ船で作つてる神樹の酒だよ。」

西南に土産の名前を伝えると西南以外の三人が一斉に叫んだ

「「「神樹の酒だつて（ですか）（ですって）（）（）！！」」」

「うわっどうしたんですか？」

そんな三人に驚いた西南は何故そんなに驚いているか聞いた

「命照様！いくらなんでもこんな高価な品受け取れません」

「おい霧恋！なんてこと言うんだ！」

「そうですよ。せつかく持ってきてくれたんですから」

「霧恋さん、これそんなにすごいもんなんですか」

興奮している三人に西南が聞くと

「いい西南ちゃん、神樹の酒つて言うのわね。皇家の樹の樹の実から作る果実酒なの」

「皇家の樹つて瀬戸様や命照君のですよね？」

「そうよ。そして皇家の樹はその性質上そんなに実をつけないの、だから神樹の酒もそんなに作れないのよ、だから飲めるとすれば年に一回各国元首に贈呈される小瓶一本しかないのよ」

「はー国家元首？」

「そう！そしてその神樹の酒は販売なんかされてねえから過去何回かオークションに出された事があつて量はさつき言つた小瓶、その時着いた値段が移住可能な惑星一個分ときたもんだ。すげーだろ。それをお祝いだからつて一升瓶だなんて。うらやましすぎる」

「惑星一個（）！だめですよこんな高価なものもらえませんかよ」

「あつこら西南！お前まで何言つてるんだ！」

西南はそういつて返そうとするが勝手に入れたのかお茶を飲んでい  
る命照は

「はあゝあのなあゝその神樹の酒は俺の船で作つた物なんだよ。つまりそれはタダなのわかる。オークションの値段なんて関係ないの」  
命照はそういつと今度は茶菓子を食べはじめた

「あゝそれ私が後で食べようと思つてた茶菓子！？」

そう叫んだのは涙目なりヨロコだった

「ああ〜そんなんだすまんね」

そういつて悪びれ見せず最後の一個を食べた。そしてお茶を飲んで一息ついてると西南が

「わかったよ。じゃあありがたく貰うね」

「そこまでいうのでしたら」

ようやく西南と霧恋は神樹の酒を受け取った

「よっしゃーじゃさっそく飲もうぜ」

「だめよ。雨音、それは西南ちゃんが貰ったものなんだから」

雨音はせっかくの神樹の酒、コップ一杯並々と入れて飲みたそうに抱き締めているがだが霧恋が西南の物だとひったくる。

「あつ霧恋！そつだ西南も飲もうぜ。それだつたらいいだろ」

「西南ちゃんはまだ未成年よ！」

「じゃどうすればいいんだよ？せっかくの神樹の酒が」

「さてお暇するとするか。ああ〜そうだ言い忘れてたその箱なんだけど时限式の空間ロックしているから時期がくるまでどうせ飲めないぜ」

帰ろうとする命照が振り向いていうと

「ロックですか？いつとけるんですか？」

「霧恋も飲みたいんじゃないか」

「私はただ気になっただけよ」

二人が喧嘩しそうな所を西南は一生懸命治めようとする

「なに西南君が成人するときに解除するからその時、大事な人がいればその人と飲んだらいい」

「そんな大事な人とだなんて」

そついう西南は霧恋を横目にみる

「西南あ〜その時は私と飲もうぜー」

西南の横目に気付いた雨音は西南にしな垂れながら誘惑した

「雨音！西南ちゃんから離れなさい！」

「そつですよ雨音さん！西南様から離れてください！

「別に西南はお前らのものじゃないだろ」

霧恋、雨音、リョーコは西南を挟んで痴話げんかを始め西南は赤くなりながら喧嘩を止めようとした

「あつゝ3人ともやめてください」

「くつくつだったら3人で飲めばいいじゃないか。まあ聞いた話じやもつと増えるかもしれないがな。じゃ俺帰るわ」

「みゃ〜うん・・・」

「見送りありがとうな。まあ困ったことあれば俺の所にも遊びに来な」

「みゃん」

「ふふっじゃあな」

玄関まで見送りに来てくれた福であったが奥の方ではまだ喧嘩の聲が聞こえるもであった

~~~~~

エピソード4

西南の所に新しい家族福が来てしばらくすると西南は福を連れて船に来るようになった。西南いわく福がきたがったそう。こうしてちよくちよく船に来るようになった福に対し命照は福専用の転送ゲートを作りいつでも船に来れるようにした。そして福は龍虎皇と仲良くなりよくじゃれている姿を見かけるようになった。そんなある日、福は悲しそうな顔で船に来た、それが気になった命照は龍虎皇経由で守蛇怪のクルー西南たちは補助システムを作っていることを知った命照はある悪だくみを考えた

悪だくみ実効日

「よーしこれで補助システムの完成だ」

「まだ微調整なんかが残ってるけどこれで福ちゃんは守蛇怪に乗らなくても大丈夫よ」

「みゅ〜」

「もう怖い思いはしなくてもいいんだぜ」

「みゅ〜」

そしてその日の夜、微調整のため残っていた西南を乗せ福守蛇怪は

静かに宇宙港を出て行った

「あれ？船が動いてるっばいぞ！？宇宙にも出てるっばいし！？福！どうした福！」

回線整備のためブリッジを出ていた。そしてブリッジに入ろうとすると入れなかった

そして宇宙のでた西南に待っていたのは案の定海賊の群れであった。

「福！中に入れてくれ福！ってうわ・中に入れた。あれ？なんでここに命照君が？」

そこにいたのは操舵席に座った命照と侍女のKOS・MOSそして命照の頭の上にいる福がいた

「よう。遅かったな、困まれてるぜ」

「そうだった。逃げるくらいなら俺だって」

西南は急いで艦長席に着くと福は命照の頭を下り西南の元に走っていた

「やっぱり西南がいいか。」

こうして守蛇怪は逃げていると後方より惑星破壊船【ちよび丸】に乗った霧恋達がやってきた

「西南ちゃん！福ちゃん大丈夫！？」

通信がやってくると命照は福に目で合図すると福は泣き始めた

「霧恋さ「みゃ〜ああん！みゃああああん」

「福どう「よくも福ちゃんを泣かしたわね。主砲よーい！」霧恋さん達？」

福の泣き顔を見た3人は逆上し追っている海賊に向かって主砲を撃とうとする艦長マシスが

「だめ守蛇怪が近すぎる」

その通信を聞いた命照は

「福！行け！」

命照がそういうと福は中央のテーブルに立つと気合を入れ船を海賊から遠ざけた

海賊船共

「艦長！後方から惑星規模のエネルギー反応！」

「あれは惑星破壊船！」

「さらに惑星規模よりでかい反応2つ！」

「皇家の船と魍皇鬼！」

「みゃうくくくん」

こうして海賊どもは一網打尽にあい魍皇鬼も帰って行った

「命照様どういことですか！？」

守蛇怪に乗り込んできた霧恋達は命照に詰め寄った

「なにが？」

「なにがって！なぜ福ちゃんを家でなんてさせたんですか！？」

霧恋達はアイリから事情を聞いてきたようで

「なに福から相談を受けたんだよ。寂しいってね。だから今回の家出を計画したんだよ」

「さみしいって私達にいつてくれれば・・・」

「アイリ姉さんから聞いただる心がなきや誰も心なんて開かないって、俺がいつてもそれは自分で感じたことにはならないだからこの芝居を打ったのさ。これでわかっただる福はお前たちにとってどんな存在なのかを」

命照が霧恋達に説教じみたことを言っていると通信がきた

「西南君無事のようなね。」

「美守校長！」

「よかつたらそのまま里帰りしなさいな」

「いいんですか？」

「ええお母様達に元気な姿を見せてきなさい」

「はい」

元気な声で返事をする西南であった。そんな中命照は

「じゃ俺はこれで帰るわ。地球に着いたら兄上達によるしくいつといてくれ」

そういうと命照はそそくさと自分の船に転移していった

「命照様まだお話が・・・てもういないし」

霧恋達はまだ文句を言おうとしたが命照の姿はなく仕方がないので西南と地球に向かってのである

アカデミー編3(後書き)

今回はエピソード3・4でした。あと2・3個で天地編は終わると思います

アカデミー編 4

エピソード5

西南達が地球から帰ってきた後幸運艦【運呼】事件や守蛇怪強奪事件などがあつたがどれも関わることはなかった。理由は前々からやっていた研究が大詰めになつたからである

研究とは地球で知つた魔法の事と、地脈や龍脈と呼ばれる力の流れる道筋の研究であつた。

研究対象は様々な星に至つた。自分の生まれた星、樹雷も対象であつた

「樹雷星の力の流れは……なるほど……」

そうやって星の秘密に迫っていた

「それで地球のは他の移住可能の星とは何か違うんだよな……このパターンは……まさか……」

こうして研究は進んでいった

~~~~~

### エピソード6

ある日の事、アイリから呼び出しがあつた。呼び出された先に言つてみるとそこにはアカデミーでは珍し巨大ロボットが鎮座していた

「アイリ姉さんこんばんわ。それにしてもこれなんですか？姉さんの新作ですか？」

「命照ちゃん、違うわよ。これは西南君がとある惑星で見つけてきたのよ」

「西南君がですか。また何かに巻き込まれたとか」

「まあほぼ正解よ。軍が守蛇怪を徴収しようとしたんだけど西南君がいろいろやってきたおかげでね。これを発見して海賊タラント撃破したのよ。そのおかげで軍の悪い膿は取り除けたのだけでも」

「なるほど軍も西南君に下手なちよっかいを出したから不運に巻き

込まれたと」

「そういうこと、それでねこれ現地では神像と呼ばれていたものだけどちょっと厄介なのよね。」

「そういうと命照に分析結果のレポートを見せると」

「これは！……まったく西南君といると退屈しないな」

「まったくね。これで一応樹雷皇と会ってもらったことになったんだけど」

「父上とですか……まあ当たり前だね。この結果じゃ」

「というわけだからあなたも一緒に来てもらいますから」

「わかってますよ。俺も同じ立場ですし」

「じゃ私は西南君達の今後の展開について美守様と相談しに行ってくるわ」

「そういつてアイリは理事長室に帰って行った」

数日後

「父上、母上お久しぶりです」

「おお命照元気そうで何より、突然呼びだして済まなかったな」

「いえ、アイリ姉さんから事情は聞いていますので大丈夫です。」

「久しぶり会った親子の対話もそこにアイリと西南がやってきた」

「お待たせしました。西南君、こちらが現樹雷皇の阿主沙様」

「ふむ」

「第一皇妃船穂様」

「こんにちわ」

「第二皇妃美砂樹様」

「よろしく」

「そして第二皇子命照様」

「よっ」

「はじめまして、GP庶任課の山田西南です。よろしく願いします。」

西南は律儀に4人にお辞儀をする。

「はじめてくれ」

「はい」

樹雷皇がそういつとアイリが説明を始めた。例の神像と呼ばれる機体内部に皇家の樹の種が幼生固定の状態で収められていたらしくつまりこの機体は皇家の船といっても過言ではないということであった。しかもその種が始祖の樹津名魅から聞いたところ、昔樹雷に偶然来た者に種をあげたらしくその内の一つらしいつまり第一世代のようだ。それを聞いていた西南がしずしすと手を挙げた

「どうしたの西南殿？」

「あのなんで俺がここに呼ばれたんですか？」

「西南殿、あの神像はいわば皇家の船それも第一世代、それがあなたに反応したつまりマスターは西南君あなたなのよ」

「はあ？」

「つまりあなたは樹雷の皇位継承第4位にいるのよ！」

「そう……つてええ〜！」

こうして西南が放心したまま会談は終了し西南が出ていくと

「アイリ、遥照に釘を刺しておけよ。」

「あの人もこれ幸いと投げ出す人じゃないですよ。周りの子どもたちはずいぶんおもしろいですけど」

「ふん、クソババア予備軍か。命照、こんな風になるなよ」

「それじゃ阿主沙ちゃんが傾向と対策を教えてあげたらそれとも被害者の友でもつくったら。にゃはは」

「まったく父上も瀬戸様も……では私はこれで西南君のフォロ―してきますよ」

「お願いね命照ちゃん」

命照は会議室を出ると西南を探した。そして街が見渡せる公園の高台にいた

「よっ西南君ここにいたのか」

「命照君……俺どうすればいいのかな？」

「そんなの知らん！皇位継承は四位だ。俺は二位だから気にする必要はないと思うぜ」

「そうかもしれないけど・・・」

「まったくお前は何がしたくてここに来たんだ」

「!・・・そうだよ。俺わかった気がするよ」

「あとはお前の近くにいる人たちが大切なら絶対に離すなよ。それが男の甲斐性だぜ」

「命照君、君本当に7歳かいな?」

「そういつて西南と別れた」

数週間後

西南はあの後、GPを続けることを決意し卒業していった。命照もアカデミーを卒業し瀬戸のもとで働くことにしまずは平田兼光の部下として経験を積むことにした

そして命照の元にとある手紙がきた

「命照様、瀬戸様から招待状です」

「招待状?・・・そうかあいつら結婚するのか・・・KOS-

MOS、酒倉から神樹の酒一本出しておいでくれ」

「了解です。」

「あっそうだ後神樹の実のジュースも一緒に頼む」

命照はいろいろと支度すると瀬戸の元に向かった

「瀬戸様、内海様、こんにちわ」

「命照殿、いらっしやい」

「おお命照殿、ようこそ・・・ゴホン・・・本日は・・・」

そこには仲人を引き受けた瀬戸とその夫内海と西南の家族がいた

「瀬戸様こちらの方は?」

「こちらは西南君の友達の柁木・命照・樹雷殿よ。で命照君こちらが西南君のご家族の方たちよ」

「はじめまして柁木・命照・樹雷です。この度は西南君のご結婚おめでとつございます」

「いえいえ、こちらこそ瀬戸様からお聞きました。西南のことを在学中何度も助けてもらったそうで」

お互いに挨拶して命照は先に行く。と瀬戸にいい船に乗った

会場に着いた命照は会場の整備をしていたアイリと美守を見つけると西南の所に向かった

「よっ！西南君どうした？」

「あつみなさん。いや・その・俺、本当に結婚なんてしても大丈夫なんでしょうか？」

西南は自分の不運で霧恋達を巻き込むことや家族から政略結婚だと聞かされていたので霧恋達の本心を知らずに悩んでいた

「まったく、西南君みんなの所に行きましょう」

「えっ!？」

そういうとアイリは西南を引っ張って霧恋達花嫁にいる控室に行くことにした

そして霧恋達の本心を聞きようやく元気を取り戻した西南に命照は「よかつたな西南、一人前になったお前ときれいな花嫁たちに結婚祝いだ」

そういうと取り出したのは前回渡した神樹の酒の二倍の量と西南とネージユ、福用のジューズのはいった一升瓶を渡した

「今日、式がみんなで飲めや」

「あつありがとう」

「山田西南様。衣裳のご用意ができました。」

「あつはい」

「俺もついて行くよ」

二人は案内人の後話しながらをついていくと控室には見えない所に連れてこられた

「んっ?ここは倉庫？」

ドコッ!

殴られた音を聞こえ、振り向いてみると壁に吹っ飛ばされた西南とそれに詰め寄るサイボーグな男であった

「誰だ貴様!」

「命照君こいつタラントだ！逃げて！」

「ダメレ！！！！」

タラントと呼ばれた男は叫ぶと小さなナイフを取り出した

「ワタシガキサマナドニヤラレルワケガナイ、コレデオマエヲバラバラニシテ、アイツニオクツテヤルキリコニナ」

そんな中西南はとつさに後ろに会ったパネルを操作して消火用ジェルを発射して詰め寄る時に開けた電気がショートした穴の近くにあるタラントの足を消火用ジェルが固め、そこを飛び蹴りをかました。足が固まつてるため片足はもげドアの方まで飛んで行ったそれを見た命照はとつさに魔法を放った

「【受けよ、無慈悲なる白銀の抱擁！アブソリユート！】」

命照がそういうとタラントの周りが白く霞みだした

「ナンダコレハ！？、クソ！キサマユルサンゾ！！！ヤマダセイナアアアアアアアア！！！！」

タラントが叫ぶと氷漬になった。タラントは最後の最後まで西南に恨みを抱いて消えてのであった

そして命照と西南はたすかったのである

「命照君、これはいったい？ゲームの魔法みたい」

「まあなんだ。内緒にしていってくれよ。その内教えてやるから」

「うん・・わかったよ」

そういつて命照は自分の力のことを西南に口止めをし一息ついているとガタン

「お掃除にきましたあゝあれえゝ西南君、命照君どうしたの」

「美兎跳さま」

命照と西南は現れた美兎跳に驚き見事にこけた

こうして無事タラントの襲撃切り抜けた二人は控室に行き西南は服を着替えていると

「おにいちゃんいい？つてゆうか入るよ。あつ命照さんこんにちわ」

「よっ西南お兄さん」

「吉子！海！来てくれたのか」

妹と親友と話をして二人が交際していることや海の儀式について聞いたその時

「……入ります。西南様」

「あつ女官さん達来てくれたんですか」

「お前達、いくのか？」

「命照様、お見通しですか。……西南様、実は私達は銀河連盟に入っていない別連盟から来たものなんです」

「西南様の短期間でのダルマー・ギルド壊滅に追い込む様は感服いたしました」

「私も簾座連合でもほとほと困っておりますそこで西南様のお力をお借りしたいのです」

瀬戸の女官4人は西南迫っていた

「えつとまだGPに配属されたばかりですしそれに結婚式もありますし」

「……ぜひ!!」

「命照君」

「くくくくく別に رفتてもいいんじゃないね」

「みよーしょーくん！」

「くくくく」

命照が変な笑いをしているその間に西南は連れ行かれその事を知った霧恋達はウエディングドレスにまま追いかけて行った

「瀬戸様あの子達が別連合のスパイだと知っていましたね」

「だってその方が面白そうだったし……には」

「にははってそれと命照君もなんで止めなかったの」

「だってその方が面白そうなんだもん」

「……ねえ」

命照と瀬戸は顔を合わせて言った

「まったく」

こうして西南は4人の花嫁と4人の愛人をもらい受け2つの銀河で活躍するのであった

「頑張れよ。西南・・・」

## アカデミー編4（後書き）

一応これで天地編終わりとなります。  
次回は天地編とネギま編の境あたりだと思います。

命照が瀬戸のもとで働き始め早7年、15歳になった命照は背も高くなり175cm程になっていた。樹雷の皇族は皆髪が長く命照の髪も背中あたりまで伸び肩あたりで水穂から貰った赤いリボンで束ねていた。額には樹雷の文様が入ったヘアバンドもしている

「瀬戸様お呼びですか？」

命照は瀬戸に呼ばれ水鏡に来ていた。

「あら命照殿、お久しぶりね。何か用？」

「何か用？じゃありませんよ。呼んだのは瀬戸様でしょ」

「ああ、そうだったわね。すっかり忘れてたわ。西南殿との合同による簾座連合の海賊退治1年間ご苦労様」

命照は1年間西南達守蛇怪クルーと共に簾座連合内に蔓延る海賊達を退治してきたのである。西南は簾座からの正式な要請であの結婚式から銀河連盟と簾座連合を行ったり来たりの生活をしてきた。

そんなハードな生活をしていたため体を壊しかねないと嫁”Sからの懇願で瀬戸が知り合いの中で最も戦闘力がある命照が西南のフオリーをするようにと命を受け1年間一緒に海賊退治に行っていた

「あ、つらかったですよ。いくらなんでも独り身にはあのハーレムは見ててつらいですよ。」

「そうかもしれないわね。それじゃいつそのこと水穂と結婚したら」

「ふう、それもいいかも知れませんがそれは俺が成人するまでに水穂様に相手がいなくなったらですよね。水穂様ならすぐにでも俺以上にふさわしい人見つかりますよ。」

「はあ、あなたは自分の価値を知らなすぎよ。まったく」

「なにかいいましたか？」

「いいえなにも」

瀬戸はそういうと姿勢をただしまさに【樹雷の鬼姫】の雰囲気をだ

した。それを感じた命照はつられて姿勢をただした

「柁木・命照・樹雷特別政務官殿、あなたに特別任務を与えます」

「俺にですか？瀬戸様の諜報部のみなさんの方が俺より優秀ですけど」

「この任務はあなたじゃないとできないことなのよ」

命照はこの言葉の意味を理解し

「はっ了解いたしました。神木・瀬戸・樹雷様」

命照は直立不動の格好で瀬戸の要請に応えた

「任務の内容は地球にて魔法使いなる者の調査よ」

「調査ですか？」

「そうよ。実は2年程前、地球で時空震が観測されたの」

「まさか、地球で時空震を起こすほどの科学力があるとは思えません」

まさにその通りである。時空震を起こすほどとなると皇家の船第一世代以上の力かまたは覚醒した柁木天地もしくは創世の三頂神ぐらゐである。あとあるとすればどこぞの科学者の実験の失敗で起こる程度である

「で鷺羽様に調べてもらったら一〇〇年ほど未来から来たことがわかったのよ」

「未来からですか、確か銀河法ではタイムトラベルの類は禁止されているはず」

「それともう一つ太陽系の4番目の惑星の火星に位相空間があることがわかったのそこには大規模な都市群があることがわかったの。」

「今の地球の技術で火星に住むなど不可能なはず」

「そうでも確かなのよ。だからそれらも踏まえて調査なのよ」

「わかりました。しかし長期調査するなら地球のどこかに滞在しなければいけませんがいかがいたしますか。兄上の所にも厄介になるのでしょうか？それだとあまり広範囲には調査できないと思われませんが」

宇宙のことを知る者にとってあの村周辺でしか行動できない

「それなら大丈夫、遥照殿に連絡を取って今回の事情を説明したらなんでも心当たりがあるそうなので任してあるわ。だからまず遥照殿の所において頂戴。それと船穂殿達には私から言っとくからすぐにも向かってね」

こうして命照は瀬戸の依頼を受け地球に向かったのである。

「それにしてもまた地球なんてねえ。あの星には他の星にはない未知の力でもあるのかしら」

~~~~~

地球・榎木神社

命照はあの後すぐに荷物をまとめたり仕事の引き継ぎなどを2日で終え水穂や兼光といった仕事の仲間事情を話、樹雷を出発していった。2日ほどで地球に着きそのまま遥照のいる日本・岡山県のある村に向かった

「ふう〜やつとついた」

「ん？そこにいるのは命照殿、命照殿じゃないか」

命照はいきなり名を呼ばれたので振り向いてみるとそこにはかつてともに船を造った

「あつ 鷺羽様！お久しぶりです」

「今日はどうしたんだい？」

「瀬戸様の用事で兄上にちょっと」

「ああ〜あの件かい。話は聞いてるよ。私も話に加わろうかね」

「そうですね。ありがとうございます」

「それと私のことは鷺羽ちゃんって呼んでね」

ズルッ

「あはははは・・・わかりました。よろしくお願いします鷺羽ちゃん」

「わはははは それじゃ行こうか。勝仁殿いるかい」

鷺羽はそういうと事務所の方から遥照がやってきた

「めずらしいの鷺羽殿がわしに要など」

「お客さんだよ」

「客・・・おおー命照ではないか久しぶりだのぉー」

「お久しぶりです。兄上。さっそくですが」

「おおわかっておる。まあまずは上がりなさい」

「私も同席させてもらうよ」

そういうと三人は社務所ほうに歩いて行った。

榎木神社・社務所

「瀬戸殿から依頼を受けてのわしの方でも少し調べてみたんじゃない。魔法使いと呼ばれる者がいることぐらいしかわからなかったんじゃないよ。すまんの」

「いいいいのです。そう簡単にわかるものではないと覚悟していましたから」

「なるほど魔法使いね。いやまいったそんなのがこの地球にいたなんて知らなかったよ。あまり地球に関わらないでいたからねえ。見逃しもするか」

「いまからでも調べられるでしょに白々しい」

「それじゃあ命照殿の楽しみが無くなってしまおうでしょ」

驚羽はそういうとウィンドウを取り出し何やらし始めた

「そうじゃ命照、実はもう一つわかったことなんじゃが埼玉県にある学園都市にその魔法使いの拠点があるそうなんじゃ。それでちょっと手を回してお前にそこで教師をやってもらうことにしたんじゃない」

「えっ教師ですか？」

「ほおーいい案じゃないか、アカデミー首席卒業なら楽勝でしょ。」

身分証や履歴なんかは私がやっておくから任しときな」

「はあくよろしく願います」

思わぬ展開で進んでいくのを命照はただ流されていくのみであった。

「よしそうと決まれば我が弟の前途を祝って宴会じゃ」

「よしいいねーやるやる」

こうして下の家に行き姉の阿重霞と砂沙美に挨拶と事情を話その日の夜は夜通し宴会が続いたのであった。

「命照よ。しっかりやるのだぞ」

「はい兄上。では行ってまいります」

次の日の早朝、命照は柁木家を出て行った

「それじゃあまずは京都で詠春さんから話でも聞くか」

最初の目的地を京都に決め転移していった

~~~~~

京都・関西呪術協会前石段

「さてまだ詠春さんいるのかな。そういえばこのちゃんときゃんに送ったプレゼントの反応はここにはないしなんでだ」

命照は詠春から話を聞くついでに木乃香と刹那に会いに来たつもりだった。しかし櫛とペンダントの反応がない

「まあとりあえず詠春さんからそこんところも踏まえて話を聞くか」  
屋敷の前いきて門番の人に取り次ぎを頼むと門前払いされそうになったが一応取り次ぎをしてくれることになり、待つこと数分門が開き中から少し年取った詠春がやってきた

「お久しぶりですね。命照君。こちらにどうぞ」

そういつて中に案内され奥の方の部屋に通された

「命照君、10年ぶりですね。なんでまた地球に？」

命照は詠春に今回地球に来た理由を説明した

「なるほどそれで地球に」

「ええ確かに宙では特殊な力を持つものなどそれこそ星の数ほどいます。ですがそれらはほとんどが個人の力です。しかし魔法や気などは差はあれどかなりの力になります。それらは技術として教えられるでしょとなれば使おうと思えば誰でも使えるようになる」

宇宙ではいろいろな力の持ち主はいる代表的なのは九羅密や山田西南の確立の偏りだろう。後は魍子などのエネルギー体の直接攻撃などもある。ネージュの集団意識も操る力も存在する

「それで命照君はこれからどうするのですか？」

「実はとある学園都市で教師をやりつつ調査をすることになってまして」

「教師ですか？どこでやられるのですか？」

「確か麻帆良・・・とか言ってたよな」

「麻帆良・・・それはきつと麻帆良学園ではないでしょうか」

「知っているのですか？」

「はい。実はそこは私の義父が学園長をしまして木乃香と刹那君もそこにいるんですよ」

「そうなんですか」

「向こうに着いたら木乃香達のことよろしくお願いしますね」

そういつて近衛邸を出ると麻帆良に向かった

麻帆良学園女子中等部・学園長室

「ふむ。柁木・命照か」

「どうした。じじい珍しく難しい顔をしくさつて」

「いやのお春にうちに来る新任の教師の身边を洗っていたんじやがのなにやらこの者が昔媚殿が行つておつた者なのじやが」

そういつとじじいと呼ばれた者が近くで囲碁をやっていた金髪の少女にとある履歴書を見せた

「詠春がか？なになに柁木・命照15歳。こいつがどうした？あの坊主よりは年は上のようなのだがどこぞの魔法学校の生徒だったのか？」

「いや違つんじやよ。昔木乃香達を助けてくれた者と聞いておつたんじやそれ以外は全部白じや。なにによりこやつと名字と出身地が気になつての」

「名字？柁木と書いてあるがそれがどうした」

「その名字はの昔とある地方に伝わる伝説の剣士の名と同じなのじやよ。」

「伝説ねえ〜そんなものを気にするなんて耄碌したか」

そういつて金髪少女は学園長室を出て行った。学園長室にのこつた爺さんはなにやらつぶやいた

「長い時を生きる鬨神勝仁の居る柁木村の出身か」

麻帆良学園女子中等部寮

「なあゝせつちゃんおるうゝ」

「あつお嬢様、なにかご用ですか？」

「もおゝ二人の時はこのちゃんつて呼んでつて言ってるのに」

「すいません。それで・・・この・・・ちゃんにかよう？」

刹那は恥ずかしそうに呼ぶと木乃香は

「実はな。お父様から電話があつて近いうちにあの人がここに来るらしいんよ」

「あの人というと・・・もしや！」

「そやみよう君や。子虎ちゃんが今朝、出てきたんよ」

「そういえば私の所にも出てきました」

「なあゝせつちゃん、私らみよう君の隣に立てれるかな・・・」

「このちゃん・・・大丈夫です。この八年頑張つてきたじゃないですか。もっと自信を持ってください」

「そやね。久しぶりに会えるんやもん、もっと自信もたへんと。せつちゃんががんばるな」

「はい。お嬢様」

「もおゝまたお嬢様やゝ」

こうして命照の知らないところで少女二人は新たなる決意を固めたのであった

## 麻帆良編 1 (後書き)

これで次回からネギ魔に入りますのでどうぞごひいきにまだまだ不快な点がある問わ思いますが長い目を持ってよろしくお願いいたします。ちなみに木乃香と刹那は他から見れば仲良くは見えないがひそかに会っては魔法の練習をしています。ホンのちょっと修正と加筆

## 設定 1

柁木・命照・樹雷 15歳

本編主人公・かなりのチート

容姿・・・175cm・60kg 髪は背中まで伸び肩あたりで赤いリボンで束ねる

前髪をヘアバンドで上げる。

特技・・・テイルズ系の技すべて。装備した武具により変わる

術・・・テイルズ系の術すべて。装備がなくても使用可能・杖装備時威力倍増

鬼道・・・現在わかっているものすべて。詠昌破棄可

頭脳・・・白眉鷲羽とほぼ同じのためかなりの天才

持ち物・・・テイルズに出てくるアイテム類全部（防具類は無い）  
消耗品類は龍虎

皇内で購入可能

経歴・・・銀河アカデミー特殊科（オリジナル学科です哲学科には及ばないもの

のかなり優秀な人材がそろっている）を首席で卒業。  
研究は星の地脈、龍脈の調査でそのおかげで開発中の星でもなかなかの成果を出している

所属・・・神木・瀬戸・樹雷の私設軍特務政務官（オリジナル  
役職、第二皇子と

言うこともありそれなりの権限がある）に就任

その他・・・寝ていたところを謎の女神に拉致られあれよあれよと力を貰い天地無

用！とネギマのクロスオーバーの世界に送り込まれ

たと思ったらなん

と転生物だったという落ち。さらには成長するに従って原作の記憶が

無くなり始めている

K O S - M O S

命照の侍女兼護衛

外見は18歳前後、身長167cm、体重92kg。表面的には人間とほぼ同様の外観に、青色の長髪と赤色の瞳を持つ女性型のアンドロイドである。

武装・内蔵型・躯体内部に内蔵されている武器

ヒルベルトエフェクト・・・通常世界とは異なる位相空間に存在するグノーシスに対

しての通常兵器による干渉が無効であるため、グノーシ

スを通常空間に「固着」させる「ヒルベルトエフェクト」

と呼ばれる力場を展開するというものである。しかし

本編では使用しません

X・BUSTER・・・腹部から放射状の高出力なレーザーを発射することで広範囲の目標

に打撃を与える。

D・TENERITAS・・・胸部の衣服状のパーツを展開して発射する相転移砲

換装武器・K O S - M O Sの使用する武器は、空間転送技術によって転送することが可能で、

常に身軽に行動することができる

専用ブラスター・右腰部のケースに収納されている携帯用小銃。カ

ートリッジ交換に

より様々な用途の弾体の発射に対応可能である

ガトリングガン・攻撃力重視の三連式のガトリング砲（F・GSH OT等）や取り回しの良

い小型ガトリング砲

スマートガトリング

その他・格闘戦用の武器（ドラゴントウース等）や、レールガン、ミサイルなどが拳

げられる。さらに腕部先端ごと武器に換装することが可能であり、右腕は

ビーム砲（R・CANNON等）や、格闘戦用の電磁ナイフ（R・BLADE）やドリル

（R・DRILL）等に逐次換装可能である。第三種兵装と呼ばれる相転移兵器を

実装する事も可能で、場合によっては一恒星系をも消滅させられる

動力源・・・KOS・MOSのエネルギーは命照の龍虎皇から受けていてほぼ無限に稼働可能

メンテナンス・・・KOS・MOSの性能の維持には定期的なメンテナンスが不可欠であり、

そのため調整槽とよばれる装置を必要とする。KOS・MOSはの中で

一時的に休止状態となることにより各部のチェック、調整およびソフ

トウェアの更新を行うと共に龍虎皇内の研究所に活動時に蓄積した

データのフィードバックを行っている。調整槽には推進装置が備えら

れており、宇宙空間においてもKOS・MOSに伴う移動を可能とす

るため、「タブバイク」と呼ばれるサポートマシン  
に変形する。また

本格的なオーバーホールは命照がおこなう。

皇家の船・第一世代艦・龍虎皇

外装・・・某花の名を冠する船に似ている。艦橋部下付近にコアユニットがあり前に

2本腕のような外装がある

内装・・・ブリッジは半径20M程あり中心より10M程後ろに皇家の樹がありその後

ろにKOS・MOSの研究所がある。樹の前に艦長席艦長の椅子があり前方にいくつかのオペレーター用の席がある

亜空間内・自室は約1000人が自給自足できるほどの広さ。

近衛木乃香・・・5歳の時密猟者の海賊に襲われている所を命照に助けられる。

7歳の時に麻帆良学園に行く事になり中学進学時に刹那と再会。家族

は木乃香に魔法に関わらないで欲しいということをし刹那に聞き学園長で

ある祖父に知っていることを知られないようにしている

得意な魔法は回復系と水属性である

桜咲刹那・・・神鳴流を習い始めは剣術は結構できる。中学進学と同時に麻帆良学園に

行き木乃香と再会。仲はかなりいいが周りには内緒にしている

## 設定1（後書き）

設定を書いてみましたがまだまだ書き加えると思います

## 麻帆良編 2

3月下旬麻帆良学園正門前

「やっと着いたな」

そう呟いたのはバツチリとスーツに身を固めた命照である

「ここが麻帆良学園か。意外と小さいな」

「命照様、アカデミーと比べるのは間違いではないでしょうか？」

「あっやっぱり〜」

命照に突っ込みを入れたのは侍女のKOS・MOSである。二人は来る途中に買った車で麻帆良まで来た。

「まったくこの星の道はなんであんなに混んでるんだよ。このレトロな車も乗り心地悪いし」

「そうですね。これなら似せて作ってきた方がましでした」

「今度作っていいぞ。ちゃんと似せてな」

そういうと関係者用の駐車場に車を止め送られてきた地図に書いている場所に歩いていく

「KOS・MOSこっちでいいんだよな。」

「はい。この道をまっすぐいった所の建物です。」

「わかった。さっさと済ませるか」

二人は新任の教師の説明会の会場にようやく着いた

~~~~~

「来年度、各学校に赴任される方はこちらです。あっあなたこちらですよ。すぐ終わるから君はここで待っててね」

「いえ私ではありません。」

「俺だよ。その名簿に載ってるんだろ」

「えっ！？え〜と？あつありました。柎木・命照さんですね」

「ああそうだ。入るぜ」

入り口でひと悶着あつたが無事の中に入った

「でわ平成15年度新任者の説明会を開始いたします」

こうして説明会が始まり2時間ほどあり最後は学園長の話で終わった。「これで説明会の方は終わります。」

説明会が終わり新任教師達が席を立ち外に出ようとした時後ろの方で声がした

「【この声が聞こえる者はこの後、10分後にまたこちらに来て下さい】」

命照は何やら不思議な声が聞こえたが聞こえないふりをして外に出た。

「KOS・MOSお待たせ。とりあえずホテルに行くぞ。明日は学園長に会う予定だからな」

そういつと命照たちはホテルに行った

「そうか。あの者はこなかったのか」

学園長はあの後集まった10名ほどの新任の魔法先生達を見てつぶやいた

~~~~~

次の日

命照とKOS・MOSは昼過ぎに麻帆良学園の正門にいた。今回は学園長に会うということで案内人がいるそうでここで待ち合わせをしていた

「君が柁木・命照君だね」

名を呼ばれ振り向くとそこにはなかなかのダンディーな青年がいた

「はいそうですけど。あなたは？」

「ああすまない私はタカミチ・T・高畑。よろしく頼むよ」

「よろしく。ええ」と高畑先生ですか。」

「じゃあ学園長の所に案内するよ」

そういつと高畑についていく10分ほど歩くと学園長室についた

「学園長、お連れしました」

高畑は学園長室をノックすると

「うむ、入ってもらいなさい」

「失礼します」

「失礼します」

高畑と同じく挨拶をしなかに入る

「ふおおおおはじめまして、柗木・命照君。わしが麻帆良学園理事長、近衛 近右衛門じゃ。」

「はじめまして、柗木・命照です。よろしくお願いします。こっちがKOS・MOS、俺の従者です」

「んっ」

命照がそういうと学園長と高畑は【従者】の部分で眉を顰めた。

「KOS・MOSです。よろしくお願いします」

「よろしくたのむの」

「学園長そろそろ本題に・・・」

「おおそうじゃった。命照君。君には女子中等部のあるクラスの副担任をやってもらうことになったんじゃ」

「副担任ですか？」

「そうじゃ。実は15歳という若さゆえ他の所ではちとまずくて、そのクラスはこの冬三学期から10歳の教師を担任としているから大丈夫じゃからの」

「10歳ですか。それはまた若いですね。その先生とは会えますか？」

「すまんの対面は4月の始業式まで待つてくれんかの。」

「わかりました。せめて名前だけでもいいですか。」

「そうじゃの彼の名はネギ・スプリングフィールドというのじゃよ」「ありがとうございます。あと相談ですがなにかいい物件ありませんか？昨日来たばかりでまだホテル住まいなんですよ。」

命照はまだ部屋を借りてはいなかった為、学園長に相談した

「そうじゃな。そういえば教員寮はいっぱいになったと報告があったの。」

「そうですね。ではどこかにいい物件はないですかね。少しぐらい

ぼろくても大丈夫ですけど」

「それじゃつたら・・・確かここに・・・おおこれじゃ  
そういうと命照に写真を渡した

「何ですか？・・・なかなかかわいい娘ですね」

「そうじゃる。わしの孫なんじゃ。どうじゃ見合いでも・・・」

「・・・学園長なに見せてるんですか！？なにか物件に関する書類  
があるんじゃないんですか」

孫の見合いを勧める学園長を見かねて高畑が突っ込んだ

「おおっ！そうじゃった。すまんすまん本物はこれじゃ・・・命照  
君、写真返してくれんかの」

「えっあすいけません。っとこれが物件ですか・・・なるほどこ  
こに決めてもいいですか」

「うむ。わかった。手続きはこちらの方でやっておくので今日はこ  
れで終わりじゃ。命照君、新学期からよろしく頼んじゃぞ」

「ええわかりましたでは失礼します」

命照は挨拶すると学園長室を出て行った

「KOS・MOSこれからこの家に行くぞ」

「了解です」

命照が出て行った学園長室では学園長と高畑が命照について話して  
いた

「高畑君、君から見て柁木・命照という人物どう見えた？」

「そうですね。かなりの実力者だとは思いますが。隙だらけでした  
けど何故か勝てる要素が見えませんでした。それに従者といった子  
ですけどあの子もかなりの者ですね。」

「君にそこまで言わせるとは・・・ふむどうするかの。」

学園長は高畑にそこまで言わせる命照の実力と素性がとても気にな  
っていた。

「正規のルートでここの教師になった15歳の少年。そして伝説の  
村の出身者か」

「僕もその話を聞いてその村に行ってきたんですけど何もなかった。四方を山に囲まれた過疎化の進んだ村ですよ。近くの村の話じゃその村に行くのすらタブーみたいですけど」

「そうか。伝説も700年ほど前だというしの。とりあえずあの者の出方を見るかの」

「700年、エヴァより前ですか」

~~~~~

とある廃墟にちかい家

「やっと着いたか、かなり小さいなこの家」

「そうですね。でも船と繋げるのでしたら関係ないですよ。」

「それもそうか。よしえ〜とまずこの家、直すか」

「了解です。リフォーム開始」

そういうと命照たちの周りに機械が現れ廃墟に近い家を直し始めた。そして2時間ほどすると大方終わった。外見は一階建ての純日本家屋で庭もあり縁側もあるようだ。中に入ると3LDKな感じで居間は畳張、台所はオール電化で業務用のもの。あとは居間の反対側にある扉が寝室なのだがその扉を龍虎皇の自分の家と繋げた。

「よしこれでいいだろう」

「それでどうします。廃墟に近かった家をこんな短時間で新しくしましたけど」

「そこはぬかりなしさつきぱつと書類関係を改ざんしてきたから。ここは三か月前にリフォームしたことのなってるはずさ」

「さすがは命照様ですね」

「それじゃあ引越し祝いの蕎麦でも打つか。そうだKOS・MOSこの近くに住んでいる奴っているのか？」

「少しお待ちください。・・・見つかりましたここから500M行きますと家があります」

「んっそうかわかった」

そういうと命照は船から持ってきたそば粉で蕎麦を打ち始めた

引っ越し蕎麦を岡持ちに入れそれをKOS・MOSに持たせると命照は近所の家に向かった
歩くこと数分

「ここか。こんなところに住んでるのは誰かな」と
コンコン

命照がドアを叩いて数秒・・・

「はい。どちらさまでしょうか？」

出てきたのはまさにアンドロイドな娘であった

「ああ今日近くに引っ越ししてきた者だ。引っ越し蕎麦を持ってきたんだが・・・」

命照は後ろにいるKOS・MOSが持っている岡持ちの中身を見せた
「そうですかそれはありがとうございます。しかし・・・」
「かまわん。はいつてもらえ」ではおあがり下さい

アンドロイドな娘は後ろの方から聞こえた声に従い命照達を家の中に招き入れた

「じゃまするよ」

「失礼します」

「ようこそ我が家に・・・謎の新任教師殿」

中に入るとそこにはファンシーな世界であった。そこに一人の少女がいて命照にそう言い放った

「謎とは一体？まあいいや。はじめまして近所に引っ越ししてきました。柁木・命照です。こっちは・・・」

「KOS・MOSです。よろしくお願ひします」
二人は自己紹介すると

「これは俺が打ったものだけど、どうぞ食べてくれ」
そういつて蕎麦を渡した

「おおーそうか。なかなかいい香りだな。茶々丸、そばを頼む・・・
・って違う！お前一体何者だ！」

「俺か？俺は来年度からここで教師をやるもんだが・・・あつつゆ

「はこれを温めてくれ」

命照は岡持ちに入れていた蕎麦とつゆの入った水筒を渡した

「そんなことを聞いているのではない。なぜ貴様のような若造が教師ができる。」

「そんな年は関係ないだろ、学園長から聞いたが俺より若い教師がいるって言うじゃないか。」

そういつて少女の質問を受け流しつ話をしてしていると先ほどの娘がお茶とそばつゆを持ってきて命照と少女の前に置いた

「まあいい。あとそこのお前・・・」

「私ですか？」

「そうだ。お前、茶々丸と一緒に人形だな」

「はいそうです。正確にはアンドロイドですが。」

茶々丸と呼ばれた娘を見ながらKOS・MOSは平然と肯定する。

命照も平然としながら出されたお茶を飲んでいた

「そんなことより蕎麦食べよせっかく持ってきたのにだめになっちゃうじゃないか」

「ふん。まあそこまで言うなら食ってやるか」

そついうと少女は蕎麦を食べはじめた。ものの5分足らずで3人前を食べきった

「ふう〜なかなかうまくったぞ」

「そりゃどうも」

最後に蕎麦湯を飲みながら感想を言う。

「でっなぜ貴様が茶々丸以上のものを持っているんだ!？」

蕎麦湯を飲みほしてその勢いのままいった今度はプレッシャーをかけながら

「こいつは生まれたときに知り合いからお祝いにつてくれたんだよ」

「なに貰っただとそんなバカな。」

「お前だつてその娘を作ったんじゃないだろ」

「ぐっ、私だつてそれくらい手伝ったわ」

「まあ俺はこいつのことは知りつくしているから妹機ぐらい作れる」

「がな」

そういつて少女のプレッシャーを受けながら普通に話をしていた

「ふん。貴様はいろいろとおもしろそうだな。まあいい貴様の正体はいずれ暴いてやる」

「ふうーやってみな。でお前の名は？まだ聞いていなかったが」

「ん？そうだったか？では教えてやろう私の名はエヴァンジェリン！エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ！覚えておけ」

「んっそうか。じゃこれからよろしくな。エヴァ」

「くっなれなれしく・・・まあいい今日の所はうまい蕎麦に免じて許してやる」

「そうかありがとな。じゃそろそろ帰るとするか。あー茶々丸って言ったか・・・」

「はい。私の名前は絡繰茶々丸です」

「お茶うまかったぜ。また入れてくれな。行くぞKOS・MOS」
「了解です」

茶々丸にそういうとKOS・MOSを連れ出て行った

「またのお越しを」

「そんな返事せんでいいわ。ったくしかしいつ命照か・・・なかなか侮れんな。じじいにはまあ伝えんでもいいか。これも蕎麦の礼だぞ」

麻帆良編2（後書き）

今回は学園長・高畑・エヴァとの顔合わせです。次回から新学期です

麻帆良編3 エヴァの章1

4月1学期始業式前日

命照が帆帆良に来て一週間ほどが経ちここでの生活に慣れ、兄遥照達に連絡を入れたり精霊達を呼んだりしていた。

先日記り合ったエヴァと茶々丸とはあの後何度か食事をする事があつたりしてKOS・MOSと茶々丸は互いに食事など競い合っている。

そして始業式前日に学園長から連絡があつた

「夕飯時にすまんの、明日の始業式なんじゃが朝、8時頃学園長室に来てくれんかの紹介したいものが居るんじゃ」

「わかりました。では失礼します」

命照は携帯を切ると居間に戻り食事をしていたエヴァに謝った

「食事中に済まんな。」

「別にかまわん。KOS・MOSの作る物は結構気に入ってるし、この畳の部屋も気に入ってるからな気分がいい」

「お褒めに与り光栄です。」

エヴァはKOS・MOSに茶碗を差し出しながらそういつた。

「で内容は何だったんだ？」

「ああ明日早めについて学園長室に行くことになっただけさなんでも紹介したいものがあるんだと」

命照はそういつたとご飯を食べはじめた

こうして食事が終わりエヴァは家に帰る時間になり

「さてそろそろ帰るか。それじゃあな・・・明日から楽しくなるといいな・・・」

エヴァそう呟くとそのまま帰って行った

「なんだエヴァのやつ。変なこと言う・・・KOS・MOS明日から調査を本格的に始める準備の方は大丈夫か」

「はい、準備は滞りなく完了しております。」

命照は自己紹介をすると

「あつはい。僕はネギ・スプリングフィールドです。こちらこそよろしく願います」

ネギも自己紹介する

「それじゃ二人とも3年A組を頼んだぞ」

学園長の激励をきき命照とネギは学園長室を出た

学園長室を出てネギの案内の元3年A組の教室に向け歩きはじめた。つくまでの間お互いにさらなる自己紹介をしたり今日の予定や名簿の確認をしたりした

「え」と榎木さん、僕のことにはネギと呼んでください」

「ああわかったよ。ネギ先生。俺のことも命照でいいよ」

「そうですね。それにしても命照さんは15歳で先生だなんてすごいですね

「なに言ってるんですか。ネギ先生の方がすごいじゃないですか10歳で先生なんて」

「えっ僕が先生をしてるのは……あつ着きましたよ」

ネギは何やら考えるように俯くが教室に着くと振り払うように顔をあげた

「呼びますのでここで待ってて下さいね」

~~~~~

ネギが中に入ると何やら騒がしくなった

「3年A組！ネギ先生！」×数十人

そんな声が聞こえ命照は

「元気な娘たちだなあ」

そう感じしていると

「今日から一年間よろしく願います。それと今学期から副担任が変わります。新しい副担任の方を紹介したいと思います。」

「えっ新しい先生？朝倉何か知ってる？」

「知ってはいたんだけど来ることしかわからなくて何も情報がなくてさ」

「ようやく来たか。茶々丸、あいつだろ」

「はいマスターあの方です」

「ふふふ私を見てあいつはどんな顔するか楽しみだ」

なにやら騒がしくなったりドアの辺りになんか気配がありこそごと何やらしていたりしたが命照は何をしているか気付いていたが気にしなかった

「でっでは入ってきてください」

なんか声が震えていたが呼ばれたので命照は中に入る

コンコン

「入ります」

命照がドアを開けるとドアと連動して黒板消しが降ってきたの軽く横に移動し手で取っ手をつまみそのまま歩くと細い糸に触れ切れると矢が横から射られそれを指でキャッチし教卓の前にやってきてそのまま黒板に自分の名前を書いた

「はじめまして今日からこのクラスの副担任をすることになった榎木・命照だ。よろしく頼む」

こうして簡単に自己紹介すると一気に騒ぎ出した

「きゃーすごい、あれを全部防ぐなんて」

「結構かっこいいわね。」

「それにしてもネギ先生よりも年上みたいだけど私達と同じぐらいじゃない？」

「ニン かなりの実力者のようでござるね」

「みよう君……」

「あの足さばき、只者じゃないアルよ」

「「手合わせしたい（でござる）（アルね）」」

なにやら物騒な話も聞こえる。そして生徒達が詰め寄ってきた

「先生、年はいくつなんですか」

「出身はどこ？」

「兄弟はいるの？」

「ネギ先生みたいに頭いいのかな？」

怒濤の質問攻めあっている命照だが一つ一つ答えていく

「年は15だ。兄と姉二人の三人いる。出身は岡山の山の方だ。一応海外の大学を飛び級で卒業している」

こうして質問に答えていく命照にとある女生徒がさらに質問を重ねる  
「先生は彼女はいますか。もしくはこのクラスに好みの子はいますか」

無邪気な顔でメモを書きながら聞いてきた

「彼女はいないが一応婚約者はいるな。あとこのクラスならえ」と  
・・・」

さらりと爆弾級の発言をすると命照は名簿を見てクラスの顔を確認する

「婚約者がいるんですか？その人とはどの辺まで」

「ん？その人とはなにも、その人に好きな人ができれば解消すると約束してるしな。そうだな近衛木乃香と桜咲刹那とエヴァンジェリンに絡繰茶々丸かな」

名簿を見て答えるとまた騒ぎ出した

「木乃香どうしたの？」

「刹那？」

「エヴァンジェリンさんか」

「結構好みが広いですね」

好みの子にあげられた子の側の子たちは様子をうかがう

「実は近衛と桜咲とは幼いころ会ったことがあるんだよ。エヴァンジェリンと絡繰とは家が近くてな。知り合いだからという感じだな」

こうして質問会をしているとドアを開ける音がして

「ネギ先生、命照先生。今日は身体検査の日です。3・Aも準備をしてくださいね」

「あっそうでした。皆さん身体検査なのでえつとあのぬモガッ！」

「はいはいそこまで、委員長は……」

「はい、私です」

「え」と雪広あやかか後頼むな」

「はい、わかりました。ではみなさん準備を始めてくださいな」

あとのことを委員長の雪広あやかに頼むとネギを連れて外に出た

「ぶは〜なにするんですか命照さん。」

「いやなにあのままいくと、服を脱いでくださいとまで言いそうだったから」

「あっそうですね。止めてくれてありがとうございます」

その後クラスから聞こえる楽しげな声を聞きながらネギと命照は話している

「先生ー大変やーまき絵が！まき絵が！」

生徒の一人があわてた様子で走りながらネギを呼ぶと

「なに！？まき絵がどうしたって！？」×複数人

「わあ〜〜〜」

「お前ら服着ろよ……」

ネギはいきなり窓やドアから出てきた生徒たちに驚き命照は素早く後ろを向き注意した

### 保健室

「ど……どーしたんですか？まき絵さん？」

「なんでも桜通りで寝てるるところを見つかったらしいの……」

ネギは何やら考えていると同じく見舞いに来た生徒が

「たしたくないじゃん」

「甘酒飲んで寝てたんじゃないかなー？」

「昨日暑かったし涼んでたらそのまま寝てしまったとか？」

そんな話をしている中ネギは何やら難しい顔をしていた

「ネギ……ネギったらどうしたの？」

「え？あっはいアスナさんなんでもないですよ。みなさんまき絵さ

んはただの貧血みたいですので大丈夫みたいです。それとアスナさん今日は帰りが遅くなるので晩御飯はいいのです」

「えっそう、わかったわ」

「おいそろそろみんな教室に戻れよ」

「はい」

そういつてみんなを教室に戻すと命照は一人なのを確認すると亜空間から検査キットを取り出す、それを寝ている生徒にかぶせるとウィンドウを開き何やら操作し始めた

「え〜となになに、確かに体内の血液が少し少ない誰かに抜き取られたようだ・・・それとデータにはないものが検出されるとはこれが魔法の力・・・俺たちが使うのとは若干違うのか・・・そうするとこの力は洗脳系の術式に似ているな・・・これをこうしてっ・・・これで大丈夫かな」

命照はまき絵にかかっていた洗脳を解くとまたなにやら取り出した。それは注射器である

「これで目覚める頃には貧血も治ってるだろう」

注射器の中身は特製の栄養剤でそれと注射するとウィンドウを消し検査機とも亜空間に転送しそのまま保健室を出て行った

校舎屋上

「むっ！」

「どうかされましたか？」

「昨日、佐々木まき絵に仕掛けた下僕の術が解かれた」

「魔法先生に気付かれたのでしょうか？」

「そんなはずはないじじいと契約で坊主が気付くまでは好きにしているとしている」

「ではいったい誰が？ネギ先生が？」

「それはないだろう。魔力の残り香には気付くだろうがそれ以上は無理だろうから」

「マスター誰か来ます」

「なに？せつかくのサボりが台無しだな」

そついうと立ち上がり屋上を出ようと扉に近づいた時扉が開いた

「ここは屋上か・・・ん？おおエヴァじゃないか」

「貴様は命照・・・何故ここに？」

「命照先生、こんにちは」

「茶々丸も一緒か。いや今日は授業がなくてな暇だったんで校舎の見学でもっと思ってな。それよりエヴァお前が中学生だったとは驚きだ。教えてくれてもよかったんじゃないのか」

「ふん、聞かれなかつたし教えてやる義理もない」

「ひつでなーお隣さんだろ」

エヴァは話もそこそこに屋上を出て行った

命照も屋上をでて職員室に帰って明日の準備をし始めた。この後に起きるイベントを思いもしないで

麻帆良編3エヴァの章1（後書き）

今回から新学期エヴァ編です。次回は木乃香と刹那と再会です

麻帆良編 4 エヴァの章 1・5 (前書き)

エヴァのイベントは無いです

放課後

命照は明日から始まる自分の授業の準備をしていたら少し遅くなった。KOS・MOSには連絡を入れてあるので大丈夫だが

「さてそろそろ帰るとするか・・・お先に失礼します」

他の教師たちに挨拶をし帰宅をする。そして桜通りの近くを通っている時何やら騒がしいので行ってみるとネギとエヴァが対峙していた。ネギは一人の女生徒を抱えながら何か言っている

「何者なんですかあなたは・・・僕と同じ魔法使いなのに何故こんなことを!？」

「この世には・・・いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ。ネギ先生」

そんな会話をしている二人を命照は気配を消しつつ見ていた

「なんと調査対象がこんなにも近くにいたとは・・・ラッキー」

ちよつと場違いな感想を思っていたがあちらはまた女生徒が増えていた

「アスナさん!このかさ、宮崎さんを頼みます。僕は犯人を追いかけますので・・・では」

「ちよつとネギ!つて早!」

ネギはエヴァを追いかけていった。命照はとりあえず残された生徒をどうにかするために出て行った

「騒がしいから来てみれば一体何があった?」

「あつ柁木先生!?!ちよつどいい所に」

「みよう君・・・」

「どうした神楽坂?」

命照は上着を取り気絶している宮崎にかけてやる

「このかと本屋・・・のどかちゃんお願いね」

「えっお前はどこに……っっていねえし」

アスナはネギを追いかけて走り去ってしまった

「さてどうするかな……」

「……」

気まずい空気の中命照はある茂みを向き叫んだ

「そこにいるんだろ出てこいよ」

ガサッと茂みが揺れると一人の女の子が出てきた

「やっぱり……」

「せつちゃん……」

出てきたのは桜咲刹那だった

「そうだこの子連れて行かなきゃ」

そういつて宮崎のどかを背負うと三人は歩き始めた

「ごめんな。このちゃん、せつちゃん。」

「その呼び名覚えててくれたんやね」

「当たり前だよ」

「命照先生はいままでどこにいたんですか？長に聞いても何も教えてはくれませんし」

「詠春さんか……ここに来る前に挨拶してきたよ。そしたら君たちのことをよろしく頼まれたよ。」

「お父様が？」

そうやって少しづつ昔のように戻りつつあったが女子寮に着くと

「おっ着いたか。さすがに入るわけにはいかんからな。それじゃあこの子頼むな」

「はいわかりました。……みょう君……」

「やっと呼んでくれたねせつちゃん。……それじゃ。そのうち家に来な歓迎するから」

「うん絶対行くな……あと……その……あのなみょう君……今日  
はありがとーな」

「当然のことをしたまでさ。」

命照は手をひらひらさせながら歩いていった

「さてネギ先生はどうなったかな」

「さういうと建物の屋上までジャンプで飛び乗った」

「なんだ終わった後かよ。しゃーね残留魔力でも解析するか」

「さういつて命照はウィンドウを取り出し何かを打ち始めた、小一時間するとKOS・MOSから連絡がありこれから帰ると答えウィンドウをしまつて屋根伝いに飛んで帰った」

命照家龍虎皇内研究所

研究所にいたのはKOS・MOSと命照で、解析した魔力のデータを見ながら呟いた。

「なるほど。しかし残留のデータしかないから威力までは予測しできませんか。」

研究所では手に入れたデータで威力のシュミレーションをしていたがどうにも納得がいかない様子で

「KOS・MOSこの一週間で魔法使いの戦闘は何回あった」

「龍虎皇様の監視によりますと今日を含めて4回です。うち一つに刹那様の反応もありました」

「なにせつちゃんの・・・そうか・・・このちゃんのは？」

「木乃香様の反応はありません」

「そうか。その辺は今度、調べてみるか。今日はこの辺で終わりだ」命照は遅めの夕飯を取ろうとした時龍虎皇からなにやら学園に侵入者があると知らせがあったししかも自分のクラスの生徒が戦っているようだ

「しゃーないいくか。KOS・MOS行くぞ」

「了解です。」

麻帆良学園郊外の森

そこでは刹那と褐色の女性がともに人外の者俗に悪魔と呼ばれるものと戦っていた

「くそっ！なんで今日に限って攻めてくるんだ。せつかくあの人と

また・・・くそ斬空閃！！」

「今日の刹那はかなりご立腹だな。柁木先生となにかあったのか」  
刹那はあの後木乃香と話そうとしたが裏の仕事の連絡がありやもな  
く来たのだ。なので悪魔に八つ当たりつぽく倒していた。それを見  
ていた褐色の女性は銃を撃ちながらつぶやくと

「みよう君は・・・くつ斬岩剣！！！」

刹那は顔を赤くしながら悪魔をきりつけている

「みよう君ねえ、柁木先生がいつてたと通り昔何かあったのか」

「真名うるさいぞ！真剣にやれ！」

「それはこちらのセリフなんだがな」

そんな言い合いをしながらでも着実に悪魔を倒していく

「しかし今日は多くないか？」

「そうだな。しかし上は私達でも大丈夫と判断したんだろ」

かれこれ1時間ほど戦っているがまだかなりいるようで

「しまった。そろそろ弾の予備が切れそうだ・・・どうする・・・

ここは携帯も圏外だし念話も妨害されている様子だが・・・引くか  
？」

「そうしたいのも山々なのだがこうも囲まれては・・・」

刹那も疲れが出てきたようで細かい傷が大きくなり始めていた。真  
名と呼ばれた子も弾が尽き体術で応戦するが疲れもあり防戦になり  
つつあった

「くつここまでか・・・みよう君・・・このちゃん・・・」

その時、刹那の耳に懐かしい声が聞こえた

「せつちゃん、呼んだ？」

「えっ・・・？」

そこ木の上に現れたのは見慣れない服を着た命照とKOS・MOS  
だった

「命照先生！？・・・何故ここに・・・」

「先生ここは危ない早く立ち去るんだ」

「うむ。生徒が危ない目に会っているのに逃げるわけにはいかん

な

「みよう君！」

刹那は叫ぶその隙について悪魔が刹那にその爪を振りおろした

「破道の一「衝」<sup>しゅう</sup>」

命照がそう呟くと指先から出た不可視の衝撃波が刹那を襲っていた悪魔を吹き飛ばした。そして命照は木を飛び降り何も無い空間から剣を取り出した

「フランベルジュ……魔神剣双牙<sup>まじんけんそうが</sup>！」

命照は炎の力が宿りし剣フランベルジュを取り出し気を込めて魔神剣を繰り出した。炎を纏った気の刃が二人の周りの悪魔たちを斬り燃やし消し去った

「二人ともこつちだ」

「えっあはい！」

二人が近くに来たのを確認すると命照は

「KOS・MOS後を頼む」

「了解です。敵確認掃討します。F・GSHOT」

KOS・MOSは三連式のガトリング二丁転送すると両手で左右の悪魔を打ち始めた

「先生は一体何者？」

真名のいきなりの質問に耳を貸さず

「そんなのは後だ、まったく年頃の若い子がこんなに傷だらけになつて【命を照らす光よ、ここに来たれ……ハートレスサークル】」

呪文を唱えると地面に魔法陣ができ刹那と真名の傷を癒していった

「な！回復魔法！？しかしこんな魔法見たことないぞ！？」

「まあまあ気にしない。KOS・MOSそっちはどうだ？」

命照はKOS・MOSの方の様子を聞く

「問題ありません。あと120秒で殲滅完了です」

「わかった。さて仕上げだ」

そういつて立ち上がった命照はまた呪文を詠唱し始めた

「え〜とふむ……そこか！【縛道の四「這繩」<sup>はいなわ</sup>】」

命照が呪文を放つと森の木々をすり抜け黒いローブ着た男を縛り上げた

「なに！？何故ここが！？」

「な〜にこんだけの数を出し続けたんだ近くにいないとダメだろうと破道の「衝」<sup>しゅう</sup>これだよし」

術者を気絶させ本物の縄で縛りあげる命照と本当に120秒で残りの悪魔を葬ったKOS・MOSは刹那と真名に

「さてお前たちがなんでこんなことをしているんだ？」

「なんでって先生もこちら側の人間じゃないのかい？」

「昔もそんなことを言われたことがあったような？」

「命照様それは10年前の近衛詠春様に同じことを言われました」

「ああ〜そうだったか？」

「長が！？」

「まあいい今回は見逃すがあまり危ない事するんじゃないぞ。それと俺のことは内緒な」

そういうと命照は消えるように帰って行った

「さて刹那どうする？」

「私か・・・私は黙っててあげたい・・・」

「そうかわかった。こいつは私が引き渡しとくお前は先に帰っていいぞ」

「しかし」

「大事なお嬢様と話したいことがあったんじゃないのか？」

「うっ！わかった恩にきる」

刹那も察に帰って行った

「さてどうしたもんかな」

真名はそう呟くと男を連れ携帯が繋がる所まで行き魔法先生を呼び出した

「（やつと繋がったわい、大丈夫じゃったか？）」

「ええ大丈夫です。すいません戦闘の場所が圏外だったので連絡が遅れました」

「（そうじゃったか。しかし遠見の術も防がれてたもんじゃから心配して居ったんじゃ）」

「もう終わりましたので魔法先生に術者を引き渡したいのですがお願いしたいのですが」

「（ふむわかつたすぐに向かわせるわい）」

「それではお願いします」

真名は携帯を切ると近くの柵に腰を下ろした

「しかし柵木先生の技に術どれも見なかったことのない形態だったな」

魔法先生が来るまで数十分真名は今日の戦闘について考えていた

~~~~~

女子寮

「しかしこんな時間だしお嬢様にはメールを入れておくか」

そういつてメールを打ち送信した

木乃香は寝る寸前だったが携帯が鳴り確認すると宛名が刹那だと確認するとメールを見て微笑んだ

「やっぱりみよう君はうち等のヒーローや」

そうつぶやくと刹那に返信のメールを送った

「みよう君は昔も今もみよう君やな」

木乃香は上機嫌で床に就いた

「うっ~~~~こわいよ」

「うっさいわね！明日も早いんだから」

なにやら上が騒がしいがそんなのも気付かないほど気分のいい眠りにについている木乃香だった

麻帆良編 4 エヴァの章 1・5 (後書き)

- ・今回は麻帆良にきて最初の戦闘・・・KOS-MOS任せですが・・・
- ・次はエヴァ編を進めたいです

麻帆良編 5 エヴァの章 2

次の日学校に行くことと玄関前でなにやら騒がしので行ってみると

「みんなおはよう・・・どうした神楽坂？ネギ先生を担いで？」

「あつ柁木先生おはようございます。ネギったら朝になつて行きたくないつて駄々を捏ねて」

「あゝアスナさん言わないでください」

そしてクラスの前に来てネギを下ろすアスナだが手をしっかり掴んでおり引きずつて中に入っていく

「あゝんまだ心の準備が」

「まったくなにいつてるのよ・・・みんなおはよ」

「おはよう・・・情けない・・・」

アスナは無理やりクラスに入ると昨日休んだまき絵がきていた

「あ ネギ君アスナ」

「おはよーん？ネギ君どうしたの？」

「あつまきちゃん大丈夫なの？」

「すっかり」

「なにも覚えてないようだが」

どうやら昨日のことは何も覚えてない様子だった

「あ・・・エヴァンジェリンさんはいない」

ネギはエヴァの席を見ていないことに気付くとほっと息をついたがそこに

「マスターは学校には来ています。すなわちサボタージュです。」

茶々丸がすつと現れて答える

「茶々丸、いつといてくれあまりサボるなと」

「命照さ〜ん・・・」

「なんだネギ先生？」

「いえ・・・なんでもないです」

こうしてネギは暗いまま授業が始まった。そして初めての自分の授

業の時間になり3・Aにいくとなにやら騒がしい

「おい授業が始まるぞ席につけ」

「はい」×複数人

「おつエヴァもきちんと来てくれたか」

「ふん・茶々丸がどうしてもというから・・・」

「そうかありがとな茶々丸」

こうして授業が始まった

「じゃあ早速だがみんなの実力を知りたいので小テストを行なう」

「え〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！」×ほぼ全員

ほぼ全員からブーイングがあつたが、そのまま小テストは実施された。その後すぐに全部採点し、多くの者が間違つたところなどを、丁寧に説明し理解させた。

キーンコーンカーンコーン

「ではこれで授業を終わりにする。わからない所があつたらいつでもいいから聞きにきていいぞ」

そういつて命照は教室を出る

「ねえねえどうだった？ 柎木先生の授業？」

「え〜とね。いきなりのテストがちよつとね〜。でも解説なんかはすぐくわかりやすかつたよ」

「だよねえ〜」

「それよりさ〜、今晚やるんでしょ。アレ」

「うんそうだよ。でもさあ、なんかネギくん元気なかつたよね」

「そういえば〜パートナーがどうかいってたよね」

クラスの生徒は命照の授業内容を振り返ってみたり、なにやら計画を立てている様子

放課後

「みよつく〜ん」

「ん？このちゃん？」

放課後自宅途中、命照は木乃香にあつた。なんでも自分を迎えに来たというのだ

「あんな〜今日晩御飯は、女子寮で食べへんか？」

「え？別にいいが、いきなりどうした？」

「ちよとな。じゃ〜このままいこか」

「おいおいそんなに、引つ張るなよ」

「えへへへ みよう君」

木乃香は命照の腕を取るとしがみついた。とりあえず命照はKOS

- MOSに連絡を入れた

「KOS - MOS、今日、晩御飯を木乃香と食べることになったから」

「（わかりました。）」

~~~~~

女子寮特別大広間

「ここや、ちよとまってるな」

木乃香はそういうと中に入れていく数分もしない時

「モガモガ〜！」

後ろの方で何やら変な声があるので振り向いてみると、女生徒に担がれたネギがいた

「おお〜ちよどうぞよかったでござる。榎木殿、ネギ坊主を少し頼むでござる」

「先生、お願いします」

そういうとネギを下ろし二人の女生徒は中に入って行った

「おいおい。大丈夫か？」

「ぶは〜あれ？命照さん？ここはどこです？」

「ここは女子寮だが、なにをするかは知らん」

そういつてソファに座る命照だがネギは何やら怯えているようだ

「ネギ先生、今日は少し変だぞ？」

大方の予想はついている命照だが、あえて聞いてみる

「いえ、別になんでもないですよ。」

「そうか「先生達中に入ってください」ん？呼ばれたか。ネギ先生行くこうか」

「え？あ、はい」

命照たちは部屋の中に入ると

パーン、パーン

「ようこそ〜！榎木先生〜！」x全員

中に入るとお祝いのクラッカーと生徒の声が響いた

「榎木先生、昨日はまき絵のことなどがありませんでしたので、今日歓迎会を開かせてもらいました。それとネギ先生が元気がないようでしたので励ます会も開かせてもらいました」

委員長の雪広が説明してるが、それはネギの手を取ってだ

「みょうくん 主役はこっちやで〜」

「おっ木乃香がさっそくアタックし始めたぞ〜」

「そんなんやないって〜」

こうして命照の歓迎会は進んでいった

~~~~~

次の日、休みなので命照はKOS・MOSとともに街に出ていた

「さすがに技術が違うだけで街並みは一緒だな」

「そうですね。ですがあそこはアカデミーでもレトロと呼ばれる区

画でしたが」

「あ〜そうだったか？気にいってたんだがな」

アカデミーには様々な様式の街があり命照の研究所があったのもそんなレトロな街並みの所だった

「あれ？あそこにいるのは・・・」

「茶々丸ですね。あとなにやら誰かと対峙しているようですが」

「あれはネギ先生？」

「相手にエネルギー反応！魔法のようです！」

ネギが茶々丸に向かい魔法を打ちだそうとしていた

「ちつなにを考えているんだ！？」

そういうと龍虎皇から光鷹翼を借り瞬歩で茶々丸の前に飛び出した

「すいません・・・マスター・・・私が動けなくなったら猫に餌を・・・」

「・・・」

ドガーン

「【縛道の二十六「曲光」】」

大きい音とともに土煙がたち茶々丸が見えなくなった。

「【禁術「時間停止」】」

煙が晴れるとそこには茶々丸の姿はまったくなかった

「ちつ逃げちまいやしたか」

「そんな手ごたえがあつたよ。どっかに行けるはずは」

「ネギこれでよかつたのかな？いくらなんでもクラスメイトを襲うなんて・・・」

そういつて二人と一匹は去って行った。

その舞台裏、曲光の効果で相手には見えないがそこでは命照が一生懸命に応急処置をしていた

「ちつまずいなこのままじゃ。KOS・MOS！」

「はい」

「俺は茶々丸を研究所に連れてくお前はエヴァを連れてこい」

「よろしいのですか？それでは・・・」

「躯体のことは何とかなるが魔法関係はわからんだからだ」

「了解しました」

そついうと命照は龍虎皇内の研究所に転移していきKOS・MOSはエヴァを呼びにいった

~~~~~

転移してきた命照はさつそく茶々丸を調整槽に入れウィンドウを開き打ち始めた

「ここが・・・こうで・・・あれが・・・それで・・・そこが・・・そつなつて」

いろいろ打ちだすと調整槽の茶々丸がだんだん修復されてきて30分もすると完全に治りとりあえずエヴァが来るまで様子を見ています

「命照様、お連れしました。」

「茶々丸！」

「ケケケ妹よ・・・」

入ってきたのはゴスロリちつくな服装のエヴァとおそろいの格好のドールだったがしゃべってるし動いていた

「おい命照！どういうことだ！なぜ茶々丸が！」

「落ち着け・・・とりあえずボディや内部の修復は終わった。後は目覚めたとき記憶があるかどうかだ」

「ふん！わかったわ！じゃさつさとそこからだせ」

エヴァがそういうので、遥照は調整槽を解除し茶々丸をベットに寝かした

「うん・・・ここは・・・私は確か・・・」

「茶々丸！」

「マスターどうしました・・・」

「茶々丸、さつきお前に起きたことは覚えているか？」

「命照先生？はい記憶してあります」

「記憶の欠落はないか？」

「はい、自己診断プログラムでも問題は出ませんでした」

「そうか。それはよかった」

「よくはない！いったい誰が茶々丸を・・・」

「それは・・・」

茶々丸はネギのことを言い出せないでいた。それを汲みとった命照は

「すまない。誰がやったかは分からない。茶々丸を助けるので精一杯で」

「くそつわかつたらただじゃおかんぞ」

一応落ち着いた所でみんなで研究所を出て部屋でお茶をしていると

「それにしても命照、お前もこちら側の人間だったんだな」

「またそれか・・・こちら側とはいったいなんだ？」

命照は先日真名に言われたことも思いだし聞いてみる

「なに！？お前は魔法関係者じゃないのか？」

「違うぜ・・・俺は一応ただの教師だ」

「ただの教師が【魔法の箱庭】を持っているはずがない」

「マスターここは通常空間ではありません」

茶々丸は己の全センサーを使い解析しているがここが【魔法の箱庭】ではないことと学園内ではないことしかわからなかった

「なにどうということだ？学園内で内なら何故呪縛が発動しない!？」

「なーエヴァ、俺にもわかるようにいろいろ説明してくれない？」

「あーいいだろう。その代わりお前も正体を話せよ。」

「ああいいだろう」

そうしてエヴァは己のこと魔法のことを命照に説明した

「なるほど、吸血鬼ね。ほんとにいるんだ」

「ふん、その最強種吸血鬼の中でも私は真祖と呼ばれる存在だだ！」

「ふーん」

「ふーんって貴様！ふざけているのか！」

「だっていまは、麻帆良学園に封印されているんだろ」

「それも次の満月までさ」

「なにかたくらんでるのか」

「邪魔するならここで殺すぞ！」

エヴァはそういうと殺気を飛ばした……が命照は何吹く風とばかりに受け流していた

「別に邪魔はしないさ」

「それならいい。では今度はお前の番だ」

「俺か……俺はな……宇宙人だ」

## 麻帆良編5エヴァの章2（後書き）

今回、茶々丸が破壊されましたがネギ達は逃げたと思っています。  
これで命照は魔法のことを知り調査に進展ありそして次回はエヴァ  
にいろいろ暴露します

### 麻帆良編 6 エヴァの章 3

「俺は・・・宇宙人だ」

命照の告白にあたりに変な空気が漂ってきた。エヴァはそれを聞くとだんだん赤くなり・・・

「ふ・ざ・け・る・なーーーーー!!!!!!」

テーブルを思いっきり叩き立ちあがると命照に掴みかかるうとするエヴァだったがなんとか茶々丸が羽交い締めを止めてくれた

「マスターおやめ下さい」

「離せ茶々丸!こんなやつの話など聞く価値などない!何が宇宙人だそんなもの・・・」

「それがあるんだな。この銀河にはそれこそ星の数ほど文明がありそこに暮らす人がいる。この地球など比べられないほど高い科学力を持ち惑星国家、そんな奴らが数百年、数千年生きる人などごまんといる。この地球しか生物がないなどと考える方がおかしい」

「数千年も生きるだとバカな!それが本当なら証拠を見せる」

「ケケケ、ゴ主人ヨリ、ナガイキガイルノカヨ」

「証拠か」

「ほらみる!無いではないか」

「ホラホラ、サツサト見セロヨ。早くシナイト、斬り刻ムゼ」

エヴァは再び椅子に座ると足をテーブルに乗せ腕を組み。命照を睨んでいた。チャチャゼロはテーブルでナイフを研いでいた

「いや証拠ならたくさんあるんだがエヴァが納得するのはどれか悩んでるんだ・・・よしアレにするか」

そういうとテーブルの上にウィンドウが現れた。そこには地球が映し出されていた。

「これが何だっというんだ。ただの写真か!？」

「ンダコレCGツテヤツカヨ」

「マスター・・・」

「なんだ！いまはこいつに・・・」

「いま全部のセンサーが正常に起動しました。その結果、ここは地球上空1万m以上の宇宙空間です。さらに今も移動しています」

「なに？それは本当か・・・ってなぜチャチャゼロが動ける!？」

「ん？気付カナカタノカヨ、ゴ主人。ココニ来テカラスツト動イテタゼ」

エヴァは足を下ろし、チャチャゼロの方を見る。

「ああいまいる場所は宇宙船の中で、ついでにここには魔力に代わる力があるからな。」

「何をバカなことをここのどこが宇宙船だ。森や山や空まであるではないか。」

「それはなここはとある力を使い亜空間に固定しているからな」

「どういう意味だ!？」

「さっき言つてた【魔法の箱庭】だったかあれに原理は似ているはずだ。ただ規模はけた違いだここは約200km四方はあったと思うよ。大体二千ぐらいは自給自足で生活できるはずだ」

「200km・・・そんなのはどんな魔法使いでも無理だ」

エヴァは命照の突拍子もない話についていけず少しばかり放心していた

「まあ〜ここでの話はこの辺で終わりにしてここが船だっていうことを証明してやる」

命照はそういうとエヴァを連れ転送ポートに乗った

「さあここがメインブリッジだ!」

そういつて連れてきたのは樹を主張した感じの部屋だった

「なにを言うここは唯の庭では・・・だれだ!？」

「どうした？」

「いや、誰かに呼ばれた気がしたんだが・・・そこか!・・・木？エヴァが振り向くとそこには大きな樹があった

「うん？ああそうか。エヴァ、お前を呼んでいたのはそこにいる樹、龍虎皇だ。」

「龍虎皇だと、木如きにそんな大層な名前を……なに!？」

命照の方を見て樹の名を聞いたエヴァは、笑いながら再び龍虎皇の方を向くと、そこには小さな子虎と小さな龍（東洋系）がいた。

「なにいつの間に……こらやめる……そんなとこ……いや……」

【エヴァ……エヴァ……アソボ……アハハ……アソボ……】

「久しぶりに見ました。100匹の子虎と1匹の子龍の大打進」

別名101匹の子龍虎の大打進。KOS-MOSは懐かしそうに見ている。茶々丸はとても羨ましそうに見ていた。

「何なんだこいつらは、途方もない力を感じるぞ。」

じゃれつくのを止め、エヴァは周りにまわりついていてる龍虎皇達をまじまじと見て感じられる力に驚いていた。

「そいつらはこの船の……龍虎皇の疑似体です。」

「なに……しかし……おい命照!詳しく話せ」

「ふ〜ようやく信じてもらえましたか」

「ふん、ただこいつらから感じる力が地球ではありえないと感じたからだ。それよりさつさとどかんかあ〜」

エヴァは纏わりつく子虎達がうつとしいのか声をあげた。そしたら一斉にそこを離れ今度は茶々丸とチャチャゼ口の所に向かった

「オイ、ヤメ……クルナ〜」

「かわいい……」

【チャチャ……遊ボ……アハハ……遊ボ】

そして二人は100匹の子虎に飲み込まれていった

「ふう〜やっと解放された。それじゃ話してもらおうか」

「そうだな、簡単にこの宇宙のことを説明するか」

そついうと命照は話し始めた。宇宙の事、樹雷の事、アカデミーの事、そして自分の事

「なるほど。それでお前はその軍事国家惑星の皇太子だと」

「そう樹雷第二皇子にして皇位継承第二位それが俺だ」

「そんなお偉い奴がなんでこんなところにいる」

「皇子つたてまだ成人してないし、それに優秀な兄がいるもんでね。なかなか認めてもらえ無くてね。それで軍に入っているいるあつて地球で魔法使いに関して調査してるんだ」

「調査だと何故だ？」

「いずれ宇宙に出るとき、宇宙に害になるか。ならないか。それがわからないからな。まあ悪の魔法使いがいるんだ、警戒はするだろ」  
命照はエヴァの方を見て笑いながらいった

「そういうものなのか。それではこの樹はなんだ？お前たちの星で作ったのか？」

「いや違う。この樹は皇家の樹と呼ばれていて樹雷の星でしか根付かない樹で星に元々あったものなんだ。」

「元々・・・これが自然にできたものなのか・・・おいこの樹はなんなんだ。少なくとも私よりもずっと上だ」

「そうだな。皇家の樹は世代を重ねると次第に力は薄れていく逆に世代が上のは想像も絶するものだ。例えるなら第三世代で太陽系規模の艦隊を常時戦闘態勢にしておける位だな」

「太陽系・・・でたらめだな。ではこいつの世代はどの位なんだ？」

「龍虎皇は第一世代・・・樹雷でも俺を会わせて現在3人しかもっていない樹さ」

「・・・第一世代か・・・それよりも上はあるのか」

「いや・・・ある。始祖津名魅、つまり最初の樹さ。」

こうしてエヴァに皇家の樹の事を説明していた。説明を終えKOS

・MOSに飲み物を持ってこさせ、一息ついていた

「ふう〜。うまいな。命照よ、話にあつた生体強化と延命調整だったか。それはお前も受けているのか」

「ああー軍に入るときに受けたし龍虎皇からも、フィードバックを受けているから万年は生きるだろう。それは宇宙の者の中でも長い方だな」

「そうか。ふふ・・長い時を生きるのはつらいぞ。」

「さーな。俺はまだ15だ。それに俺の上司にかかると思屈しないぜ。そうだなお前も宇宙にくるか？」

「そうだな呪いが解いたら考えておくよ」

エヴァの顔は何やら満足そうな顔をしていた

「そうだエヴァのパーソナル取らしてくれよ」

「ぱーそなる？何だそれは？」

「エヴァの情報を取って呪いを分析してみるのさ」

「好きにしる。しかし解析できるまでに私は自分で解呪してやるがな」

「そうか・・当てはあるのか？」

命照は検査用キットをエヴァの頭に付け調べ始めた

「アーハッハッハ・・ゴ主人カツコワリー」

「黙れ！解体するぞ！」

からかうチャチャゼロを睨みながら終わるの待った

「よし、パーソナルのチェックは終わった。あとはじっくりと分析するだけだ」

「命照、次の満月の日に面白い事をする。調査とやらの足しになるやもしれんから楽しみにしている」

そういつて話し合いは終わり、エヴァ達を麻帆良の命照の家に繋がっている扉に連れて行く

「なんだこんな所に繋がっていたのか。」

「ああ。怪しまれないように俺か龍虎皇が認めた奴しか船に行けないようにしてるからな。これでエヴァ達も自由に船の方に行っても大丈夫だろう」

「オレモカ？」

地球に帰ってきたのでチャチャゼロは動けなくなったので茶々丸に抱えてもらっている

「ここを通ればな。そうだ、あと居住区にはいろいろ研究用やどこぞの原生生物が放し飼いになってるから気をつけるよ」

「ナニ？ソイツラハヤツチマツテモイイノカ？」

「別にかまわん。やれるもんならな」

「フン、イツテクレルゼ」

「あの命照先生、この服、明日お返しに來ます。」

茶々丸は修復後、KOS・MOSがいつも着ている樹雷の女官の服を着せていた

「あつ？その服はやるよ。いっぱいあるし、作れるし。」

「なんだその服は？・・・なかなか上質だな。」

エヴァは茶々丸の着てる服に興味を抱き、触つてみるとシルク以上の手触りと強度さに目を張る

「なんだエヴァ気にいったのなら、生地やるうか？」

「なに、いいのか？高いのだから？」

「別に高くはない、この船で作っているからな。タダでやるよ。」

そついうとKOS・MOSに生地数種と糸を持ってこさせ茶々丸に渡した

「ふん。そこまでいうなら、貰つておいてやる」

エヴァは照れているのか、そつぽを向きながら礼を言う。そしてエヴァ達は帰って行った

### 麻帆良編 6 エヴァの章 3 (後書き)

これでエヴァが宇宙のことを納得したか自信がありません。なのでここをこつした方がいいとありましたら教えてください。次回でエヴァ編を終わらせる予定です

## 麻帆良編7 エヴァの章4

お互いに事情を話した日から二日経ち穏やかな日が続いていた。何故かチャチャゼロは船の居住区の森が気になるのか、次の日に朝から森に行つてモンスターを相手に、戦っていた。それが余程気に入つたのか、その次の日も森に行つては戦っていた。なんでも今まであまり動けなかつたし戦いもできなかったそうで鬱憤を晴らすように森で戦っている。

エヴァはというと、次の日は風邪を引いたらしく学校を休んだ。茶々丸の話だと花粉症を合わせて発病らしくかなり辛いらしい。そしてエヴァの行つていた満月の日がやってきた

満月の日 放課後HR

「では、今日の夜8時から学園都市の全体メンテナンスの為、深夜12時までの間停電となる。全員8時までにやることはやっておけよ」

「はーい」x ほぼ全員

「榎木先生は準備できてるんですか？」

生徒の一人が聞いてきた

「俺か？俺の家は発電機があるから停電は関係ないよ」

実際は龍虎皇からエネルギーを引く張ってる。

「へえ〜いいなあ〜。うち、先生の家に泊めてもらおうかなあ〜」

木乃香はそういうと他の生徒が茶々を入れる

「木乃香ったら大胆〜」

「スクープ！生徒と教師の闇夜のお泊まり会！？かあ〜」

「やめんか！朝倉！」

そうして生徒のみんなは帰って行った。

「ふう〜今日か・・・ちょうど停電の日と重なるなんて偶然か？」

その夜

【こちらは、放送部です・・・これより学園内は停電となります。

学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてください・・・】

停電の時間になりエヴァのデータにはない力が検出され、それをKOS-MOSがキャッチ

「命照様・・・」

「ああわかった。行くぞKOS-MOS」

「了解です」

命照とKOS-MOSは家を出るとKOS-MOSの先導でエヴァの元に向かう。そして見えたのが空を飛びながらエヴァから逃げるネギの姿とそれを追うエヴァの姿だった

「ふむ。魔法使いは派手だね。聞いた話だと秘匿だというのに」

逃げるネギをエヴァは魔法で攻撃しそれを防ぐネギ、その姿はまるで宇宙でやる艦隊戦に似ていた。舞台は学園の端の橋で戦っていた

「おっ捕縛結果かぁーネギは喜んでるな・・・あつエヴァの奴、解除しやがった・・・勝負あつたな・・・出てこい二人とも」

そう思つて助けに行こうとすると後ろから

「榎木先生、ネギ坊主の邪魔はしないで欲しいでござる」

「そうだ。ここは見守ってみようじゃないか」

後ろにいたのは龍宮真名と長瀬楓であつた

「何の用だ。今の時間、生徒の外出は禁止されてるだろ・・・」

「いや私は、さっきまでアルバイトをしていてね。その帰りなんだ。」

「

拙者は・・・ネギ坊主をみかけて・・・」

「まあいい。おとなしくしている・・・ん？援軍か？ありや〜」

「アスナ殿でござるな」

再びネギの方を見るとエヴァに蹴りを入れる神楽坂明日菜の姿があつた。その数分後、橋の支柱の裏側から光が放たれた

「あの光は【<sup>バックテイオー</sup>仮契約】この状況からして契約者はネギ先生と神楽坂・

・・・」

真名は光の内容をつぶやいた。

「なんだか。アスナの動き変わったな」

「そうでござるね。素人の動きでござるが、なかなか」

「それにしても派手だね！。KOS・MOSデータの回収頼むぞ」

「承知してます。データ回収中」

「榎木殿、この方は一体誰でござるか？」

「俺の侍女だ・・・」

楓の質問に簡潔に答える命照は戦いの行方をしっかりと見ていた

「そろそろ終わりか。KOS・MOS停電の復旧までどの位だ？」

「あと3分25秒です」

「そうか・・・まったく無粋な連中だ・・・」

「榎木先生どこに？」

「この近くに侵入者だ。俺専門担当のな。まったくGPは何してるんだ・・・」

命照は最後の方は聞こえないようにつぶやくとビルの屋上から飛んで瞬歩で移動していった

「あれは虚空瞬動！？しかし・・・榎木殿はかなりのやり手と見える、一つ手合わせ願いたいものでござるな」

真名と楓はそのままネギの戦いの行方を見ていた。

~~~~~  
ネギとエヴァの勝負は時間切れでネギの勝ちとなっていた

「えへへ さあこの勝負、僕の勝ちですよ。もうこれで悪い事はやめて授業にもしっかり出てもらいますからね」

「・・・くっ！」

勝利に浮かれるネギと納得のいかないエヴァにそれを見つめる茶々丸と明日菜

「・・・わかったよ。確かに今日のは一つ借りだな・・・」

「よし。名簿の所に【僕が勝った】と書いとこ」

ネギはさらに浮かれて名簿のエヴァの所に何か書きこんでいる。それを止めようとするエヴァ・・・その時

「けけけ・・・いい所に出たな。噂の魔法使いつてやつか。」

「そのようだぜ。あの餓鬼二人がそうみたいだぜ」

いきなり現れたのは明らかに怪しい風貌の二人組だった

「貴様ら何者だ！」

エヴァは前に出てあいてを威嚇すると

「まあいいそれは捕まえてから聞きだしてやる茶々丸！」

「了解です。マスター」

そういつて茶々丸が侵入者に攻撃を仕掛けると侵入者に当たる前に何かを防がれた

「なんだこのアンドロイドは、うちのギルドでももつとましなもん作るぜ。」

そういつと茶々丸は吹っ飛ばされ半壊状態になってしまった

「茶々丸さん！なんてひどい・・・」

「茶々丸！？貴様ら〜！」【氷爆！】
「ワイス・カースス」

エヴァは残りの魔法薬を使い攻撃を仕掛けた。しかしまた当たる前に無いかにつかつたようで今度は何か半透明なものが相手の前に出ていた

「なんだ。ガーディアンが反応するなんて結構強い攻撃だったみたいだな」

「ふん。こんなの屁でもねーよ」

そういつと侵入者は銃みたいなのでエヴァと茶々丸を撃った。そして二人はゴムのようなもので縛られたのである

「ふふふ。それは特注の捕縛用のネットだ。ちよつとやそつとじゃ切れねえぜ」

エヴァは外そうともがくがまったく外れる様子はない

「ちよつとこれ何なのよ。」

アスナも茶々丸を助けようとするがまったく歯が立たない。そうしたらネギが前に出て

「なんでこんな事するんです。今すぐ二人を放して下さい！」

「へっ！なんでせつかく捕まえた獲物を手放さなきゃいけないんだよ」

侵入者はそういうとネギに向かって半透明だったガーディアンを実体化させ殴りかかってきた

「ラス・テル マ・スキル マギステル・・・【風の精霊17人集い来たりて・・・魔法の射手・連弾・雷の17矢（セポテンデキム・スピリトウスアエリアーレス・コエウンテース・・・サギタ・マギカ・セリエス・フルグラリス）】」

「兄貴、無茶だ。エヴァンジェリンとの戦いでもう魔力なんか残ってネエだろ。」

案の定、魔法の矢はガーディアンにはじき飛ばされ拳が迫ってきた

「ネギーー！」

「アニキー」

「小僧！」

誰もがネギが吹き飛ばされると思い目を伏せるが一向に音がしない恐る恐る目を開けるとそこにはネギを抱え拳を受け止めている命照の姿があった

「命照！」

「えっ命照先生？」

「命照先生・・・ガクッ」

「ネギ！」

「安心しろただ気絶しただけだ。そしてお前も・・・」

「なにいつ・・・て・・・る・・・」

アスナの後ろにはKOS・MOSがいてアスナを気絶させた

「KOS・MOSみんなを頼むぞ。こいエターナルソード」

命照はそういうと剣を召喚した

「貴様ら、我、樹雷皇家が一人、柁木・命照・樹雷の名のもとにお前たちを捕縛する！」

命照は剣を向けて宣言すると侵入者は

「樹雷だと！？なんでこんなとこに居やがる！？」

「へっハツタリに決まってる。いけ！」

「まで！」

制止する声に耳を貸さずガーディアンを差し向ける侵入者A

「愚かな・・・虎牙破斬！」

向かってくるガーディアンを斬り上げそのまま斬り下げという2段攻撃をガーディアンも怯んだ

「次だ！秋沙雨！」

その隙に無数の突きを繰り出し最後に突き上げガーディアンは吹き飛んだ

「これで終わりだ！飛天翔駆！」

そのまま飛び上がり急降下し突きと衝撃波でとどめを刺した。ガーディアンは粉々になり修復は不可能だろう

「なに俺のガーディアンがこれしき攻撃で行動不能だと!？」

「おい高出力の攻撃でさっさと片付けるぞ！」

「おう、そうだな」

そういうと大型の銃を取り出して攻撃をしてきた。その攻撃はさっきのガーディアンよりも強力で

「おい命照ー！」

エヴァが叫ぶと命照は笑ってこう言った

「大丈夫・・・龍虎皇が力を貸してくれるから・・・」

そういうと手を前に突き出した時、相手の攻撃が命照を襲った

「命照ー！！！！！」

あがった煙で見えないがエヴァは命照が無事ではないと思っていた。しかし煙が晴れる頃になると急に光が輝いていた

命照の前に三枚の盾のようなものがあつた

「障壁!?!いや力が感じられない?あれはなんだ」

「光鷹翼・・・皇家の樹が作り出す唯一絶対無二の盾」

「光鷹翼・・・あつあいつ本物だ！」

光鷹翼を見た侵入者は青ざめ震えている。

「今度はこつちの番だ。」

そういうと消え一瞬で相手の後ろにまわった。

「瞬動!?!でも入りも抜きも見えなかつた・・・」

後ろにまわった命照は侵入者に剣をあてて鬼道で

「【破道の十一「綴雷電」つづりらいでん】」

「ぎゃばぎぐがでづヴぁ」

剣から発せられた電撃で侵入者を気絶させた

「ひっ……」

「お前たちはとりあえず瀬戸様に送る」

「瀬戸……樹雷の鬼姫！！！！い……い……いや待ってくれ、それだけは……GPに行つてなんでも話すから、樹雷の鬼姫だけは勘弁してくれ……」

「そうか、嫌か……だが断る！！」

ほころんだ顔が一瞬で絶望の顔になった

「KOS・MOS連れて行け！」

「了解しました」

命照はエヴァを開放しながらKOS・MOSにいう、そして侵入者を連れて行こうとした時後ろの方から声が聞こえた

「ちよつと待ってくれないか」

命照とエヴァが後ろを向くとそこには

「高畑先生？」

「タカミチ？」

そこには前3・A担任、タカミチ・高畑がたばこを啜え片手をズボンのポケットに突っ込んだ格好で歩いていた

麻帆良編7エヴァの章4（後書き）

さてネギVSエヴァと命照VS侵入者（宇宙海賊）の戦闘は終わりました。

エヴァとネギとの戦いの後、襲ってきた侵入者は命照の活躍により、無事、捕縛しKOS・MOSに連行しようとした時、

「ちよつと待つてくれないか」

学園側の方からやってきた男に止められた

「高畑先生」

「タカミチ」

エヴァと命照がそちらの方を向くとそこには二人の知っている男が歩いていた

「その侵入者をこちらに引き渡してくれないか」

「エヴァ、もしかして・・・」

「ああこいつも魔法関係者だ。しかもかなりの有名人だ」

命照の疑問にエヴァは簡潔に答える

「それにしても命照くん、君もこちら側だったなんて、ちゃんといつてくれないと」

「すみませんね。こちら側という意味を最近知ったもんでね」

「なるほど、エヴァに教えてもらったのか」

「まあそういうことです。それとこいつらは渡せませんよ。こっちで裁きますんで」

「それはどういう意味だい」

高畑はそれを聞くと戦闘態勢をとった

「気をつける。」

「・・・KOS・MOS連れて行け」

「了解です」

「待ちたまえ」

命照はKOS・MOSに連行するよう言つと高畑が何やら不可視の攻撃してきたが、転送されていきその場所を攻撃が通過していった「しまった・・・しょうがない。それじゃ命照君、学園長の所に来

てもらおうか」

「それはかまわないが・・・」

命照は先ほどまでいたビルの屋上を見ると何やら眩くと、数分後

「お呼びでござるか？」

「何の用だい？」

来たのは先ほどまでネギとエヴァとの戦いを見ていた長瀬楓と龍宮
真名であった

「ネギとアスナを寮まで頼むよ」

「わかったでござるよ」

「これで前の借りはチャラだよ」

そういうと二人は気絶している二人を背負って寮に帰って行った

~~~~~

学園長室

あの後、エヴァと茶々丸を家に帰り、高畑と学園長の所に来ていた

「夜分遅くにスマンの命照君。」

「いえいえ、とりあえずは説明しないとイケませんから」

「それじゃ説明してくれんかの、何故、侵入者を引き渡してくれん

のか、それと君は魔法使いなのかをのお」

命照はまず自分が魔法使いではないことを話した

「まず、俺はあなた達の言う魔法使いではありませんよ」

「なんじゃどういう意味かの」

命照は目を閉じた。それを見て学園長の細め目が鋭い目変わった

「高畑君、君は退出してくれんかの」

「しかし！」

「ワシに任せなさい。」

「わかりました。」

そういうと高畑は学園長室を出て行った

「これでよかるう。安心しなさい。この部屋には目も耳も無いから

のお」

それを聞くと命照は警戒を解いた

「学園長はどこまで知ってるんですか」

「柎木勝仁殿からいろいろ頼まれたんじゃよ。」

「兄上から！？というか学園長・・・兄上をご存じで・・・」

命照は驚きを隠せないでいた。何故、兄上のことをと。

「ふむ・・・あれはワシが駆け出しの頃、任務で岡山の山奥に行つた時じゃ。」

学園長はいきなり語りだした。

任務は中国地方で謎の失踪事件が連続で起きているというものだった。若かりし学園長（次より若学）は賢明な調査の結果、犯人らしき人物を見つけ出し山中を追跡していた。しかしとある山中で見失い辺りを探していると見たことも無い機械と人ではない生物を使う人達であった。応援を呼ぼうとした時に見つかり囲まれ絶体絶命な時に現れたのが柎木勝仁だった。そこで若学は信じられないものを見た。襲いかかるロボットを木刀のようなもので一撃で粉碎し、無数の光の矢のようなビームを光り輝く盾で防ぎ、あつという間に犯人達を倒した。その時も勝仁は有無を言わず。犯人達を連れて行ってしまい。その事件はうやむやになってしまった。もちろん消えた人達も捕まっていた時の記憶を失っていたが無事保護された。それに納得がいかない若学は周囲を懸命に調査し、ついに柎木の村を探し出しそこにいた勝仁に説明をと詰め寄った。しかしはぐらかされてしまったが、その後毎日のように勝仁の所に通い詰め説明を求めた。その結果、他言無用と制約をし宇宙のこと、勝仁の事を聞いたという

「つというわけじゃ。その後はの、馬があつたのか、度々あつとるんじゃよ。」

「じゃー兄上は魔法使いのことも・・・」

「そうじゃ宇宙の事を教えてもらったのじゃ。等価交換というやつじゃよ。」

「そうだったんですか。他に知ってる人はいるんですか？」

「いや、いないじゃろう。おぬしが教えたエヴァと婿殿以外は」

「なっ知っていたんですか・・・」

「これはつい最近知ったんじゃない。ワシが宇宙の事をしつとる事をほのめかすと婿殿がお〜」

「そうですか。わかりました。それで学園長、これからどうします。」

「そうじゃの。今回はそちらに任せるとして、命照君、君にはこれから魔法先生として頑張ってもらうことになるのお〜」

「魔法先生ですか。しかし俺の使うものは普通のとは違いますよ。」

「まあそこら辺は気にせんでもいい。しばらくの間はネギ君のフォロ―をお願いするんで。」

命照は了解すると今度は学園長が

「命照君は何故地球にきたんじゃない」

「知ってるんじゃないんですか」

「いや。命照君の事は勝仁殿もなにも言っていないので・・・」

「そうですか。俺は所属する所の上司に魔法使いについて調査せよとの、命令があつて、それで地球に」

命照は自分が地球に来た理由を説明した。命照はこれで調査が大幅に進むと考えていたが

「そうか。調査の方は認めよう。妨害もしない・・・しかし協力もしないと思ってくれんか」

「何故です？」

命照は学園長に聞くと

「ワシはこれでも関東魔法協会理事も務めておるんじゃない。そのワシが率先して情報を渡すのはおー。ちとまずいんじゃない。じゃからせめて中立の立場ということにしてくれ」

「そうですね。わかりました。では勝手調べさせていただきます」

そついうと命照は学園長室を出ようとする。ドアの手前で命照が学園長に

「そつだ。エヴァの呪いは解いても大丈夫ですか？」

「そ・・・それはまずいの〜ここにはエヴァを快く思っていない者もお

るんじゃない。じゃからの・・・」

命照はさらに

「では限定解除はどうです?」

「限定解除とな」

「はい。このままだとエヴァは修学旅行に行くこともできません。

かわいそうではないですか。15年もここに閉じ込められてるんですから。なので今、呪いの解析を行っているのですが解析結果次第では呪いのみ一時的に解除できるかもしれません。」

「ふむ。そんなことができるのかの?」

「まあ解析結果次第ですが」

これは嘘である。命照の持っている物を使えばすぐにでもできるのだが。

「うむ。そうじゃの・・・魔力はもどるのかの?」

「その辺はどうなるかわからないが、一般人より少し上程度に収まると思いますよ」

「わかった。それではの修学旅行などの学業に関係する時のみ許可する」

「ありがとうございます。エヴァには俺から伝えておきますので・・・では」

そいうと命照は出て行った。それと入れ替わりになるように学園長室に入ってきた高畑は

「学園長、いいんですか。」

「この件はこれでおしまいじゃ」

「しかし、得体の知れない人物をネギ君の側に置くなど」

「高畑君、ワシの恩人の弟さんじゃ。めったなことをいうもんじゃないぞ」

学園長は少し殺気をだして高畑に言う

「うっ・・・わかりました」

~~~~~

次の日

朝、エヴァの様子を見ることにした命照は、エヴァの家に着くと勝手に入る

「エヴァ昨日は、大丈夫だったか？」

「ん？命照か。大丈夫なものか！坊主には負ける。変な侵入者には捕まるし。茶々丸まで・・・」

「それで茶々丸はどうした？」

「昨晚の家に超に連絡を入れて葉加瀬と共にやってきて大学の研究所に連れてったわ」

エヴァはそういうとテーブルに座り何やら待っている。

「どうした。エヴァ？」

「今日は茶々丸がないのだ。KOS・MOS何か作れ」

「やれやれ・・・KOS・MOS頼む」

「了解しました。」

そういうとKOS・MOSは台所に向かった何度か使っているので、勝手知ったる他人のなんとやらもごとく、サツサツと作っていく

「そうだ。例の解析結果が出たんだ」

「解析結果？何だそれは？」

「なに言ってるんだ。お前の呪いのだよ」

「なんだそれか。でどうだった。どうせ解呪は出来ないんだろ」

「そうだな。結論から言うると完璧な解呪は出来なさそうだ。」

「それみ「しかし・・・」ん？」

エヴァの落胆の声を遮るように命照は声を入れる

「一部限定的に解呪ができることが分かったんだ」

「なんだと！」

エヴァはテーブルに乗り出し命照に詰め寄り胸ぐらをつかむ

「その方法はなんだ。さつさと言え！」

「ちよっ・・・苦し・・・やめ・・・」

「エヴァ様おやめ下さい。それでは言おうにも言えません」

ちよつと朝飯を作り終えて持ってきたKOS・MOSが命照を揺さ

ぶるエヴァをなだめるとようやく落ち着き手を放す

「ふう〜やつと解放された。ありがとうKOS・MOS」

「いえ。朝食をお持ちしましたのでどうぞ。」

「じゃいただくとするか」

そういつて朝食を食べだす命照をエヴァが

「呑気に飯食ってるば・・あい・・。ふん、せつかくだから食べ終わったら聞いてやる」

KOS・MOSの作ったご飯が気になったのかご飯を食べはじめた。
数十分後

「ふう〜ごちそうさま」

「お粗末さまです」

「でさっきの続きだが、本当に解呪できるのだな」

「正確には一部限定的にだが」

「どついう意味だ？」

「とある装飾品と装備している間、学園外の行事に参加できるようになるといった感じだ」

「というと・・・もじゃ!？」

「そうだ。来週からの修学旅行に行けるってことだ」

「本当か!? 嘘だったら貴様・・どうなるか分かっているのか!」

エヴァは立ち上がりなんかオーラのようなものが見える

「嘘ではない。しかしその装飾品が完成するのは前日になりそうだ」

「だったらさっさと作らんか!」

オーラは消え、今度は浮かれているのが手に取るように分かる

「そついえば学園長なんだが」

「じじいが、どうした？」

「実は・・・」

昨日、学園長が宇宙の事を知っていたという話をした

「なに・・・くそ! あのじじい、やっぱり知っていたか。通りでお前の事を気にしていたのか」

「それで、俺の任務を邪魔も協力もしない中立になるってさ。」

「それもそうだろ。立場が立場だしな・・・それで他には・・・」

「ネギのフォローをしろって」

「なるほど、修学旅行で何かやらせるつもりだな。」

「まあ、そんなとこだろうな」

「命照、そうなるとお前の戦闘力が気になる所だな。昨日の戦いも本気じゃないだろ」

「まあな。肉弾戦で本気になれるのは母親達ぐらいなもんでな。魔法関係はどうかは知らない。あまり使えなかったしな」

命照は訓練などは美砂樹や船穂といった一流の闘士に教えてもらっていた為、海賊などと白兵戦をやるときは全力でやると粉々にしてしまうので全力ではあまりやれなかった。魔法などは他の目がありあまりおおぴらに使えなかった

「そうか。じゃ修学旅行までの間、私がお前に魔法使いの戦いというものを教えてやろう。」

「いいのか？俺の魔法は普通のととは全く違うぞ」

「構わん。魔法は魔法だ。」

「そういうもんか？」

「そういうもんだ！」

エヴァは無い胸を張って言う

「無い胸言っな！」

「どうしたエヴァ？」

「いや、今、不快な言葉が聞こえたような気がしてな」
気を取り直して

「どうする？命照」

「そうだな。俺はまだ魔法使いの戦いというものは知らない。調査するにもそれを知らなくてはな。エヴァよろしく頼む」

「いいだろう！ではこれからは私の事をマスター師匠と呼べ」

「断る！」

考える暇もなく否定の言葉を言う命照にエヴァは

「なに嫌か？そうかじゃ好きに呼べ」

なにも無かったかのようにスルーした

命照は時計を見るとちょうど通勤の時間になっていたので

「そろそろ、登校の時間だな。先に行くが遅刻するなよ」

「ふん。大きなお世話だ」

~~~~~  
放課後

エヴァは大学部の超のいる研究所に来ていた

「超いるか？」

「おつエヴァかネ。どうしたか？」

「茶々丸の様子はどうだ」

エヴァは茶々丸の様子を見に来たのだった

「おおそうネ。ボディは半壊だがA Iや記憶ドライブなどには損傷は見られないネ。ボディの交換で済みそうネ。しかしエヴァ、茶々丸が半壊するなんてどんな化け物と戦ったか？」

「それは言えん。」

「そうか、そつち方面ネ。じゃあ茶々丸の記憶ドライブに私達でも解析できないファイルがあるのだが知らないか？」

エヴァはそう言われて真つ先に思いついたのが命照との話だった。

確かに例の話なら茶々丸自身で封印するかもしれないと

「スマンが私にも見当がつかないな」

「そうか」

「それはそうと茶々丸はいつごろに治る？」

「おおそれだったら今、葉加瀬が最終のチェックしてるネ。」

超がそういうと同時に奥の部屋の扉が開き葉加瀬と茶々丸が出てきた

「あつエヴァさん、来ていたんですか。」

「茶々丸の様子を見に来たそうね」

「マスター。ご心配をおかけしまして」

「ふん、もういいのだろ。帰るぞ」

「あつお待ちください・・・失礼します・・・マスター」

茶々丸は先に行ったエヴァを追いかけて超達に挨拶をして出て行く

た。

「さて、やりかけの研究でもしますか。超さんはどうします?」

「私か? 私はもうちょっとここにいるネ」

「そうですか。では失礼します」

そついうと葉加瀬は部屋を出て行った

一人になった部屋で超は

「何故? この時代にいるネ? . . . . . 師匠 . . . . .」

実は少しだけ茶々丸のファイルが解析でき、そこには超の知る . . .  
の姿があった

## 麻帆良編 8 (後書き)

実は学園長は宇宙の事を知っていた・・・今までは確信を持ってなかったが先の戦いで確信を持って説明した。という設定です。超の事は学園際編でわかります、そこら辺は決めているので・・・次回は修学旅行までのお話です

茶々丸を迎えに行き、その帰り道、カフェに寄っていた

「マスター何になさいますか？」

「ブレンドだ」

そういつて茶々丸がコーヒーを買ってきて席に着こうとすると

「あ……」

「ぬ……」

同じ席にネギがいた。一緒にアスナと隠れるようにオコジョのカモもいる

「こ……こんにちは。エヴァンジェリンさん……」

「フン！気安く挨拶を交わす仲になつたつもりはないぞ」

「こんにちは。ネギ先生、アスナさん」

エヴァはいないしたが茶々丸がしつかりと挨拶する

「エヴァンジェリンさん、昨日は一体あの後どうなつたんですか？」

「そうよ！あの時、命照先生がやってきたと思つたら、いきなり気絶させられるし」

ネギとアスナは昨日の事を問いただそうとすると

「昨日か？ただの侵入者が来て命照が倒しただけだ」

「やっぱり、命照先生だつたんだ。手伝ってくれてもよかつたのに……」

「命照の奴は学園長に止められていたんだ。責めるな」

「エヴァちゃんたら、命照先生の事やけに庇うじゃない。もしかして……」

「ふん！貴様には関係ない事だ！それにちゃん付けて呼ぶな」

「いいじゃないエヴァちゃん、それよりもエヴァちゃんはネギのお父さん好きだつたんじゃないの」

「ぶ……」

エヴァはいきなりすることに飲んでいて、コーヒーを噴出した

「き・・・き・貴様、やっぱり私の夢をー」

「い・・・いえ・・・あの・・・」

先日の事を思い出しエヴァはネギの首を絞めた

「・・・だが奴は死んだ。10年前にな。私の呪いを解きに来るといつときながら・・・」

「エヴァちゃん・・・」

エヴァは落胆しながら言う。それを見てネギは

「でも・・・エヴァンジェリンさん、僕は父さん・・・サウザンドマスターに会ったことがあるんです」

「なん・・・だと・・・」

「6年前のあの雪の夜、僕は確かにあの人に会ったんです・・・その時にこの杖を、もらって・・・だから、きっと父さんは生きてます。

僕は父さんを探し出すために、父さんと同じ立派な魔法使いマギマスター・マギになりたいんです。」

ネギは父親が生きてること、そして自分の決意のようなものをいう

「そんな・・・奴が・・・サウザンドマスターが生きているだと？」

エヴァはそんなネギの話を聞いて顔を伏せる。その顔は軽く頬を赤らめ少し涙目になっている。

「で・・・でも手掛かりは、この杖の他には何一つ無いんですけどね。」

「・・・京都だな。」

「・・・京都だな。」

エヴァは顔をあげてそういった

「京都に奴が一時期住んでいた家があるはずだ。そこになにか手掛かりがあるかも知れん。」

「ちょうど良かったじゃない」

「ハイ」

「え？」

「なに？」

次の日の放課後

ネギはうれしそうにHRをやっていた

「えーと皆さん、来週から僕たち3・Aは、京都・奈良へ修学旅行へ行くそーで、もー準備は済みましたかー!?」

「はーい」

生徒の方もハイテンションで答えた

「やれやれ、元気だなー」

「先生はどうなんです」

「楽しみだが、こいつらの面倒をみるのは大変そつだ」

「あはは〜そうかもね〜」

ハイテンションのネギに比べて少し低めの命照は前にいた朝倉に質問され正直に答えた。ネギは委員長の雪広に京都に行くという経緯を聞いて感動していた。

その時、教室の扉が開く

「あらあら、楽しそうですね」

「あつ!? しずな先生!？」

「ネギ先生、命照先生、学園長がお呼びですよ」

「えっ僕ですか?」

「ん?俺もか?」

「それとエヴァンジェリンさんも」

「私もか?」

ネギと命照は言われた通り学園長室に来た

「え・・・し・修学旅行の京都市行きは中止〜!?」

「何故だ!? じじい!？」

「うむ、その場合は行き先がハワイになるんじゃが・・・」

そんな学園長の声もネギとエヴァも落ち込んでいて耳には届いてなく、しょうがないので命照が代わりに聞く

「何故なんですか?」

「うむ、実はまだ中止とは決まっとらん。ただ先方が嫌がっておつてのつ」

その答えにネギとエヴァが復活した。エヴァはなにやら心当たりが

あるようで

「もしかしてその先方は・・・」

「そうじゃ・・・関西呪術協会・・・それが先方の組織の名じゃ」

「関西呪術協会？」

ネギは不思議そうに名を呟く、その半面、エヴァは少し苦い顔をしている。命照は何故な顔をしていた

「実はワシは、関東魔法協会の理事もやっとなるんじやが、関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪くてのう・・・」

「やはり・・・小僧がいるからだろ、それと私の事も」

「ふむ、すまんがそうなんじや」

「えっ！？何ですか!？」

ネギは何度目かわからない疑問の声を上げる

「ワシとしても、もー喧嘩はやめて西と仲良くしたいんじや。そのための特使として西へ行ってもらいたいんじや」

学園長は引き出しから手紙を取り出し

「この親書を向こうの長に渡してくれるだけでいい、しかし道中向こうからの妨害があるかも知れん。そやつらも魔法使いであるから生徒や一般人には手出しはせんじやろう、ネギ君にはなかなか大変だと思うがやってくれるかの？」

「は・・・はい！わかりました。僕に任せてください」

「うむ。よろしく頼むぞ。命照君はネギ君のフォローを頼んじやぞ」

「ええわかりました。どこまで出来るかわかりませんがね」

「そっいえば命照さんも魔法使いだったんですね」

「ああ最近、そうなったんだ」

「えっ？どういう意味です？」

「気にするな」

「あとエヴァンジェリンさんは学園から出れないはずでは？」

「その事じゃが術式が見つかったの学業に限り学園外に出れるようになったんじやよ」

「そうだったんですか。エヴァンジェリンさんおめでとございま

す

「ふん、完全に解けたわけじゃない」

「では二人とも頼んだぞ」

そういつて二人は出て行った

「じじい、貴様も命照の事知っていたんだな」

残ったエヴァは学園長に問いかけた

「うむ、その事は命照君の兄君に聞いたんじゃないよ」

「あいつの兄にか・ふん、まあいいあいつは気にいってるんだ。変なちよっかいを出すんじゃないぞ」

「わかっとなるわい。しばらくはネギ君の近くでの・・・」

~~~~~

「命照先生、改めてよろしくお願いします。」

「ああこちらこそ頼むぞ」

「へっへっ兄貴、おれっちも挨拶させてくださいよ」

「オコジヨか・・・」

「おれっちを一発でオコジヨだと言ってくれるなんていい人だねえ。おつと紹介が遅れやしたがおれっちはオコジヨ妖精のカモミールっていうもんだ。カモッて呼んでくれ」

「ああこちらこそ。よろしくな」

「そうだ兄貴、昼間言いかけたんだけどさー。昨日の仮契約の時、パクティオーカードみたいなのが出なかったか？」

「え・えとこれの事かな？」

「そーそー」

「何だそれ？」

そついうとネギの手からカードを取ると手にとってマジマジと見る

「へー不思議な感じがするな」

「返して下さいよー」

ネギは返してもらおうと手を伸ばす

「ほらよ。」

カードをネギに渡すとカモが

「命照の旦那、気になるんですかい？」

「ん？ そうだな、見たことのない者だからな気になると言っちゃ気になるな」

「ふくん。そうですかい」

ネギは返してもらったカードを見てなにやら赤くなっていた。その時、少し離れた所から

「おーい、ネギー」

「あつア・アスナさん」

「みょう君も一緒やね」

「木乃香か。どうした？」

「修学旅行の準備に買い物に来たんや。一緒にいかへん？」

「ああ別にいいぞ」

命照は木乃香の誘いを受け買い物に付き合つことにした

「ネギ何持つてるの？」

「えっとこれは・・・」

「えっなんや」

木乃香はネギの持っているバクティオー仮契約カードを見て

「あゝタロットカードや!？」

木乃香は占い研究部の部長でこういった占い関係の物は目がない

「ひゃーしかもアスナの絵が描いておるー? やーん、かわえ〜」

「ええなー」

「えー何・・・あ・ホントだ! いつの間に・・・しかも変な格好しているし」

「いえ・・・その・・・コレはっ・・・」

ネギはアスナに小さい声で言う

「これは仮契約の・・・」

「えっ? ああー」

「どうした木乃香、欲しいのか？」

「えっ!?! みょう君作れるん?」

「いや、そういえばどう作るんだネギ？」

「え〜と・・・その・・・」

「はいはい行くわよ！」

話を区切るようにアスナは三人を急かす。そんな木乃香と命照をみてカモが

「ふふ〜ん」

学園内シヨップ

「みよう君、これなんかどう？」

「なんか派手じゃないか？」

「せっかくやし、みよう君もかつこいい服着てかな〜、これ試着し
てき〜」

木乃香はそういうと命照に大量の服を渡す

「まったく・・・」

そういいながら命照は服を持って試着室に行く

「兄貴、このか姉さんてじじいの孫なんだよな・・・ってことは魔法
使いの血筋か・・・？」

「うーん、そうみたいだね。本人は知らないみたいだけど・・・」

それを聞いたカモは命照のいる試着室に走っていく

「あつカモ君？」

「ネギーこっちにきてー」

「はいー」

走っていくカモを不思議に思ったネギだったがアスナに呼ばれたの
で考えるのをやめてアスナの所に行く

「旦那、旦那・・・」

「カモどうした？」

着替えをしていた命照は下から聞こえる声に反応するとそこにはカ
モがいて

「旦那、さっき仮契約カードの作り方を聞きましたねえー」

「ああ木乃香が欲しがってたからな、簡単に作れるのか？」

「ああ実はそうなんだ。やり方はなただ相手とキスするだけでいい

んだ」

「キスするだけ・・・キスだと！」

命照は仮契約カードの作り方を聞いて少し驚いた。木乃香との事を考えると軽く赤くなる・・・その時

「みよう君、どう？」

「こ・・・このちゃん!？」

「驚いてどうしたん。でもまたこのちゃんって呼んでくれたなー」

木乃香は命照がまた昔のように呼んでくれたことがうれしく、顔がほころんでいる

「そうだ、このちゃんはネギの持っていたカード、欲しい？」

「うんめっちゃほしいなー。みよう君作れるん？」

「え!？ああー。さっきネギに作り方聞いたんだ」

「えっホンマ!？」

「ああ。条件があつてだな・・・その・・・キスをするのが作るための条件なんだ」

命照は少し恥ずかしそうに作り方を言う

「キス?それやったら、うち歓迎やわ。みよう君とキスなんて照れるわ」

そう言いながら試着室のカーテンを閉める木乃香であった

「じゃしよかー。みよー君？」

「ちよ木乃香・・・」

チユ・・・

「よっしや今だぜ・・・バクティオー仮契約ー!」

木乃香がやったのは頬であった

「木乃香・・・命照先生・・・居るの?」

カーテンを開けたのはアスナで後ろにネギがいる

「ちよつとなにやつてるんですか~~~~」

そういつてる間に空中にカードができ始めていた

「はわ〜手品みたいや〜」

「こつやつてできるのか」

できたカードを手に持って見てみると

「わ〜うちのカードや〜・・・あ・・・あ〜くん。なんでうちへちやむくれー・・・アスナのとちがうやんー」

「それはちゃんとキスしないといけないんですよ」

後ろで見ていたネギが答えるとカードは消えていった

「あ〜消えてもつた・・・みよう君、もう一回しよ？」

「このか、落ち着きなさい」

再び命照にキスをしようと迫る木乃香をアスナは押し止めた。その下でカモが

「ちっ・・・ほつぺただったのかよ・・・またしくじったぜ・・・ちやんとした仮契約カード1枚につき、オコジヨ協会から仲介料として5万オコジヨ\$が入るのによ・・・」

「貴様・・・そんなことの為に・・・」

「やつぱりあなたの仕業だったのね・・・」

命照とアスナはカモを捕まえるとお仕置きとしてサンドバックにしてやった

「今度やつたら、こんなんじゃ済まないからね。」

「これ以上はやばいっす」

「カモ君大丈夫？」

ぼろぼろのカモに釘をさすアスナと心配するネギの後ろで木乃香と命照は並んで歩いていた

「あーっーん、やつぱうちもあのカード欲しいなー・・・なあなあみよう君、今度はせつちゃんも呼んで3人でちゃんとキスしような？」

「なっ!?!」

「どうしたの？」

「なんでもないえ」

そういうと木乃香はアスナとネギとで寮に帰っていった、帰り際に木乃香が

「そや、みよう君明日開いてる？開いてたら一緒に買い物に付き合

って欲しいんやけど・・・」

「すまん。明日は用事があつてな」

「そやの・・・残念や・・・しゃあないネギ君と一緒にいい」

「すまないな。」

そういって家に帰って行った

麻帆良編9（後書き）

とりあえずこの辺で区切ります。次回はエヴァの別荘で命照の力を測ります。この命照が、仮契約のカードを持つとしたらどんな能力の道具がいいですか？ないままでもいいのですが、せっかくなので考えてみようと思ひまして、意見をください

休日、昼過ぎにエヴァの家に行くと、家にはエヴァが居なく茶々丸しかいなかった

「こんにちはー。」

「いらつしゃいませ。お待ちしておりました。」

「ん？エヴァはいないのか？」

「はい、とある場所でお待ちしております。こちらにどうぞ」

「どうぞつて・・・そっちは」

茶々丸は奥の部屋の方に歩いていき、それをついていくと

「こつちの方は入ったことがないな」

ついてきた先は家の地下でそこにはでかいフラスコがありそれを横にして、中に塔のミニチュアが入っていた

「茶々丸？これは何だ？」

「こちらにお入りください」

「だから一体・・・」

カチツ・・・シユン

フラスコに近づいた命照は何かのスイッチを踏むと魔法陣のようなものが現れて命照の姿が消えた

「おつと・・・転送ポートか・・・」

「こちらにどうぞ・・・足元に気を付けて下さい。」

「うん？おつ！おー！絶景かな」

茶々丸の忠告に周りを見ると樹雷・天樹の自分の部屋から見たような景色を思い出していた

「おつと、茶々丸までつて・・・」

先に歩いてく茶々丸を追いかけて小走りに追いかけていく

「待ち詫びだぞ、命照！」

「お、エヴァこんな所にいたのか」

「ふふふ、どうだ驚いたか、ここは私が造った【別荘】だ。しばらく使っていないかったが貴様の修行の為に掘り出してやったんだ」

「そうなのか？エヴァ、ありがとな」

「ふん。言つとくがここに入ったら一日経たないと出れないからな。覚悟しとけ」

「ほ、ここは加速空間なのか。加速具合は外一時間で中一日といったところか」

「な！な・・・何故それを・・・」

「おつ当たったか。しかし魔法も科学も同じ事できるんだな」

「なに？どういうことだ」

「いやなに。宇宙でも徹底的に訓練するためにこういった加速空間で年単位で伸ばすやり方もあるんだ」

「年単位でか・・・そういえば宇宙では寿命はあまり関係ないんだっ
たな。そうするとお前もその訓練をやったのか？」

「俺はまだやってないぜ。そもそもやる必要もないしな」

「まあいい。ではそろそろ始めるぞ」

「おおーそうだ。これ土産」

命照は持っていた袋を前に出すと茶々丸が受け取った

「それ龍虎皇の中で造った酒だ。飲んでくれ」

「そうか。ではあとで飲ませてもらうとするか」

「では、これは冷やしておきますので」

「よし、エヴァやるか。」

そういつて塔の屋上の広場にやってきた

「まず、貴様の実力を測る。チャチャゼロ！」

「ヤット、出番力、ゴ主人」

「チャチャゼロと戦って見せる」

「わかったぜ」

命照とチャチャゼロは広場の真ん中に向かって向き合って戦闘態勢をとった

命照VSチャチャゼロ

「コツチカラ、行クゼ！」

チャチャゼロは両手に持ったナイフで命照に斬りかかった

命照は背中に手を回しバッグから右手にソードと左手にナイフを取り出した

上から斬りかかるチャチャゼロのナイフをソードで受け止め

「そらよ！これでも食らえ！」

開いたナイフで横薙ぎに斬った

「ンナモン食ラウカヨ！」

そういつて受け止められたナイフの反動で上に体を浮かせ回避しそのまま命照の後ろの方に飛んで距離を開けた。

「ケケケ・・ナカナカヤルジャンネーカ。楽シクナツテキタゼ！」

「くくく・・確かに楽しいね。最近の海賊は骨のない奴ばかりだったからな。久しぶりに楽しめそうだ！」

命照はそういうとソードとナイフを仕舞い大剣・バスターブレイドを取りだした

「ソナナ、デケー剣デ俺様トヤロウナンザ、生意気ナ・・」

チャチャゼロは命照が武器を取り換えた事と変えた武器がトロソウな大剣で、それを見て少し苛立ちを感じた。

そして改めて構えをとると、今度は命照の方から仕掛けてきた

「そりゃー！」

命照は大剣を横薙ぎに払った。風圧で少し砂煙が立つがすぐ晴れた。横薙ぎにした場所にはチャチャゼロはいなく、大剣の方から声が聞こえた

「ケケ、結構速イエジヤネエカ。ダガソソナンデ、ヤラレネエゼ」

チャチャゼロは払った大剣の腹の上にいた。チャチャゼロはそのまま命照に斬りかかるが

「絶翔斬！」

「ナニ！？」

命照は一瞬で大剣を捻り縦にしてジャンプしながら斬り上げた。チャチャゼロは間一髪のところまでナイフを盾にして命照よりも高くに放り出された

チャチャゼロは急いで体勢を整えようとするが命照が技を出すの少し速かった

「断空剣！」

大剣を思いつきり横に振り竜巻のようなものを巻き上げながら斬りつけた

「クツ！シマツタ！」

またも打ち上げられたチャチャゼロは錐揉み回転をしながら落下し
てくる

「絶空龍影刃！」

落ちてくるチャチャゼロを見切つて落下に合して一刀両断にしたあと、高速の斬撃を加えた

「グウハ！」

「それまでだ！」

エヴァの掛け声で最後の一撃を外しそこで戦いは終了した。

「あー久しぶりだから手加減しそこなつたかも」

「チャチャゼロに勝つなんてなかなかやるではないか。」

エヴァは命照とチャチャゼロは相打ち位だろうと思っていたらしい

「さて次は魔法を見せてもらおうか」

「ああそれはいいが、ここではちよつと狭いな」

「そうかでは、下の砂浜に行くか」

そいつで二人は階段を下りて行つた。なにかを忘れて。

「オーイー。ゴ主人、命照！。動ケネエー。ンダヨ。オイテクナー」

関節を痛めたのか動けないチャチャゼロはエヴァと命照を呼ぶがまったく反応がない。チャチャゼロが発見されたのはそれから数時間後の事だつた

下の砂浜に着いたエヴァと命照はまず、命照の使える魔法について話していた

「お前の使える魔法は一体何なんだ？この前はなんか知らないのを使っていたが・・・」

「ああ、あれは鬼道・東洋系の呪術をベースに考えた魔法だ。」

「鬼道？聞いたことの無い魔法だな。どんなのだ？」

「鬼道には、破道と縛道があつて、破道は主に攻撃系、縛道は捕縛系のモノだ」

「二種類あるのか。」

「それで、鬼道は決まった言霊を詠唱したのち、術名を叫ぶことにより術が発動するんだ。まあこれは普通の魔法と一緒にだな」

「ああそつだ。その場合、ラテン語または古典ギリシヤ語で呪文を唱える」

命照は自分の使うモノの特徴などをエヴァに説明しエヴァも西洋魔法に似ている点などを指摘する

「それと、まだ見せてなかったが、もう一種類、別の魔法が使えるんだ」

「まだあるのか!？」

「ああ、それは西洋魔法の精霊に関する所を取ってそれをベースに作ったモノなんだ」

「精霊をだと、確かに精霊を使う魔法はある。坊主なんかは得意としているものだな。しかしそれを基にとはどういった魔法なんだ」

「じゃあ、見せてやるよ」

命照は席を立ち、杖を取り出しながら砂浜を海の方に歩いていく

「この辺でいいかな・・・始めるぞ」

「ああ、いいぞ」

「燃える!・・・ファイアボール」

命照が短く唱えると足元に魔法陣が出て杖の先から3つの火の玉が

出てきた

「なんだ。そんなシヨボイのがお前の造った魔法なのか？」

エヴァは出た魔法を見て落胆の声をあげた。その威力は魔法の矢の数本分にしか匹敵しないのである

しかし命照は次の魔法を繰り出した。

「まだこれからだぜ・・・【燃えさかれ、赤き猛威よ】・・・イラプション！」

今度は目標にしたであろう場所に魔法陣が出現し、命照が呪文を唱え終わるとその場所から溶岩が噴出した

「なに！？」

「その溶岩は魔力で作りに出してるから耐性のある奴はそんなには大きなダメージを与えられないんだ」

「しかし、これもまだまだだな。」

エヴァは威力的には中級魔法だが範囲も狭く使い勝手は悪そうだと思っていた

「なに、こつちもまだあるぜ。」

「じゃあやってみせる」

エヴァは最初のシヨボサではない魔法を見て少し感心する

「次は・・・【焰の御志よ、災いを灰塵と化せ】・・・エクスプロード！！」

今度は海の方に魔法陣が出現した。そして詠昌が終わると目標に向かつて空から燃えさかる火の玉が落ちてきて海に落ちると大爆発が起こった。

「な・・・なんだ。あれは、まるで火炎系高等魔法の【燃える天空】ウイラニア・フロゴシスではないか！」

エヴァは己の使う【こおるせかい】コスミケー・カタストロフエーの対極とも言える魔法と同等かそれ以上の威力を見て内心驚いていた

「つとまあゝこんな感じだ」

【エクスプロード】の熱量により吹き飛んだ海水はすべて蒸発して海の方では水蒸気の雲ができていた

「しかし、すごい威力だな。」

「まあな。これの他に各種属性が存在するんだ」

「なに、属性ごとにとだど!？」

「そうだ。火・水・風・地・雷・氷・闇・光と10種に無属性をあわせて11種類が存在するんだ」

「そんなにか・・・それだと大元がなければ存在もできないのではないのか？」

「ああ、そうだな。でも大元が存在するならどうだ？」

「どういことだ」

「エヴァ、地脈や龍脈のことは知ってるか？」

「ああそれくらいは知っている」

「そうか、それで俺は主にその地脈と龍脈と地球の魔法についての研究をしていたんだ。でその研究成果の一つがこの魔法というわけだ」

エヴァは命照の説明に納得した

「でこれからどうする？」

命照自分の能力の説明は終わりだという、そうするとエヴァは

「そうだな。ここに入ると24時間は出れんから、とりあえずは飲むか」

「おっいいいね。さっそく俺の土産のやつ飲もうぜ」

「話はこれくらいにして、行こうぜ」

そういつて最初の広場に向かっていた

そこには忘れられていたチャチャゼロが恨めしそうに睨んでいた

その後、茶々丸が作っていた料理をつまみながら持ってきた神樹の酒とエヴァの秘蔵のワインを飲み明かした。

エヴァは神樹の酒を飲んでものすごく驚いていた。今までに飲んだことの無い味だと、そしてかなり気にいったらしくまた持つてくるようにと命令しきたりもしていた。

この宴会は夜通し続いた

~~~~~

## エヴァの修行後原宿

なぜ命照が原宿に来ているかというところ少し遡る

「イツつっ・・・やっぱ飲みすぎたか」

エヴァの家を出て少し経った時、携帯が鳴った。表示は木乃香だった

「（あゝやつと繋がったわゝ）」

「あー木乃香か。すまん、ちょっと電源切ってたから」

「（そうなん？じゃあ用事って終わったん？）」

「ああ終わったよ」

「（じゃゝいまから原宿にこれへん？）」

「原宿に？別にいいけど、どうした？」

「（実はな・・・・・・な訳なんよ）」

「そういう訳か・・・なら付き合おうよ」

という理由で原宿にいるわけである

「あつみよう君ゝ。」

「木乃香、待ったか・・・ん？」

待ち合わせの場所に着くとそこには木乃香とネギがいた

「ネギ先生、あなたも居たんですか？」

「え？ええーこのかさんに誘われまして」

「じゃあゝ二人ともいこかゝ」

木乃香はそういうと先に歩いていった

「やれやれ・・・さっさいこうか。ネギ先生」

「はい。」

まずやってきたのは古着屋、そこで木乃香は服を持って命照に見せた

「なな、コレなんかどうやる、みよう君」

「そーだな。木乃香には似合うが、あの子だろ、可愛すぎないか？

あの子なら・・・コレだろ」

「あーそやね。それもありやねゝ。ネギくんはどう思うっ？」

「えっあつ、そうですねー、どっちも似合うと思いますよ」

「あんもー、ネギくんちやうてー」

「あははは」

そうやって三人は楽しそうに買い物をしていた。

「ん？」

「どうかしたん？」

「いやなんでもない」

「ええ、ただ何か変な気配があつたもので・・・」

ネギは持ち前の感覚で何かを感じ取った様子だが、命照は後ろの自動販売機の裏にいる生徒三人組に気付いているがそっちはスルーすることにした

「でもスイマセン、このかささん、命照さん。せっかくの休日なのに・・・明後日からの修学旅行の準備もしたいでしょう？」

「ううん・・・ウチ嬉しいんよ。ウチも考えてたことやし、それにみよう君とお出かけできたしな」

木乃香はそういつて命照の腕に抱きついた

「おい木乃香こんな所でやめないか・・・そうだぞネギ先生、俺も副担任だしそういつたことにも参加しないと」

命照は抱きついた木乃香をたしなめ、ネギには気にするなといったそして買い物再開すると、いろいろ見て回つた。お茶を飲むために喫茶店に入ろうとすると、命照は気になる物があつたと言つて二人と別れた

その後、買い物済ませた命照は木乃香に連絡を入れ、合流場所に着いた時、そこには先ほどの気配達、柿崎美砂、釘宮円、椎名桜子と何故か明日菜と雪広あやかの姿まであつた。こちらの姿を見つけた雪広は命照に詰め寄ると

「何故、柁木先生が居ながらネギ先生を守つて下さらなかつたのですか。ネギ先生を膝枕なんて・・・私がしたいですわ!!」

命照の胸ぐらを掴みシェイクしながら己の欲望を喋る

「あゝみよう君、それにみんなどうしたんこんなところでー？」  
そんな騒ぎで寝ていたネギが起きて

「あ、あれ？皆さん・・・アスナさんまで！？なんで・・・」  
起きたばかりのネギはここにアスナや雪広達が居ることについていけてない様子で

「ネギくん、どうやらバレてみたい」

「ええ〜そんな！？驚かそうと思ってたのに・・・」

「しょうがあるまいこの様子だとはつきりと話した方がいいぞ」

「柎木先生！？それは一体どういう意味ですの！？」

雪広は命照をさらにシェイクしながら説明を求めた

「ネギ、一体どういうことなの」

アスナもこの一件に対しての説明をネギに求めた。

「う〜ん、こうなったらしゃ〜ないな」

「あ〜う〜。そ・そうですね。一日早いですけど・・・えーと・・・」

ネギと木乃香は覚悟を決めたのか例のことを切りだす

「はい、アスナさん。お誕生日おめでとうございます。」

「・・・」

突然のサプライズに買い物をしていたネギ達三人を除き他の四人は目を点にし、アスナは突然の事に戸惑っていた

「今日は朝からずっとこのかさんと、このプレゼントを選んでいました。」

「そや、でもなかなか決まらなくて、やからみよう君を呼んで探してたんだよ。これはアスナの好きな曲のオルゴール・・・ホントは明日の予定だったんやけど・・・」

「それとこれが俺からのプレゼント」

命照のあげたプレゼントは樹雷の生糸織りのスカーフだった

「ありがとー先生。うわ〜キレイ〜。それにこの手触りすごーい」

アスナは貰ったスカーフを触ったりして感触を楽しんだ。

「アスナさん。ちょっと見せてもらえます」

「いいんちよ、いいわよ」

見たことのない生地が気になったのか雪広がアスナからスカーフを見せてもらおうと

「・・・榎木先生！これをどこで買ったのですか？」

「いや実はそれ、実家から送られてきた生地を使って作った奴なんだよ。木乃香から連絡を貰ってそれでちょうどいいと思ってな」

「そうですね・・・この生地はかなり上質のものでですから、これだけでかなりのお値段はしますよ。」

「えっ！？そうなの？そんな高価な物貰っても・・・」

「いいの。どうせ作ったものだ。みんなも欲しかったら今度作ってやるよ。こう見えても裁縫は得意なんだ」

「えっいいの？じゃー私も欲しいなあー」

「あつ桜子、ずるい先生、私もー」

「もう、柿崎も椎名も、でもあれなら私も欲しいなー」

先ほどから黙っていた三人もこのスカーフをみて欲しくなったのか命照にお願いをした

「わかった、わかった。今度作ってきてやるから落ち着け」

そして最後にアスナが

「木乃香、ネギ、命照先生、みんなありがと、私、とっても嬉しいよ。」

涙目でお礼を言った

この後、みんなでカラオケに行ったりして大いに楽しんだ。

そしてついに修学旅行の日がやってきた。

## 麻帆良編10（後書き）

今回は少し戦闘シーン有でした。しかしまったくうまく書けません。修学旅行はうまく書きたいなあと思います。次回から修学旅行編です。刹那もうまく使っていきたい・・

## 修学旅行一日目・1

修学旅行当日・朝

命照は副担任の為、朝一番で集合場所に行かなくてはいけないので早めに出ることにする

「さて、そろそろいくか」

「行ってらっしゃいませ。命照様、私も一緒にしてはダメなのでしようか」

見送ろうとするKOS・MOSだったが心配なのか、一緒に行こうとする。

「昨日言っただろ、お前は先に京都に行き情報を収集するのが今回の役目だよ」

「ですが・・・」

「俺なら大丈夫だ、さすがに行きに行きにはいかないはずだ」

「わかりました」

KOS・MOSはようやく諦めた。

「おっとこんな時間だ。エヴァの所に行かなくちゃ」

エヴァ宅

あの後急いでやってきた命照は、外で待っていたエヴァに来るや否や怒鳴られた

「命照遅いぞ！さっさと行くぞ！」

「命照先生、おはようございます。」

「ああ茶々丸おはよう。悪かったって、それより昨日渡した物はちゃんと身に付けてるのか」

昨日エヴァに呪いを限定的に無効化する装飾品を渡していた

「ああ、一応つけているが本当にこんなので呪いが解けたのか」

「解けては無い、ただ無効化しているだけだ、そのクローナシンボルでな。だからそれを外すなよ」

「フンわかった」

そういつて三人は駅に向かった。途中結界の境目ではエヴァが立ち止まって恐る恐る結界に足を踏み入れていた

「おおー抜けた、結界を抜けたぞ！」

「マスターおめでとうございます」

「だから、大丈夫だといっただろ」

エヴァが麻帆良から出るのが15年ぶりだからなのか、かなりはしゃいでいた。

### 集合場所・大宮駅

エヴァ達と一緒に大宮駅に着いたのが始発から数本目であったがすでに自分のクラスの半分は来ていた

「おはよー、お前たち早いな」

「あー柁木先生、おはようございまーす」

「私達、始発で来ちゃった」

「あれ、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんも一緒なんだ」

クラスの生徒と挨拶していると次の電車でネギがやってきた

「おはようございまーす。わーみんな早い」

「おはよー、ネギ先生」

「ネギ君、京都楽しみだねー」

「ハイッ！」

ネギはとてもうれしいのかかなりのハイテンションだった

そういつてる間に学年の生徒たちが続々集まってきた

「おはよーみよう君」

「おはようございます。命照先生」

「おー、おはよう。木乃香、刹那」

木乃香と刹那は一緒にやってきた。道中アスナにすこし不思議がられたがそこは木乃香がフォローしていた

「それでは3-Aの皆さん！班ごとに点呼してホームに向かってください」

「ほら、行くぞ」

「うん」

「はい。」

こうして3-Aは新幹線に乗り込んだ

「えーと班分はと・・・」

1班・・・7柿崎・11釘宮・17椎名・22・23鳴滝

2班・・・9春日・12クーフエイ・19超・20長瀬・24葉加瀬・

30四葉

3班・・・3朝倉・21那波・25長谷川・28村上・29雪広

4班・・・2明石・5和泉・6大河内・16佐々木・18龍宮

5班・・・4綾瀬・8神楽坂・13近衛・14早乙女・27宮崎

6班・・・1?・10絡繰・15桜咲・26エヴァ・31サジ

すでに発車しているので席で確認していると

「なるほど」

「みよう君どうしたん？」

「ん？いやなんでもない。それよりも刹那と一緒にの班じゃなくて良かったのか」

「え？うん、ええんよ。こちらはこんなことでは離れへんしな」

「そうか・・・」

木乃香と話していると前の方で声が上がった

「キヤーーカエルーー」

「なんでーーー」

平和な時間が終わった瞬間であった

「ったくー・・・お前たち苦手なやつは下がって、大丈夫なのは捕まえるのを手伝え」

命照はとっさに生徒に指示をだし自分も捕まえていた

「ひっ！ー！うっ！ん」ドサッ

付き添いのしずな先生は気絶してしまい。生徒の中でも何人が気絶していた

「榎木老師、カエル108匹捕まえ終わったアルよ」

「御苦労、それ捨ててくるから貸しなさい」

「捨てるアルか、少しかわいそうアルね」

「そう言っている場合ではない」

「わかったアル」

命照はクーフェイからカエルの袋を受け取ると車両を出て行った

「さて、どうするかな」

2・3両後ろに来てカエルをどうするか考えていた時

「命照先生、どうしましたか？」

「ん？おおっ刹那、いやなさつきうちの車両でこんなの出てきたんだ」

そういつてカエルを差し出した

「きゃ！・・・すいません、これは式紙!？」

「式紙？なんだそれ？」

「え〜とそれは特別な紙に術式を組み込んで発動させる東洋魔法の一つです」

「ふ〜んでどうするこれ？」

「私に任せて下さい。」

そういうと不思議な呪文を唱えるとカエルは煙になって消えた

「お〜すごいな〜」

感心していると後ろの車両からなにやら追いかけてくる声がした

「カラー親書返してください」

その声の主は先を飛んでる鳥を追いかけてる様子だった

「この声、ネギ先生か？」

「そのようですね。親書を奪われたようですね。まったく学園長もあんな子供に特使をやらせるなんて」

「まあまあそういうなってあいつも頑張ってるんだからさ」

そういつてる間にこの車両に鳥がやってきた

「任せて下さい」

今度は飛んできた鳥を切った。その鳥も式紙で親書は命照が受け取った

「待てー！」

「ネギ先生」

「命照さんに桜咲さん？」

「ほら、ネギ先生、落し物」

そういつて親書を差し出した

「え・・・あーコレ僕の大切な親書！！」

ネギは親書を大事そうに受け取った

「あ・・・ありがとうございます。助かりました！！」

「まったく大切なものなら無暗に表に出すなよ。いこう刹那」

命照は忠告すると刹那と一緒にクラスの元に帰っていった

「あ、どうも」

「兄貴！何が「どうも」だよ」

カモはネギに忠告した

「あの二人、メツチャ怪しいじゃねーか。気をつけるよ。」

「なんでさ、命照さんはとってもいい人だよ」

「兄貴、見てみる」

そう言われたネギは下を見る

「これは!？」

「さっきの鳥の紙型・・・それにカエルを入れた袋、つまりどちらかが術者だぜ」

「じゃ・・・じゃー」

「ああ、あの二人、もしかしたら西のスパイかもしれないねえぜ」

「ど・・・どうしよう〜」

ちよとしたトラブルがあったが無事、京都に着いた

『・・・まもなく京都です。お忘れ物ないようー』

「皆さん、降りる準備をしてくださいーい」

「えっ！もう!？」

「けっこう早かったねー」

クラスのみんなは降りる準備をはじめた

「刹那、そんなに緊張するな。俺もいるんだし」

「いえ、ここはもう敵陣です。このちゃんを守るのは私ですから」

「そうか。じゃあ俺は二人を守るとするか」

「はい、お願いします」

「みよう君、せつちゃん、二人して何話してるん」

『京都ー京都ーお忘れものないようー』

「ん？何でもないよ。さあいこうか」

最初の目的地は清水寺であった

「京都ー！」

「ここが清水寺の本堂いらゆる『清水の舞台』ですね」

「これが噂の飛び降りるアレ」

「誰かつー！飛び降りれっ」

「おやめなさいっ」

生徒たちは、とてもはしゃいでいた。

「おーい、エヴァどうだ楽しんでるか」

命照はエヴァと茶々丸が熱心に景色を見ているので話しかけた

「ん？命照か。」

「マスターは日本の景色や文化がとても好きですから。学園でも

茶道部と囲碁部に在籍してます」

「おいつ茶々丸余計なことを言うな。でもここからの景色はいいな。

余計なものも少しあるが」

「そうだな。天樹からの景色を思い出す」

「天樹とは確かお前の実家だったな。どんな所なんだ？」

「ただバカでつかい樹さ。」

そういつて次の場所に歩いていった

「おい、まて！」

エヴァも命照を追った。

命照は周りを見てみると、ネギも生徒と一緒にしゃいでる。

「あーゆうところは、まだ子供だな。」

下に縁結びの神社があると聞くといいんちよを筆頭に生徒たちはそこへ向かい始めた。命照は後ろからエヴァや茶々丸といっしょについて行った。

「エヴァは新幹線の中ではどんなことをしていたんだ。」

「マスターは景色をずっと見ておられました。トンネルなどでは京都のガイドブックなどもご覧に・・・」

「茶々丸!! また貴様は余計なことを!!」

「そうするとトラブルに件は気付かなかったのか?」

「ふん! 気付いていたわ! だが私が関わることはなかったんでな」「そうか。」

そんな話をしているうちに縁結びの神社の石段を登り終え、生徒たちのところへ追いついた。

「ここは縁結びの神社か。『なになに20m位先の石に目をつむつてたどり着ければ恋が成就する』か」

それを聞くと、いいんちよ、佐々木まき絵、宮崎のどかは恋占いの石に挑戦するという。

「いけーいいんちよー」

「まき絵ーガンバってー」

「本屋ーそっち違うー」

「あはははー」

いいんちよ、まき絵が半分を過ぎた所でまたトラブルが起きた

「きやーーー」

「またカエル~~~~!」

いいんちよとまき絵は落とし穴にはまっていた。穴にはまたもやカエル

「大丈夫ー!」

そんなトラブルがあったに関わらず、のどかは無事渡り切った

「ゴ、ゴールです~~~~」

「気を取り直して次は音羽の滝行こーよ」

アスナがみんなを呼んで音羽の滝に行く

「ゆえゆえ、どれがなんだっけー!？」

「右から健康・学業・縁結びです」

博識の夕映がそう答えると生徒たちは我先に縁結びの方に群がる

「やれやれ、さすがは恋する乙女か・・・んっ?」

「どうした命照?」

エヴァと一緒に回っていた命照は音羽の滝の異変に気付き

「ちよつとな」

そういつて音羽の滝の上上がった

「えーと、これか・・・ほおーいいの使ってるなあー」

音羽の滝の縁結びの方に酒樽が置いてあり水に混じって酒が入っていた

「それより、どんな感じだ・・・あちゃー半分近くがダウンしてら・・・よつと」

取り外して下を見てみるとすでにしこたま飲んだのか生徒の半分近くがダウンしていて他の生徒に介抱されていた。命照は酒樽を抱え飛び降り、エヴァの所に行くところ刹那がやってきた

「命照先生、それは・・・」

「ああ刹那が多分、妨害の一種だろう。まったく、妨害にしてもやりようがあるだろうに、一歩間違えれば修学旅行が中止になって帰らなくちゃいけないだろうに」

「そうなたら私が妨害してきた奴らをなぶり殺してやる」

刹那が命照の持っている酒樽に気付くと命照は幼稚な妨害に頭を抱えていた。エヴァの方はせっかくの修学旅行を台無しにしたらどうしてやるうか考えてながら歩き始めた

「あつまスターお待ちください」

茶々丸は考え事をしながら歩くエヴァをフォローしながら後をついていった

「刹那、俺たちも行くこうか」

「えっ!あ・・・はい!」

そういつて命照と刹那は音羽の滝を後にした。

音羽の滝にて生徒たちが我先に縁結びの滝の水を揉んでいる中、ネギは刹那の姿を探していた。

その時

「オイ兄貴、アレやばくないか」

ネギの助言者ペットの力モが異変を知らせた

「えっ？なに力モ君？」

ネギは力モに聞こうとすると夕映が

「ネギ先生、何か、みんな酔いつぶれてしまったようですが・・・」  
それを聞いたネギは

「えええー！ー！！」

思いつきり叫んだあと、すぐに滝の上の上がったが何もなかった。

しかし辺りを見てみると刹那と一緒に酒樽を持った命照が歩いているのを見つけた

「なんであの二人が・・・」

「兄貴、間違えねえーですぜ。あの二人が西のスパイだ」

「でも命照さんはエヴァさんの時に・・・」

「それはきつと力モフラージュってやつですよ。エヴァンジェリンに恩を売って西に誘うっていう」

「そんなあー・・・でも本当に・・・」

今までの事が頭によぎり爆発しそうになった時、アスナの声が聞こえた

「ネギーちよつと手伝ってよー」

そんな声を聞いて頭を振りみんなの元に向かった

「今は、みんなを介抱しなくちゃ」

ネギはすぐに降りて酔いつぶれた生徒を介抱しながら他の先生をこまかしつつ、バスに乗せ旅館に連れて行った

旅館について命照達は酔いつぶれた生徒を部屋に連れて行き寝かせた

「ふー疲れた・・・夕飯までは時間があるな、連絡とってみるか」  
そういつて先行させたKOS - MOSに連絡を入れた。

「そっちの首尾はどうだ。」

「今回の首謀者が判明しました。」

「おっさすがに早いな。それでどんなだ。」

「はい。首謀者は天ヶ崎<sup>あまがさきちくせ</sup> 千草関西呪術協会の陰陽術師、です。それと協力者として犬上<sup>いぬがみこたろう</sup> 小太郎、人と「狗族」と呼ばれる種族とのハーフです。それと刹那様と同じ流派の月詠<sup>つくよみ</sup>。あと不自然な経歴の持ち主でフェイト・アーウェルンクス、一か月前にイスタンブールの魔法協会から派遣されたそうなのですがそちらを確認しましたがそのような人物がいなみたいなのです。」

「なるほど、そうなるとそのフェイトというやつが少し怪しいな。でそいつらは何をしようとしているかはわかったのか」

命照はKOS - MOSの報告を聞いて、一つの仮説を建てたが、相手の計画を聞いてないので確証が無い

「はい、近衛邸近くの池の封じられている大鬼の復活のようです。」

「大鬼の復活？」

「はい、鬼は『<sup>リョウメンスクナノカミ</sup>両面宿儻』、1600年前に討ち倒された飛驒の大鬼神で、60メートルの巨体に二つの顔と四本の腕を持つと言われているとされています。」

「兄上よりも前の事か、その鬼とは何だと思う」

「はい、予想ですが二千年ほど前に作られた半生物兵器の生き残りだと思っています。」

「だよなー多分、どっかの星で使おうとしたバカがなんかの理由でここに流れ着いてそのままにしたんだろう。あと整備もろくにしなかったから暴走、その後封印か。古代の魔法使いはそれほどの力の持ち主か・・・その後の起動記録は」

命照は自分の仮説がほぼ合ってた事よりも昔の奴が余計なものを持つてくるなんて頭が痛くなる思いがした

「それだと、なんでうち・・・3 - Aを狙うんだ・・・下手に刺激して

自分の企てに感づかれるんじゃないか？」

「それは・・・実は木乃香様に関係がありまして・・・」

「どういうことだ？」

命照は木乃香の名を聞いて軽く怒気を放った

「はい、木乃香様は英雄と呼ばれるサウザンド・マスター・・・ネギ・スプリングフィールドの父親で、その方よりも魔力の量が多いそうなのです」

「つまり、木乃香の力を使いその鬼の封印を解いて制御すると・・・」

「おそらくはその通りでしょう」

「ふーざーけるーなー!!!」

命照は声を上げ怒気を放った

「このちゃんをそんなことに使わせてなるものか!!!」

「命照様！落ち着いてください！」

KOS・MOSは必死に命照をなだめた。命照もすぐに正気に戻ったので大事には至らなかったようである。

「わかった。引き続き調査の方頼む・・・」

そういつて命照は通信を切った

「さてそろそろ夕食の時間だ。しかしクラスの奴ら大丈夫かな？」

そういつて大広間に行った。

案の定、クラスの大半は来れずに夕食の時間はこのクラスにしては珍しく静かなものとなった。

その後、命照は教師は早めに風呂に入ることを思い出し露天風呂の方に向かった。

そこで今日のトラブルが巻き起こるのを命照はまだ知る由もなかった。

## 修学旅行一日目・1（後書き）

今回は修学旅行始まりから一日目の夕食時まででした。次回は一回目の連れ去り終了までかな。最近、命照に特別な能力を持たせないで登場させる小説を書くのが迷い中です。もしかしたら書くかもしれません。．．．どうしよう．．．

## 修学旅行一日目・2

夕食後、命照はお風呂にやってきていた

「これが、日本の露天風呂かあ。船のとは一味違うなあ」

そう言いつつ露天風呂を満喫する命照であった。

そんなとき男風呂の方から声が聞こえた

「兄貴、やっぱ命照の旦那とあの刹那って娘が一番怪しいぜ」

「カモ君、その話はあとにしよう、今はお風呂に入って今日の疲れを取ろうよ。」

「それもそうだ」

命照はネギとカモの不思議な会話を聞いて、何故か疑われていることを知り、とりあえず隠れることにした。

「まったく、俺が何しってたっていうんだ。」

ぶつくさ言いながら岩の裏側に回った。ネギとカモはちょうど反対側までやってきた。

「ふーすごいね。これが露天風呂って言うんだってさ。風が流れて気持ちいいね」

「おうよ、これで桜咲刹那と命照の旦那の件が無ければなあ」

カモが愚痴を漏らす

「あいつ、いつも木刀みたいなの持ってるし魔法使いの兄貴じゃ呪文唱える前に負けちまうぜ。それと命照の旦那はいまいち実力がわからねーがきつと魔法使いだぜきつと、それで桜咲刹那がパートナーだろうよ」

そういつてると別の入り口から誰が入ってきた

「ふー困ったな。魔法使いであるネギ先生なら。と思ったんだけど。やはりここはみょう君に。。」

刹那は昔貰った首飾りを見た。

その頃ネギとカモは。。

「なななんでもここ男女別じゃなかったの？」

「きつと、別なのは入り口で中は一緒の混浴ってやつになってるんですよ」

「そっぴいなから二人？は岩の後ろ側に移動する。命照もつられて表側に移動した。」

「みよう君!？」

「よっ・・・」

「ここは女湯じゃ・・・」

刹那は命照を見るとタオルで身を隠した

「ここ混浴みたいだぜ。まあ今日の客はほとんどが女性だから知らせてなかったようだけど」

それを聞いたネギも驚きの声を上げ

「えっ命照さん!？」

「ちよ兄貴!？」

それを聞いた刹那は

「誰だ!？」

指弾で照明を壊し、隠し持っていた持っていた刀を抜き命照の後ろの岩にめがけて飛びかかった

「逃がすか！命照先生伏せて下さい・・・神鳴流奥義【ざんがんけん斬岩剣】」

「ちよあぶな!」

そっぴいつて岩を切り裂いた

「なんて技だ、岩が真っ二つだぜ・・・」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！フランスエクスアルマテイオー風花武装解除」

「やったぜ兄貴、うまくエモノを弾いたぜ!？」

「甘いつ!」

刀を弾かれた刹那は臆することなく、ネギの喉と急所を握った

「おお〜コワ〜。刹那〜そいつネギ先生だぞ〜」

お風呂に浸かりながらその光景を見ていた命照は少し腰を引いた

「えっ!？ネ・・・ネギ先生!？」

「あわわわっわ」

ネギに気付いた刹那は素早く手を放した

「いえっそのつ仕事上、敵の急所を狙うのはセオリーでして・・・」  
真っ赤になつて弁解しているが、当のネギはかなり混乱しているらしく、カモが代わりに反論した

「やいてめえー桜咲刹那、柎木命照、やっぱりめえら、関西呪術協会のスパイだったんだな!？」

「あははは、なに面白いこと言ってるんだ。俺たちはお前らの味方だぜ」

命照は壊れた岩に寄りかかり、笑いながらそういった

「何か違つていうんだ。ネタは上がってるんだとつとと白状しやがれ」

「まったく・・・しょうがないオコジヨだな・・・」

命照がしっかりと説明しようとした時、女用の脱衣所から悲鳴が聞こえた

「ひゃあああああ~~~~」

「この悲鳴は・・・」

「このかお嬢さま!？」

「ついにきたか」

そういつて命照は立ちあがった

「命照先生、急に立ち上がらないでください」

刹那は顔をそむけるが命照は

「なに変な方向いてるんだ。行くぞ」

「えっはい!つて水着!」

そう命照は混浴と聞いていたので事前に水着を着て入浴していた

三人が脱衣所の扉をあけるとそこには

「大丈夫か!このか!」

「いや~~~~ん」

「ちょ・・・ネギ!？なんかおサルが下着を!？つてなんで命照先生まで〜」

アスナと木乃香がおサルにいたずらをされていてついに木乃香達の

下着が取られた

「あ！みょう君、せつちゃん！？あくん、見んといて〜」

「このちゃん、ごめん」

命照はそういつて顔をそむけ持っていたタオルを木乃香に投げた

「ちよつと先生、わたしにはー」

アスナは自分にタオルをくれないことに抗議した

「よくもお嬢さまを・・・斬る！！」

「きゃっ〜桜咲さん何やってんの！？その剣、本物！？」

「ダメですよ。おサル切っちゃカワイそうですよ〜」

ネギはおサルを切ろうとする刹那にしがみつき止める

「あつ何するんですかネギ先生、こいつらは低級な式紙切つても紙に戻るだけ」

刹那はしがみつくネギを振りほどきながら説明をする。すると命照が

「なるほど、これも式紙ね。まったくネギ先生、俺たちは味方だつて言つただろ」

命照がネギにそう言つてるとおサルが木乃香を連れ去ろうとする、しかし

「させねーよ。このちゃんを守るのは俺たちだ！縛道の六十二」ひゃく歩欄干つぽうらんかん」

命照がそう唱えると空中に光の柱が現れおサル達に降り注いだ

「うきー」

光の柱に当たつたおサルは紙に戻り、木乃香の連れ去りを阻止したそれを見ていた何者かが

「フン・・・」

去つて行くのを命照は感じた

「刹那・・・」

「すいません。逃してしまいました」

「まあいい。木乃香大丈夫か・・・」

命照は刹那に抱えられている木乃香を心配するが直視できないでいる「あつみょう君が助けてくれたん？」

「あーうん・・・刹那、あとを頼む。」

命照はそういうと去って行った

「みょう君・・・」

「このちゃん、大丈夫ですよ。命照先生はあの頃と変わってないですよ」

「そうなん？」

「ええ、そうですよ。」

「このか、命照先生と何かあったの？」

「うん、アスナにちゃんと話してへんかったよね」

そういつて木乃香と刹那は幼いころにあったあの事件を話した

「っというわけなんよ。そこで再会を誓ってこの櫛と」

「この首飾りをいただいたのです」

「それっていつも、このかが持ってた櫛・・・そういう経緯だったんだ」

「でも、再会できてもそんなに話す機会なくて・・・」

「このちゃん・・・」

四人は露天風呂から出て話していた

「私、命照先生の所に行つてきます」

「せつちゃん？」

「先ほども言いましたけど命照先生・・・みょう君は変わってはいません。では」

刹那はそういつて側を離れて行った

「さて、こう実力行使に出てきたんだ。それなりの事をしないとな」

「命照先生」

「ああ刹那か・・・そっちは・・・」

「大丈夫ですよ。でも今度しつかりとお話ししてくださいね」

「う・・・ああわかった」

そういうやり取りをしながらお互いに侵入者に対する対策をしていた  
「なにやってるんですか。命照さん、刹那さん」

「私は式紙返しの結果を・・・」

「俺は対人のセンサーをね」

「ちよつど対策も終わっていたので全員でロビーの移動した

「そのつ・・・刹那さんと命照さんも、えーと、日本の魔法が使えるんですか」

「ええ、私のは補助程度ですが」

「俺のはオリジナルの術だから正確には違うぞ」

「オリジナルですか・・・」

「ネギ先生、神楽坂さんには、話しても・・・」

「は・・・ハイ、大丈夫です」

「もう思いつきり、巻き込まれてるわよ」

「ネギもアスナが関わっていることを教えこの先の事を話しあうことにした」

「敵の嫌がらせもエスカレートしてきましたし、お嬢さまを直接攫いに来ました。ですから今後それなりの対策を講じないと・・・」

「そうだな。エヴァと戦って成長したと思ったが・・・まだまだだつたわけで」

「命照がそういつてると後ろの方から声をかけられた

「当り前だ、その坊やはまだ甘ちゃんだからな」

「おつエヴァ」

「お前達、先ほどから騒がしいぞ。」

「ああすまん。実はな」

「そういつて事情を説明した

「ふん、そんなことか、大方敵の目的は」

「木乃香だ」

「エヴァの問いに命照が素早く答えた。それを聞いたアスナは

「ち、ちよつと!!! どうしてこのかが狙われるのよ!!!」

「命照が知っていることに驚いた刹那は命照の方を向くと、命照は頷いた。」

「お嬢さまには潜在的に強い魔力を持っているんです。それに敵は

目をつけたらしくのですが。本人には魔法がらみのことは知らされないように育てられてきたので・・・」

「そ、そうだったんだ」

「知らなかったわ……」

普段から接しているはずの木乃香の知られざる真実を知ってネギと明日菜は呆然とした。ややあつて、明日菜は立ち上がり刹那の肩を叩いた

「そういうことなら協力するわ！！ 刹那さんもこのことを嫌っていないってことがわかったし！！ 友達の友達は友達だからね！

！」

「か……、神楽坂さん……」

「そういうことだ。刹那お前だけに重荷は背負わせないぜ」

「みよう君……」

「決まりですね。3 - A 防衛隊結成です！！」

ガールズエンジェルズ

「なんだそのネーミング……」

ネギたちが盛り上がっている中、エヴァンジェリンは立ち上がり、階段へと向かった。

「あれ？ エヴァちゃんはどこへ行くのよ？」

立ち去るエヴァにアスナは声をかける

「部屋へ戻る。とりあえず状況さえわかれば充分だ。私は旅行を楽しみたいんでな。余計なトラブルはゴメンだ。それに命照がいるんだ。大概のことは何とかなるだろ」

「まあ、そうだよな。久しぶりの旅行だったな。おやすみ、エヴァ」

「ふん、まあ戦い以外なら手伝ってやらんでもないがな……」

そういつてエヴァは部屋の方に戻って行った

「命照先生、いいの？」

「無理強いしてもしようがないだろ？」

明日菜の言葉に命照はこともなげに答えた。

「じゃあ、早速僕は外の方を見回ってきます！！」

「あっ……まてって言おうとしたのに……まったくどうなっても

知らんぞ」

「命照先生どうしたの？」

「ああ、さっき外に対人センサーを仕掛けてきたんだが・・・それに引つ掛からなければいいんだが」

「対人つて・・・どんなのなんです？」

「いや、特殊な染料のペイント弾を発射する装置なんだ、それを侵入者や不審者に対して撃つんだが、ああ、ネギは多分大丈夫だからと除外しといたから・・・だが・・・」

「だが？」

「カモを除外するのを忘れた」

命照がそう言ったと同時に外の方で声がした

「ぎゃーーーーー」

「カモくーんーーーー！？」

「あ・・・やつぱり」

命照の予想はあたった。その後各自警戒に当たるようとして解散した。

## 修学旅行一日目・2（後書き）

外に仕掛けたのはアカデミーにある例のものです。これがのちのち面白い事に

### 修学旅行一日目・3

命照はとあることをエヴァにお願いする為にエヴァのいる部屋に行き、それから数十分後

ロビーでの話し合いの後、少し見回りをしていた、アスナと刹那はそろそろいい時間なので交代で見張りをすることにした。

「では、お嬢さまのことお願いします」

「わかったわ、じゃあとで。」

そういつて刹那は部屋を出てた。

部屋を出た刹那は、命照の所に今後の事を相談しに行くことにした。ロビーにしていると思うところに向かう途中従業員らしき女性とすれ違った。その女性は額にでかい絆創膏をつけていた

「何故こんな時間に？」

刹那は不思議に思ったがとりあえず命照と話をなるべくロビーに向かった。

案の定、命照はロビーにいた、何やらしているようで刹那に気が付くと手を止め刹那に声をかけた

「刹那か・・・どうした？」

「いえ、先生と今度の事を話そうと思ひまして」

そういつて刹那は命照の近くに座った。

相談は今日乗り切った後、明日の事、自由行動について話し合った。事前の相談で五班アスナ達の班は奈良公園に、六班はまだどこに行くか決まっていなかった。

刹那の計画ではエヴァと茶々丸が学園から出ないので、サジと二人になり刹那は五班木乃香と一緒に班になって側で護る予定だったが、命照がエヴァの呪いを解いた為その計画が使えなくなってしまった。

そこで命照は明日刹那と共に、エヴァに相談することにした。

その時

「この気配は・・・」

刹那は何か感じたらしくロビーを駆けて行った。

命照は再びなにかし始めた。ウィンドウを開き何か見ているようで、ときどき手を動かし打ち込んでいた。いくつか打ち込み終わるとロビーに刹那とアスナがすごい勢いで走ってきた

「命照先生！大変！どうしよう!？」

「アスナ、落ち着け。」

「落ち着いてなんていられないわよ。このかが・・・このかが・・・」

「すみません、命照先生、お嬢さま・・・このちゃんが攫われました」

「そうか・・・」

命照はいたって冷静に答えた。それを聞いたアスナは

「先生！そうかってどうして落ち着いているんですか!？」

「落ち着いているのは相手をすでにトレースしているからだ・・・

これでよし・・・行くぞ」

そういつてウィンドウに最後の打ち込みを終えるとウィンドウを消し立ち上がった。

命照を先頭に木乃香をさらった相手を追いかけて、旅館を出る前にアスナがネギの方に電話をかけた

「ごめん、ネギ！このか攫われちゃった！」

「(え~~~~)」

走りながら電話をかけているアスナはネギに事情を話そうとした時、ネギの方にその誘拐犯が現れたみたいで電話は途中で切れた。

幸いネギはすぐ近くにまだいたのですぐ合流する事が出来た。ネギは何もされなかったらしく、なんでも大おサルがタコのような空飛ぶ機械に追われていたらしい。ネギは木乃香を見て急いで呪文と唱えようとしたようだ、誘拐犯はものすごい速さで走って行ったので何もできなかった。

「すみません、命照さん。」

「そんなことより、急げ追うぞ」

そういつて再び走り出した四人は途中戻ってくるタコがいたが無視してさらに速度を上げた。そのおかげか駅に着く前に誘拐犯を見つけることが出来た。

「待てー！」

「このかー」

見つけた誘拐犯に対してお決まりの事を言うが当り前のようにスル―され駅の中に入って行く。誘拐犯の姿は何故かおサル着ぐるみを着ていた。命照達も駅構内に入って行くが、終電近くなのに何故か人っ子一人見当たらない、しかも駅員までいないのだ。気になった命照は辺りを見回すとところどころに何か張りつけられていた。

「なあ刹那、あれなんだ」

「いきなりなんです・・・あれは！人払いの呪符！なるほど・・・あれは普通の人を遠ざけるものです」

「だからか」

命照はそれを聞いて納得した。前々からの計画なのだろう。そう考えている間に駅のホームまでやってきた、誘拐犯は止まっていた電車に乗ると人がいないはずなのに出発のベルが鳴った

「急げ！」

みんな速度を上げようとした時、ネギが体勢を崩してしまった

「うわっ！」

「ちっ、お前達、走れ！」

「命照先生！」

そういつと命照はネギの腕を取って電車のドアに向かって放り投げた。刹那とアスナは無事に入ることができ、放り投げられたネギもどうにか入ることができた。ちょうどその時にドアが閉まり、命照だけはひることができなかった。命照は出発する電車と並走する形で走り、先ほどより早い走りを見せ電車の屋根に飛び乗った

「間に合った」

「命照先生は！？」

「安心してください。先生は屋根に飛び移ったようです。それより

もネギ先生、先頭車両に追い詰めましょう」

「はい！」

そうして誘拐犯を前の車両に追い詰めるべくネギ達は走り出した。ちょうど前の車両との間で誘拐犯がいたのでネギ達はしめたと思っただが、その誘拐犯は懐から呪符を取り出した。

「二枚目のお札ちゃん、いきますえ」

そういうと呪符を前に投げ呪文を唱え始めた

「【お札さん、お札さん、うちを逃がしておくれやす】」

そう唱えると呪符より大量の水が流れ込んできた、最初は耐えていた三人であつたが水量は膨大ですぐに車両をいっぱいにした。ネギ達はどうかしようとするが、水の中ではうまくいかず溺れるのは時間の問題であつた。その間に誘拐犯のおサルは前の車両に進んでいった。その時、電車の屋根にいた命照がそれを打破する呪文を唱えていた

「ああやばいな・・・【荒れ狂う流れよ・・・アクアレイザー】」

命照は自分の魔法をネギたちの前の車両に向かって放った。車両に溜まっている水を圧縮して前方に打ち出したのである。呪符をその背後の扉ごと貫いた。そしてそのまま先頭車両を貫き水は消えた。誘拐犯も咄嗟に身を伏せていなければ、猿鬼の頭を吹き飛ばされていただろう。

「な、なんつー魔法や…ん？」

打ち出した水の光線は車両に溜まった水を圧縮したものでネギ達のいる車両の水は無くなっていた。ネギ達は危機を脱しよるこんでいると電車が止まった。

「刹那たちは・・・良かった無事か・・・電車が・・・ここは京都駅・・・しかし人の気配がまるでない・・・これもあの呪符のせいかな」

屋根の上にいた命照はネギ達の声を聞き無事を確認し安堵した。電車が止まり辺りを見回し、いち早く異変に気付き、準備しながら誘拐犯が出るのを待っていた

電車の扉が開き犯人が電車を駆け下りたので、ネギたちも急いで出

た。命照もネギ達の近くに飛び降りる。

誘拐犯はまた走り出し、命照達も急いで追いかけた。誘拐犯は横に広く、延々と続く階段の上で待ち構えていた。

誘拐犯はおサルの着ぐるみを脱いでいる。眼鏡をかけ、長い黒髪をしており、エプロンとスカートを身につけた女性だった。しかし、彼女の目は冷たく光っていた。

「追い詰めたぞ、天ヶ崎千草っ！」

「なんでうちの名前を・・・!?」

「そんなのすでに調べがついてる」

「生意気なガキやなあー」

命照はKOS・MOSの報告ですでに名前を知っていたのでちょうどいい機会なので告げることにした。自分の事を調べられていることに危機を覚え天ヶ崎千草は懐からまた呪符を取り出した

「しゃーない、三枚目のお札ちゃん使わせてもらいますえ」

「【お札さん、お札さん、うちを逃がしておくれやす】」

おサルの誘拐犯天ヶ崎千草は呪符を放った。呪符を使おうとするのを見た刹那は急ぎ攻撃を仕掛けようとするが少し遅く、大の字の形をした大きな紅蓮の炎の壁が現れ、彼女と命照たちを隔てた。

「三枚符術、京都大文字焼き！！ 並みの術者でははこの炎を越えられまへん」

「刹那！危ない！」

命照はそのまま突破しようとする刹那を止めた。刹那はとがめるような鋭い視線を命照に送ったが彼は、黙って後ろを指した。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！吹け、一陣の風フレット・ウネ・ウエンテ」  
花・風塵乱舞・サルタティオ・ブルウェレア！！！！」  
風フランス

ネギが呪文を唱え、杖を向けると強力な突風が巻き起こり、大文字の炎はきれいさっぱりなくなり、残すは階段のみであった。

「さあおとなしく木乃香お嬢さまを返してもらおうか」

刹那は怒気を含ませながらそう宣告する。そしてネギはアスナの仮契約のカードを取り出し、刹那も愛刀『夕凧』を抜いて臨戦態勢を

とつていた。しかし相手は顔を少々ひきつらせていたものの、何を馬鹿なといった表情をしていた。

「何をバカなことを、はいどうぞ。って渡せるわけないやろ」

そう言つて脇に寝かせておいた、木乃香を引き寄せて盾にした。それを見たネギ達三人は顔を強張らせたが命照だけは何も動じずに見据えていた。千草はたった一人だけ違う反応を見て何かがおかしいことに気がついた。そのとき命照は笑いはじめた

「なにがおかしいんや。気でもふれたか」

「わーはっはっは！！ それ偽者だぜ！！」

右手の指をパチンと鳴らすと、木乃香の姿が消え始めた。呆然とした誘拐犯千草の前で木乃香は完全に消えていった。残ったのは宙に浮く不思議な板の様な物、そこには『ご苦労様』と書かれていた。千草はそれを殴ろうとしたが拳はそれをすり抜けた

「なんやこれはー！う、うそや！！ そんなことありえへん！！ 式神と間違えるなんてそんな！」

そう確かに式紙使いの千草を式紙でだますのは難しいだろう。しかし命照が使ったのは式紙ではなく、木乃香のパーソナルを使った力場体である。

科学の力である為、魔法の者には見破るのは無理だろう。そもそも地球の技術でもない為、その筋の人が見てもわかるものではない。ちなみに本物の木乃香はエヴァンジェリンのいる6班の部屋の中に移してあった。エヴァにお願いしたのはこの事である。そしてある意味では誘拐犯の命が助かったといえよう。

これで遠慮は無用とばかりに四人は、再び戦闘態勢をとつた。命照は腰のバックから二本の長剣と短剣を取り出し、ネギは杖と仮契約カードを手にし、明日菜は身構え、刹那とは刀を構えた。

「契約執行180秒間！！ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

ネギはアスナに魔力供給の呪文を唱えた。ネギから放たれる魔力が淡い光を帯びて明日菜の体を覆った。

「まったく、木乃香を攫おうとするなんて許さん！！」

「命照先生、ネギ先生、神楽坂さん……」

「行くよ！！ 桜咲さん！！」

「えっ？ あ、ハイ！！」

ネギはそのまま後衛に、アスナと刹那が前衛にし、命照はその間で戦況を見ることにした。

そして階段の中間辺りでネギがカードを掲げ叫んだ

「アスナさん！！ パートナー専用のアーティファクトを出します

！！ 『ハマノツルギ』ですから多分、武器です！！」

「武器！？ よ、よし頂戴、ネギ！！」

「エクセルケアース・ボテンティラム能力発動！！ 神楽坂明日菜！！」

しかし、明日菜の手に現れたのは大きなハリセンだった。

「なにこれ！？ ただのハリセンじゃないのよー！！」

「ハリセンですね」

「どう見てもハリセンだな」

それを持ったアスナはもちろん、刹那や命照は首を捻ったり呟いた。しかしそれをネギに問いただしているひまもなくアスナはそのまま叩きにかかった。

そのとき千草の前に何体もの式神が召喚された。今までに出てきた小猿ではなく、人間よりも大きく、サルの着ぐるみをあしらった姿をしていた。

やけになった明日菜と刹那が飛び上がってそれぞれの得物を一閃させた。刹那の刀は受け止められてしまったが、なんと明日菜のハリセンは叩いた式神を一瞬にしてかき消したのだった。

「ほお」

「すげーぜ。姐さん、一発で返しやがった」

命照はアスナの働きに感心し、カモもアスナのアーティファクトの力を見て驚いていた。そしておサルの千草も神鳴流の使い手の刹那は手こずると思っていたが、ただの小娘で素人のアスナが自分の式紙猿鬼を一撃で送り返すなんて思いも知れなかった。

「私の方は大丈夫だから桜咲さんは、あのおサルの人を」

「わかりました。」

そうわさせまへんと、言わんばかりに小型の式紙のサルを呼び出し牽制させようとした。そして呼びたし終えたとき刹那達の後ろから魔力の流れを感じ見てみると、命照とネギが呪文を唱えていた

「【氷結よ、我が命に答え敵をなぎ払え・・・フリーズランサー】

「【魔法の射手・連弾・光の17矢!】」

二人が呪文を唱えおえると、命照の前に魔法陣が現れそこから無数の氷の槍が降り注ぎ、ネギの方も杖から光の矢が放たれ、呼び出された式紙達を撃破していく、そして道ができたと感じた刹那は千草に向かつて一気に走った。その時、命照は何か感じたことのある気配を感じとつさに刹那の所に飛んだ。そして予感的中し突然どこからともなくあらわれた小柄な二刀流剣士に刹那は切りかかれそうなる命照は片手の剣で止め、はじき返した。

「いたた・・・どうも、神鳴流です。」

「お、お前が……?」

でてきたのはなぜかつばの広い帽子をかぶり、ゴスロリ調の服装をしていた少女剣士だった。

その少女は刹那と命照を見てともうれしそうだった。

「はい。月詠といいます。みたところ同じ神鳴流の先輩らしいですけど、戦うからには本気で行かせてもらいますわ。それにしても先輩に止められると思ってましたが、その剣士はんが止めるなんて、思いもしなかったですわ。ではまずは先輩からお相手お願いします。」

そう言って月詠は切りかかってきた。刃渡りの短い二本の刀を使い、死角を突くように刀を繰り出す彼女は刹那にとってやりづらい相手だった。

明日菜も新たに呼ばれたおサルの式神の大群が出てくると次第に数で押されていき、命照も大柄な着ぐるみの式神に取り囲まれてしまった。それでも命照は攻撃を避けつつ確実に式紙を退治していく、

それを見ていた千草は命照が一番厄介だと感じ、

「月詠はん！！　まず、あの男から片づけなはれ！！」

月詠は指示を聞くと、不満そうにしながらも刹那から離れ、瞬時に命照の方へ走った。彼女は刀の間合いに入ると、ためらうことなく刀と振り下ろした。

「ほーおーなかなかやるもんだな」

「お兄さんこそ、お強いどすね」

命照は刀を受け止め対峙していた、とっさに月詠は離れ、そこから連撃を放ってきた。

まずは三連撃を放ったが、命照は短剣のみでそれを捌く、続いてタイミングをずらしての上下左右の斬撃を仕掛ける。それを体をそらしてかわした

「この連撃を止かわすなんてさすがやわ」

「それじゃあ、今度はこっちから行くぞ！」

命照はそう言ってバックステップで距離を開けた。そして相手と同じく短剣を逆手に持ち一気に距離を詰めた。

まずはこちらにも三連撃を放った。それを見た月詠は同じく短刀で受けようとすが早すぎてうまく反応できずに剣を横から受けた。その時月詠は体勢を崩した。

命照はすかさずたたみにかかった

「【崩龍斬光剣】  
ほうりゅうざんこうけん

命照は月詠に近づき上空に切り上げ、空中の月詠に向かって高速の速さで駆け抜けた。命照が着地した後に月詠が吹き飛んだ

「あれ」

どさっという音と共に月詠は倒れこんだ

「なんやて！？月詠はんがやられるなんて」

「さて次はお前だ。なんのつもりなのか、はいてもらおうか」

命照は剣を千草に向けて言い放った。そして他の三人の方もあらた片付きこちらに向かっていた。

「くっ、こうなったら・・・」

千草はまた式紙を取り出し、自分と月詠の近くに出し、その式紙に抱きかかえられ

「おばえてなはれや」

そういつて小型の式紙をばらまき足止めにして飛び去った。

「ちっ、面倒なことになってきたな」

一足違いでやってきた三人を後ろに見ながら命照はそう呟いた

### 修学旅行一日目・3 (後書き)

戦闘シーン難しすぎ、今度はごじんまりとした物で、お送りします。  
あと仮契約とかどうしよう・・・

## 修学旅行二日目・1

「では、麻帆良の皆さん、『いただきます』」

「……いただきます」

朝、大広間では朝食を食べている生徒たちがいた。

その中で3-Aの生徒たちは心なしかその様子に精彩が欠けていた。昨日、清水寺で酒を飲んでしまった者たちは二日酔いのせいもあるが、修学旅行の一日目の夜を寝過ぎしてしまったというのが主な理由のようだ。

そんな彼女たちを命照は慰めながら朝食を食べていた。

「みんな、そんなに落ち込むな、今日を楽しめばいいじゃないか」

「せんせい」

そう言いつつ慰めていた。そして朝食を食べ終えた命照は先に大広間を出ていった。

命照はロビーに行くまでの間、龍虎皇と話していた。

（あと一歩だったな）

（ウソ、命照ナラ簡単ニ捕マエラレタ）

（あははは、やっぱわかる？）

（ドウシテ、捕マエナカツタノ？）

（今回はネギの戦いだからな。あんまり出しゃばるのはな）

（今日八大丈夫？）

（昨日こてんぱんにやつつけたからな。今日は新たな人員の補充と作戦の練り直しなどに時間を取られるから襲撃はないだろう。せいぜい監視ぐらいのものではないか）

そういつてロビーまで歩くとそこにはエヴァと茶々丸、そして刹那にサジが居た。エヴァはなにやら悩んでいた

「おっ6班が集まって、なに真剣な顔でガイドブックを睨んでいるんだ」

「ん？命照か。実はな今日の自由行動の場所に何があるか見てたん

だ

「ああ、そういえば、来る予定ではなかったんだっけな。それにしてもそのガイドブックかなり読み込まれてるな、ぼろぼろだぞ」

「う・うるさい」

エヴァは顔を背けた。その顔は少し赤くなっていた。

それを笑いながら見ていると、

「命照先生、昨日はありがとうございました。」

刹那は昨日の事に対してお礼を言ってきた

「それはエヴァにも言ってくれ、木乃香を匿ってくれたのはエヴァだからな」

「そうだったんですか！？エヴァンジェリンさんありがとうございます」

刹那はエヴァの方に向き直って俺を言った

「ふんっ！それは命照に頼まれたからやっただけで、貴様に礼を言われる筋合いはないな」

そういつているがエヴァの顔は少し赤くなっていた

そんなやり取りを、していると近くが少し騒がしいので見てみるとそこにはネギが3-Aの生徒たちに挟まれなにやら揉めていた。

どうやら今日の班別行動でのネギの取り合いらしい。

それを面白そうに見ていると、宮崎のどかが、ネギに自由行動を一緒にと言っていた

それをネギは快く承諾していた。

それを聞いて5班の図書館三人組が喜びにわいており、いいんちよ達などは真っ白に燃え尽きたのか、がっくりと膝をついていた。

「で、お前たちは行き先決まったのか？」

「おおそうだ。とりあえず奈良公園のこと、ここの茶屋がうまいらしいからな。行くことにした」

「ふーん、」

「それで貴様はどうするんだ？」

エヴァは命照にどの班と行動するのかを聞いていた

「そうだな、6班はネギがいくから・・・」

命照が迷っていると、後ろから声がかかってきた

「命照先生、行く所決まって無かったら私達と行こうよ」

その声をかけてきたのは、チアリーダーの三人組と鳴滝姉妹だった。今度は運動部4人組の班がやってきた。

「命照先生、班別行動いっしょに行かへん？」

「一緒に行こうよー！！ ほら、こんなに可愛い中学生が誘ってるんだしー」

こうして複数の生徒から誘われる命照はこんな質問を試してみた

「おまえら……、俺におごらせようとしていただろ」

とたんにチアリーダー三人組、鳴滝姉妹、運動部四人組は冷や汗をたらしながら目を逸らし始めた。運動部四人組といっしょの班である龍宮真名までが必死になって目を逸らした。どうやら凶星だったらしい。

先日、スカーフを渡しそれを自慢するかのように、チアリーダー三人組はみんなに見せびらかしていた。いいinchよも認める品質でかなりの高級品と言いつらし、それを簡単にくれる命照の話もしていた。そしてその話から命照を結構のお金持ちと見ていた。

「みよう君、うちの班と一緒にいかへん」

みんなが目をそらしている間に木乃香が命照を誘いに来た。しかしそれを聞いていた他の生徒が

「えー木乃香の班、ネギ先生と一緒に行くんでしょ」

「そうやった、じゃせつちゃんをお願いして」

「えっ！私ですか！？・・・あの・・・命照先生・・・私達と一緒にまわりませんか」

刹那は恥ずかしながら命照に声をかけた

「あ〜ん〜・・・よし、6班といっしょにする」

命照がそう決めて言うと、周りから少し落胆の音が聞こえた。

そして班ごとの自由行動の時間になりそれぞれ、行き先に向けて出発した

命照とネギ、3 - Aの5班と6班は奈良公園とやってきた。道端にいる鹿に生徒たちだけでなく、ネギも興奮していた。

「わー、ホントに鹿が道にいるー!!!」

「へー、結構おおいわね」

ネギも鹿に鹿煎餅をあげたのだが、そのとき手まで啜えられてしまい、周りの失笑を買っていた。

そんな中、命照は鹿を見てなにやら考えていた、それを見ていたエヴァが命照に問いかける

「どうした。鹿がそんなに珍しいのか？」

「いや、家の庭にもこんなのがいたから懐かしいなーってな」

「あの庭にか・・・」

エヴァは龍虎皇内のあのバカでかい庭を思い出し苦笑した。

「なにになに、なんの話してるの」

「何でもないさ、さっ次いくぞ」

「もーエヴァちゃんには話して〜」

とまあこんな具合ににぎやかに5班と6班の奈良公園めぐりは行なわれていった。

命照達は何も知らない木乃香やのどかなどから少し離れ昨日の事や今日、明日の事を話していた

「今のところおサルのお姉さん来ませんねー」

「うーん」

「今日は来ないのかもしれないな。昨日さんざんコケにしてやったし」

「俺の情報網でも今日はこないはずだ。多分仕掛けてくるなら明日だろう」

「私も今日は大丈夫だと思いますが、念のため各班に式神を放っておきました。

何かあればすぐにわかります」

そう話していると後ろからエヴァが話しかけてきた

「おい、昨日のやつは捕らえられなかったのか？」

「んっ、あああと一歩つて所で逃げられてな。」

「嘘つけ、貴様なら鬼道とやらで簡単に捕まえられただろ」

「バレタか、とりあえず全貌がわかるまで、泳がしておこうと思っ  
てな」

「どういうこ「おい」ん？」

また後ろの方から声が聞こえた。後ろを向いてみると、木乃香や早  
乙女ハルナ、綾瀬夕映などが走ってきていた

そして助走のついた所でなんと、いきなり明日菜に飛び蹴りをかま  
したので

「アスナアスナー！！ いっしょに大仏見よーよ！」

二人はそう言つて強引に明日菜を連れて行つてしまう。

その横でも、

「せつちゃん、みよう君！！ いっしょにお団子食べに行かへん？」

と木乃香が強引に刹那と命照を連れて行ってしまった。

残されたのはネギ、エヴァンジェリン、茶々丸、サジだ。

「おいおい……。いったいどうなっているんだ？」

そう言つたところに宮崎のどかがやってきた。彼女は顔を赤くしな  
がらネギの方をチラチラ見ている。

「私たちはお邪魔なようだから行くぞ」

そういつてエヴァは茶々丸、サジを連れて歩いていった。

木乃香に連れられてやってきた茶店で命照達はお茶をしていた。そ  
の後ろではエヴァとサジが甘味を食べていた。

アスナは夕映やハルナと一緒にネギとのどかの所を覗きにいつてい  
る。

「みよう君、これ覚えとる？」

そういつて木乃香が差し出したのは、昔あげた櫛だった。それを見  
た刹那も首飾りを取り出した。

「ああ、覚えてるよ。再会を誓つて渡したんだっけ」

「ええ、そうです。あの時、私達は攫われそうになっていました。」  
「そうだったな。それを助けてくれたんがみよう君やった。」  
そうして木乃香と刹那は、あの時の事を語りだした。  
話は弾み和やかな時間が過ぎていった。

「さて、そろそろ行こうか」

「うん、わかったわ」

「わかりました」

そういつて命照達は店を出ていった。その時に命照はエヴァに向か  
つて

「あんまり、食べ過ぎるなよ」

「うるさい！」

すでに団子などの開いた器などが積まれていた

外に出て東大寺などを三人で見学していると、茂みの裏で何かを覗  
いている感じの生徒を見つけ命照が注意すると

「おい、お前達何している」

「きゃ・・・なんだ。命照先生か。あつ木乃香と桜咲さん」

「しっ！今いいとこなんです」

「そうよ。静かに」

そういつて命照達を捕まえ茂みに隠した

「一体何なんだ」

「あれ、見て」

そう言われて茂みの向こう側を見てみると、そこにはネギと顔を真  
つ赤にした宮崎のどかが向かい合っていた。

彼らはちよつとした広場の芝生の上に立っている。後ろでは一匹の  
鹿が二人の様子とは無関係にのんびりと草を食んでいた。

のどかは決心したように大きく息を吸い込む。

「私、ネギ先生のこと出会った日からずっと好きでした！！ 私…、  
私、ネギ先生のこと大好きです！！」

（（（（（おおー！！）））））

「失礼します！！ ネギ先生ー！！」

のどかはそのまま走り去っていった。命照達の方ではのどかの告白を見て騒がずにいたが大いに盛り上がっていた

一方のどかに告白されたネギは思考回路がオーバーヒートしたのか、その場に倒れてしまった。

「あつ、ネギが倒れた」

「キヤー！！ ネギーッ！！」

「ひゃー！！ ネギ君大丈夫なん！？」

命照は冷静にそう言うのと5班のメンバーがネギに次々と駆け寄った。倒れたネギの介抱に大騒ぎな彼女たちをよそに、刹那は一人のどかの告白について考える。

自分は命照の事は好いている。しかし自分の秘密を知られるのが怖い。

きつと木乃香のように受け入れてくれる。と思っても心の奥底では嫌われるんじゃないかと思っていた

刹那がそんな考えをしている間にネギはアスナと夕映、ハルナによって運ばれていった。残ったのは命照と木乃香と刹那である。

「え〜な〜、うちも・・・」

木乃香はのどかの告白を見て自分の気持ちと向き合っていた。

命照と会ったのはたった一度、それも一日のみであったが、その記憶は鮮烈に覚えている。

そうして自分の気持ちと向き合った木乃香は心を決めた。そして刹那に

「せつちゃん、ごめんな」

「このちゃん？」

木乃香は刹那に謝った。しかし刹那は何の事だか分らなかったがこの後に起こる事でそれを知ることになる

「みよ・・・みよう君！」

「ん？なんだ。木乃香？」

命照は急に声をかけられ木乃香の方を向くと、木乃香がとても神妙な顔でこちらを見ていた

「うち・・・うちな・・・あの頃からな・・・みょう君のことが・・・大好きやったん！うち、みょう君のことが大好きや！」

木乃香は命照に告白をした。刹那はさっきの謝罪の意味を理解し、その上で心から祝福をした。そして命照は何故か困った顔をしていった。

「ありがとう。」

木乃香はその答えでとても幸せそうな顔になったが、次の言葉でその顔は沈んだ

「でも、今はその気持には答えられない。俺は自分のことを知ってもらってないから、」

「じゃ・・・じゃー教えてーな。そしたら」

「今は教えられない。せめて詠春さんの所に行くまでは」

「お父様の所？家についたら教えてくれるん？」

「ああ、そうだ。全部話そう。あの時に起きた事、俺が連れていった場所の事も」

そういつて命照は歩きだした。

木乃香はとても悲しそうな顔をしていた。それを刹那が慰めていた

「このちゃん・・・」

「せつちゃん・・・うち・・・」

「大丈夫ですよ。ちゃんとありがとうって言うてくれたじゃないですか。きつと命照先生にも秘密があるんですよ。それに私も・・・」

「そうやね。はつきりと断られたわけやないもんね」

そういつて少し元気を取り戻した木乃香は刹那と共に歩き始めた。

## 修学旅行二日目・1（後書き）

ついに木乃香の告白です。でもまだ返事を保留中。次回はついに大イベントです。結果どうしよう

## 修学旅行二日目・2

奈良公園での一幕が終わり、命照たち、ネギ＋5・6班は旅館に帰ってきていた。

その中、ネギと命照はロビーにて共に悩んでいた。

ネギは時々頭を抱えたり、転がったりして唸っているし、命照は動きこそしないが暗いオーラを出して悩んでいた。

それを陰から見ている3・Aの生徒たちは彼らに何があったのか不思議に思っていた。

もちろん事実を知っている者はいる。

そして知らぬ者たちがネギにどうしたのか聞いてみると、ネギは意味不明なこと言いつつ走って逃げていった。

それならと命照に聞こうとするが命照の放つオーラに押されて誰も聞けずにいた。

「うーん、大丈夫かしらねえ、あのガキンちよは」

「もうネギ先生はなにもかも一杯一杯といった感じですね」

「それより、命照先生はどうしたのよ。かなり暗いけど」

「えっ！？それは・・・ですね」

刹那は木乃香が告白したことを話すわけにはいかず、戸惑った。

そしてネギの方はというとまた捕まり、生徒に迫られてついに

「いえ・・・何でもないですよ。誰かが僕に告ってなんて・・・」

「えっ！？告った！？」

「ネギ君！？誰かに告白されたの！？」

告白という言葉聞いた生徒たちは大騒ぎになり、いいんちよと佐々木まき絵が詰め寄ってきて、ネギは口を滑らせてしまったせいで余計あわててしまい、さらにテンパってきて。

「いやっ、あのっ、ココロックさんがコクのあるコックリさんのスープレ」

あわてるあまり彼はわけのわからないことを言い始める。

「ぼ、僕、しずな先生たちと打ち合わせがあるのでこれでー!!」  
彼は一人でどこかへダッシュで逃げて行ってしまった。  
そして命照も何か決心したのか旅館を出ていった。

旅館を出た命照はとある所に電話をかけた

「あつ詠春さん、お久しぶりです。少しいいですか」

掛けた所は近衛詠春の所であった。

命照は先ほどの事を伝えるとともにそちらに着いたら木乃香に事情を説明するということを説明した

「（わかりました。正直は話、このかの告白した相手が君で良かったのかもしれませんが。それでも私の親心が娘を取られたと騒いでいるのですよ。とりあえずこの件はこちらについてからということ）

」

「ええーわかりました」

そういうと命照は電話を切った。そして一息ついていると、視界にネギの姿をとらえた。

「そういえば、あいつも俺と同じだったけな。いい機会だから話してみるか」

そういつてネギに近づこうとした時、ネギの前の道路に猫が飛び出した。それだけならいいのだがさらにそこに車が走ってきたのである。しかし見晴らしのいい道路なのに、車のスピードが遅くならない、よく見ているとドライバーが半分寝ていたのである。

ネギはとっさに飛び出し車を魔法で吹き飛ばしたのである

「大丈夫ですかー」

「へっ？あれ？」

命照はそんなネギに近づき

「おい、大丈夫か？」

「あつ命照さん、はい大丈夫ですよ」

「まったく、やりようがあるだろう。派手すぎるぞ」

「・・・すいません。」

命照はネギを軽く叱ると車のドライバーの方を向き

「すいませんね。この事忘れてもらえますか。」

「えっ？かひっ」

命照はドライバーにそういうと変なヘルメットの様なものを被せた。数秒後、ヘルメットを外して手をたたくと

「あれ？俺どうしたんだ？」

「危ないですよ。あなたあと少しで壁にぶつかる場所だったんですよ」

「えっ！あーそうだ。それで気を失ってたんだ」

「気をつけて下さいね」

そういうとドライバーは去って行った

「命照さん、一体何したんですか？変なヘルメットを被せたと思ったら記憶がすり替わってるじゃないですか」

「まあーこれも平穩を掴むなら必要だつて事さ」

「なんですか、それはー、待って下さい。まだ話は」

そういつて命照を追いかけようと杖に乗り飛んでいくネギだったが、それを一部始終見ていた人物がいたのである

「来たーコレー。」

その後、命照はネギの質問をつまきはぐらかしながら、ネギと一緒に温泉に入った。その時に要らぬトラブルに巻き込まれ、温泉を上がった所にアスナと刹那が居て、事情を説明した

「えー！？ ま、魔法がばれたー！？ しかも、あああの朝倉にー！？」

明日菜の声がロビーに響き渡る。

ネギは漆塗りで和風のベンチに座り、半泣きの状態であった。

命照はあまり困った顔はしていなかった

「まったたく・・・」

「どうしたもんかな・・・」

明日菜の弁によれば朝倉にバレることは世界にバレることに等しい

とのことらしい。

「記憶を消すしかないのか」

「でも記憶消去の魔法は難しくて……」

「そうよねー。一度私の記憶を消そうとして私のパンツを間違えて消すぐらいだもんね」

「どこをどう間違えたら、そうなるんだよ……」

命照には珍しく桃色の想像をするが頭を振ってすぐに頭から消した。そしてそのまま、しばらく考えて

「しょうがない。俺がやってくるか」

命照は先ほどと同様に記憶を消すことが一番だと考えた

「命照先生もそんな魔法をつけるの？」

「魔法じゃないが、というか直接？」

「直接？って言われても」

そう言ってる間にロビーに通じている階段から噂の朝倉和美が下りてきたのだ。なぜか彼女の肩にはカモが乗っかっている。

「朝倉さん!？」

「ちょっと、朝倉。あんまり子供をいじめんじやないわよ」

「イジメ？ 何言ってるのよ」

「そうそう。このブンの姉さんは俺らの味方なんだぜ」

聞くところによると、カモの説得により朝倉はネギの秘密を守るエージェントとして協力することになったらしい。その証拠なのかどうかは知らないが、彼女は持っていた証拠写真をすべてネギに渡した。

「よ、よかった。問題が一つ減ったですー」

「よしよしネギよかったわね」

ネギは安心した顔をし、明日菜はそんなネギの頭を苦笑しながら撫でる。

「それにしても、柗木先生もそちら側だったんだ」

「まあー厳密には違うがな」

こうして一つの問題が減った。そして風呂上がりの生徒たちが集ま

つてきたのでこの話はお開きにした。  
そして就寝時間も近くなり、新田先生にも注意されたことから一応生徒たちは自分たちの部屋へ戻っていく。

「んじゃ後で俺たちの部屋で明日について話し合おう」

「ん、了解」

「わかりました」

命照とネギは与えられた部屋にいた。ネギはネクタイを緩めて座り込み、命照はウィンドウを広げ何やら操作し始めた。

命照はまずKOS・MOSに連絡を入れ明日、自由行動での護衛を頼むことにした。それが終わったころ部屋に刹那達が入ってきた

「ネギ、命照先生、周囲の見回りをしてきたよ」

「特に異常はありませんでした。結界も強化しておきました。カモ君が変な魔法陣を書いていたが……？」

「うん？」

そういわれ命照は再びウィンドウを見ると確かに、カモのものと思われる魔力反応が旅館中から検出されていた。

それを見て、カモが何かやらすかもとネギ達に言うと、刹那が懐からお札を取り出した。

「ネギ先生、命照先生、一応これを渡しておきます」

そういつてネギに数枚のお札を渡した。

「それは、【身代わりの紙型】というもので、それに自分の名前を書くと身代わりの式紙を作り出せます」

「式紙って、あのおサルの人が使ってたもの？」

「はい。そうですね。大体は会ってます。これはあのような高性能のものではないので、簡単な命令しか受け付けません」

お札の説明が一段落がついたあたりで、再び部屋に入ってくるものがいた

「入るぞ」

入ってきたのはエヴァ、それと茶々丸であった。二人はこちらを見

る視線をモノともせず命照の近くに陣取った。

「あれ？ エヴァどうしたんだ？」

「明日の話でもするんだろ？ 私も一応話を聞いておこうと思ってな」

それを聞いてネギ達は納得をして、再び顔を合わせた。

「さて、集まったところで明日の話し合いでも始めようか」

そういうと命照とエヴァ達を除く三人は神妙な顔になった

「今日、特に連中の動きがなかったことから明日は確実に勝負をかけてくるだろう。」

エヴァを除く四人はうなずく。

「こちらのほうとしては親書を届けなくてはならない。そちらも敵が来る可能性がある。」

必然的に戦力を二手に分けなくてはならないんだが」

命照は冷静に現状を分析し策を練りながら話す

「ネギは親書を届けに行くとして、一緒に行くのは当然明日菜ちゃんだよな。例の契約でネギといっしょにいれば力を発揮できるんだし。刹那ちゃんは木乃香ちゃんの護衛。そうすると俺はどうしようか？」

命照に策ができた。

「刹那、連中はどちらの方を優先して狙ってくると思う？ 昨日の様子だと木乃香のほうだと思うが」

「おそらくお嬢様の方ですね」

「そうなる俺は刹那といっしょに護衛をやったほうがいいのかな」

「だろうな。そちらの方に戦力を集中させるだろうし」

命照と刹那、エヴァが相談している中、アスナとネギはカヤの外になっただけだった。

そして相談の結果、命照は刹那といっしょに木乃香の護衛にまわることになった。

「それにしてもずいぶんと偏った割り振りになったな。坊やと神楽坂明日菜はほとんど戦闘経験がないだろうが」

エヴァの批評に明日菜は不満げな顔をする。

「ちよつとエヴァちゃん、そんな言い方はないんじゃないの？」

「事実だろうが」

二人が本格的に口げんかに入る前に命照は止めに入った。

「その事だが、俺の侍女をネギ達の護衛につけることにした。」

「侍女ですか？」

「ああ、名をKOS - MOSという。」

先ほどKOS - MOSのこの件を伝えていたのである。

「コスモスさんですか？」

「そうだ、これで戦力差は埋まるはずだ」

「そうだな。KOS - MOSなら並みの・・・いやそれ以上のものが

来ても大丈夫だろう」

「そうなんですか」

ネギはその説明ではイマイチピンとこなかったがこれで、話し合いは終わった。

エヴァ達は部屋に戻り、残った命照たちは今夜のパトロールをどうするかについて相談を始めた。

「次は僕がパトロールしてきますよ。なんか殺気みたいなものを感じるんです。今晚はここにいないほうがいいような気がして・・・」

「言われてみるとなんだか異様な気が感じられますね」

どうも4人とも何かを感じ取っているらしい。

「でも、命照先生はともかく、こんな深夜にネギがいなくなったら他の先生が騒がない？」

明日菜はもつともな意見を出す。

「それでしたら、先ほど渡した【身代わりの紙型】をお使いください。」

刹那が説明をしていると、誰かが部屋にやってくる足音が聞こえた。

明日菜と刹那はすばやく部屋の影に隠れる。

戸口に現れたのはやけにテンションの高いしずな先生。

「ネギ先生ー、命照先生ー！！ もう寝ましたか!？」

「いや、まだですけど……」

命照は短い瀬戸のもとで培った直感と観察力でこのしずな先生は違うと感じていた

「生徒たちの見張りは私たちに任せてくださいねー！

部屋を出ちゃだめですよー！ じゃあ」

「おい！待て……いつちまいやがった」

命照がその感じたことを言おうと思いい、声をかけたがそのまま自然にすばやい動きで去っていった。

夜の11時ジャスト。

3-Aの各班のテレビから興奮した朝倉の声がこだまする。

「修学旅行特別企画！！ くちびる争奪！！ 修学旅行でネギ先生、  
榎木先生とラブラブキッス大作戦~~~~！！」

命照にとって修学旅行最大のトラブルになる夜であった

修学旅行二日目・2 (後書き)

次回はイベントです。命照の相手は誰でしょう？

## 修学旅行二日目・3

「修学旅行特別企画！！ くちびる争奪！！ 修学旅行でネギ先生、  
柗木先生とラブラブキッス大作戦〜〜！！」

夜の11時に各班の部屋の中にあるテレビからテンションの高い朝  
倉の声が部屋に響く。

テレビを見ている3-Aの生徒たちは期待と興奮で目を輝かせてい  
た。

「では。まず選手の紹介に入りましょう。まずは1班からです！！  
1班は鳴滝風香選手、鳴滝史伽選手の双子の姉妹！！実力が未知数  
の鳴滝姉妹！！ 双子ならではの連係プレー炸裂かー！？」

自信満々の鳴滝風香に対して、罰の正座がよほどいやなのか鳴滝史  
伽は半べそをかいている。

「お姉ちゃん・・・やっぱり正座はいやですう〜」

「大丈夫、僕達には秘密の術があるだろー」

風香がイベントを楽しみたくて、いやがる史伽を無理矢理誘って参  
加したらしい。ネギとのキスについては深く考えていないようだ。

この辺りが二人はまだ子供だと言う事であろう。

身体能力に関しても参加者の中でも低いと言わざるを得まい。二人  
揃ってすばしっこいだけで、一部を除き他出場者と比べるとどうし  
ても劣ってしまう。

「2班の代表選手は古菲選手、長瀬楓選手！！バカレンジャーから  
参戦の古菲選手と楓選手は双方共に体力的には最強の相手だー！！」  
微妙にのんびりした様子の楓に対して、古菲のほうはなにやら照れ  
た様子だが、双方ともかなりやる気の様子である

「楓、本当に柗木老師は強いアルか？」

「ニンニン 拙者も直に見たわけではないでござるが、拙者が見て  
榎木殿の身のこなしや気配などはまさに達人と言えるでござるよ」  
この二人のお目当てはともネギではない様子、お目当ては命照と  
の手合わせをしたいみたいだ。楓はエヴァ戦後の戦いを見ているの  
で少しいはあるが、命照の実力を知り、古菲はそれを聞いて手合わ  
せがしたいようだ

「3班の代表は雪広あやか選手、龍宮真名選手！！3班は誰もパー  
トナーになってくれない為急遽4班の龍宮選手が出場だ、ネギ先生  
への偏愛と執着で注目されるいいんちよ！！当然ながらネギ先生相  
手では人気No.1です！龍宮選手が鍵を握っているのか〜！」  
当初は傍観していたかったが雪広が出した報酬で出場を決めた龍宮、  
雪広は異常なオーラを放っていた。何を狙っているのか見え見えで  
ある。

「報酬の方は大丈夫なのか？」

「ええ、麻帆良に帰ったら有名甘味所の特別優待券10枚でしたわ  
ね。その代わりネギ先生の唇は絶対死守ですわ」

雪広はもちろんネギ狙い+他の選手からの唇の防衛、龍宮は雪広の  
フオローに徹するつもりだ

「4班の代表は明石裕奈選手と佐々木まき絵選手！！ バランスの  
取れた運動部の二人組です！！」

やる気満々の二人だが明石裕奈の方はどちらかという勝負に燃え  
ているようだ。バスケット好きの影響であろうか？

「よーし、絶対勝つよ〜」

「えへへ〜、ネギ君とキスカ〜、んふふ〜」

まき絵と裕奈の組は元氣一杯だ。まき絵はクラスの中でもネギに対  
する好意をオープンにしている方だが、のどかと違って「弟」を見  
ている感が強い。そして裕奈はそんな彼女と共にこのイベントを楽  
しむべく参加している。立場的には真名や楓に近く、自分がネギと

キスしようなどは考えてはいないようだ。

いかに運動部所属の二人とは言え、いざ他の班とぶつかれば真名や楓には一歩及ばないだろう。しかし、このイベントの趣旨はあくまでネギの唇を奪うことだ。他の班と鉢合わせにならずに彼の元に辿り着く事ができれば、彼女達にも優勝の可能性は十分にある。

「5班からは綾瀬夕映選手と宮崎のどか選手！図書館組から大穴の二人がエントリー！！」

顔を真っ赤にしてあたふたしているのどかを夕映が宥めていた。

「まったくバカばかりです。こうなれば絶対勝つてのどかとキスさせるですよ」

「う、うん」

夕映はせっかくのどかが告白したのだからそれを成就させるため、のどかはそんな夕映を見て頑張らなきゃと気合を入れていた。この組は他の組と比べると大幅に戦力は劣るため、他の班と会えば壊滅は必至、会わないルートを見定めるのが鍵になりそうだ

「最後は5班の近衛木乃香選手と6班の絡繰茶々丸選手だ。この組は元々6班は誰もエントリーしなかったため、先に出場を決めた綾瀬選手達に権利を譲った木乃香選手が6班として出場それに合わせ茶々丸選手がパートナーとしてエントリー。木乃香選手は柎木先生狙いか」

いつものように無表情な顔を浮かべる茶々丸に対し、にこにこ顔の木乃香

「よろしゅうね。茶々丸さん」

「はい、頑張りましょう」

木乃香はもちろん命照狙い、昼間の告白もありとてもやる気満々、一方茶々丸はエヴァの命令でここに居るので特にやる気もこもっていないとさえ木乃香のフォローだけするつもりのようなようだ。木乃香は戦力にはならず、他の組と会ったら主に茶々丸が戦闘をこなすよ

うである。茶々丸の戦闘能力なら楓や龍宮以外ならさほど苦労はし  
そうにない

話は数時間前に戻る。

昨日酔いつぶれてしまい、遊べなかった反動なのか、就寝時間にな  
っても大騒ぎを続けていた3-Aの生徒たち。そんな彼女たちに業  
を煮やして鬼の新田先生の雷がおちたのだ。

班部屋からの退出禁止の上、見つければ即ロビーで朝まで正座。

文句を口々に言う面々に朝倉は悪魔のゲームを提案したのだ。館内  
のどこかにいるネギ、もしくは命照と最初にキスしたものに景品を  
与えるというものだった。お祭り好きな彼女たちが乗らないわけが  
なかった。

それが現在の状況に至ったわけである。

そのころ、部屋で休んでいた命照とネギは悪寒めいたものを感じて  
いた。

「なんだろ、この悪寒は？ 命照さんも感じた？」

「ああ。いったい何だろうな？」

数多の戦闘経験を持つ命照でもさっぱり見当がつかなかった。

「僕、やっぱり外にパトロールに行つてくるよ。頭も冷やしたいし・

・

「そうか。じっくり考えんだな」

命照は自分も同じことがあったのでネギの気持ちはすこしわかって  
いた

ネギはさっそく身代わりの紙型を使ってみることにした。

ところが筆で本名を書くというところで思いのほか手間取り何枚か  
書き損じてしまった。

「ずいぶん間違えたな・・・」

「だ、だって。筆で書くの初めてで・・・、緊張しちゃって・・・」

命照は書き損じた紙型をくずかごに捨てながら言う

そしてしっかりと本名が書かれた紙型をもって

「お札さん、お札さん、僕の代わりになってください」

呪文を唱える。すると、紙型からネギそっくりの式神が現れた。それを見た二人は関心の声を上げた。

ネギはさっそく身代わりに関心の代わり寝ているように指示した。そしてネギは杖を持つと、ベランダへと向かった。

「じゃあ、僕は外の方を見回ってくるね」

「俺は中を見回るから。外で何かあればすぐに知らせろ」

「うん!!」

ネギはベランダから飛び降りた。

命照は部屋の中に戻り、窓とカーテンを閉める。

「さてロビーで監視でもするか」

そこで命照の運命を決める出来事があるとは知らず命照はロビーに向かった

そしてネギの身代わりになった式紙が何かしでかすのだがそれも命照はこの時何も知りもしなかった

命照達が見回りに出た頃

ホテルの廊下をスリッパでそろそろと歩く二人組、明石裕奈と佐々木まき絵がいた。

彼女たちは一様に動きにくいはずの浴衣姿だ。

(ふふふ。ネギ君とキスカー)

(まき絵、なんかうれしそうだねー)

(ふふ、まあねー)

二人は忍び足で歩きながら小声で話をしていた。

(ねえねえ、ゆーなはどうするの?)

(私かー。ネギ君がいいけど、榎木先生なんかどうかな?)

(えーでも、木乃香とか桜咲さんとかが狙ってなかったっけ?)

(でもさ、チア三人組が榎木先生はお金持ちっぽいって言ってたし、それに結構かつこいいじゃん)

彼女たちは冗談で言っているんだろうがお金持ちって所はあながち

間違っではない。

そんなことをしゃべりながら、曲がり角を曲がる。

そこには天井裏に上ろうとする鳴滝姉妹の姿があった

（あー、そんな所入るのずるい）

（しまった。見つかった。しょうがないヤルよ。史伽）

（先手必勝！）

そういつて何故かある縄梯子を下りる鳴滝姉妹に裕奈は問答無用に攻撃を仕掛けていく

（あぶっ！まだ下りてないのに卑怯です！）

（決めるよ！史伽！）

（（鳴滝忍法、分身の術！））

（別に分身してないじゃん）

裕奈はそう突っ込む

（喰らえ、甲賀しゅ・もげー）

（へへーん、油断しちゃだめだよー）

こうして1班と4班の戦いが始まった。その時階段を下りてきた者たちがいた

（おっエモノがたくさんいるアル）

状況はさらに混迷を極めた。階段から古菲が両手と片足に枕を持って乱入してきたのだ。彼女は器用にも三つの枕を裕奈、鳴滝姉妹にぶつけたのだ。

さらに戦いが激化すると思われたそのときだった。

呆れ返った声が廊下に響く。

「なにやってんだ、おまえら？」

実況の朝倉は興奮した声でレポートした。

「おおっと！！なんとここで早くも榎木先生の登場！！しかし本命の木乃香選手がいません！！ここで大穴が決まってしまうのか  
！！！！」

命照は何故か三つ巴で乱闘している3-Aの生徒たちに呆れつつも、

不思議に思っていた。

( いったい何を、枕を持っているってことは枕投げ？でもここは廊下・・・注意した方がいいのかな？ )

そんなことを思いつつ声をかけようとした時、乱闘している生徒たちが動きを止め、命照の方へゆっくと振り向いた。彼女たちから壮絶なオーラが感じられ、その目は邪悪に光っていた。

命照の背中に冷や汗が流れた。

( この感じ、昔感じたあの・・・ )

命照は某鬼姫と某理事長の義姉の影がちらついていたが気のせいだろうか。

命照は思わず後ずさりする。すると、木の床板がきしんで音を立てた。

それが合図になり、最初に動いたのは古菲だった。

「 榎木老師、勝負アル！！ 」

「 うわっいきなり何をやる 」

命照はいきなり仕掛けてきた古菲の蹴りを手の甲で逸らして捌いた  
「 おっこれを捌くとはなかなかやるアル 」

着地し素早く左足を一步踏み込み、ねじりこむような右の中段突きを放つ。

「 だから、いったい何事！？ 」

命照はその突きを素早く右斜め前に大きく踏み込むことでかわした。同時に古菲が突きを放った右手をつかみ、自分の方へ引き寄せながら手首を返し、古菲の足を払う。

「 アル 」

古菲は宙を一回転しながら落ちる。最も古菲は受身を取っていたし、命照も怪我をしないように気を配っていたのでなんとまあなかつた。その隙を突くものがない

「 隙ありでござるよー 」

楓はクナイを命照に向かって投げた

「 あぶな！ 」

「大丈夫でござる。刃はつぶしているでござるよ」

命照は瞬時に反応しクナイを掴む  
さらにその隙に古菲は素早く接近し、彼女は無意識に全身に気を纏わせる。気で肉体を強化された彼女は命照の動き見て胴に向かつて拳を振るう。

「だから！」

命照も瞬時に全身に気を纏わせ、彼女の掌打を左手の甲で受けた。  
素人が喰らったらかなりヤバめな攻撃だった。

硬直時間に楓が接近し足払いをかけてきた。命照は楓の肩を掴み飛んで、楓の後ろに着地する。

その同時に右後方から古菲が接近し、左足で中段の回し蹴りを入れる。命照は彼女に対して一步左へ動くことで彼女の蹴りの間合いをはずし、なんなくかわした。

「いったい何なんだよ。いい加減しろ」

命照もいきなり仕掛けられ少しイライラしてきた。

「おろーあっさりあしらわれたでござる。」

「すごいアル、噂以上アルね」

もはや彼女たちは枕を使うというルールは無視していた。

鳴滝姉妹と運動部二人組は見事に呆然としており、行動が起こせなかった。

「なんと、柁木先生！！ 長瀬楓選手と古菲選手の攻撃を余裕でのいだー！！彼には格闘の心得があるのでしょうか！？」

各班の部屋にざわめきが起こる。

「すごい。」

「柁木先生って実はすごく強いんじゃない？」

生徒たちの命照評に新たになにやら付け加わったようだ。

そんなことを言われているとは知らずいる命照は困っていた。彼女たちはどうやら腕試しをしたいようで、こんな所だからか、かなり

手を抜いている感じがする。

命照はどうしようか考えていた。普通の生徒が居る中、どうしても行動に制限があるのでここは逃げることにした。

そこで命照は小さく呟いた

「縛道の二十一「赤煙遁」せきえんとん」

「おろ？」

楓は何か聞こえ、命照のほうを向くと、命照は何か叩きつけた

「みんな、伏せるでござる！」

その声と同時に煙が辺りを包んだ

「これは煙玉？」

すぐに煙は晴れたがそこには命照の姿はなかった

「い、いないアル!？」

「榎木先生逃げちゃったのかなー？」

「史伽いまだ行くよ。」

「あつお姉ちゃん待ってー」

そのとき、彼女たちが全員恐れている人間の怒鳴り声が聞こえた。

「こらー鳴滝ーなにやっとなるかー」

「あぶぶぶ〜」

どうやら鳴滝姉妹が行った方に新田先生がちょうどいたらしく捕まってしまった。

次の瞬間他のみんなは一齐に逃げだした。しかし、古菲のあたりを食ってよろけた裕奈は逃げ遅れてしまう。騒ぎを聞きつけてやってきた新田先生に彼女はあえなく捕まり、同じく捕まった鳴滝姉妹とともにロビーで正座となった。

「と、とうとう犠牲者が出ました!! 鳴滝風香、史伽と明石、リタイヤ!! よって1班リタイヤと4班のオッズ大幅ダウンです!!」

「って、あれは……?」

ロビーの映像の中に命照の姿が映っていた。

「おーと榎木先生、あの煙の中逃げた先はロビーだ。しかも呑気にパソコンを開いて寛いでいる〜」

いきなりの襲撃をなんなく逃れロビーに来ていた命照は、先に捕まった鳴滝姉妹、明石裕奈が新田先生に連れられてロビーにやってきた。

「榎木先生ちょうどいい所に、あなたのクラスの生徒は言いつけも守れないのですか!？」

「新田先生、申し訳ございません。私が責任を持ってこいつらの監視をしますので・・・」

「わかりました。それでは私は、まだ出歩いている生徒がいなければ見回ってきます。ここはお願いしますね。」

そういうと捕まった三人を正座させ、見回りに出かけていった。

「ひえくん」

「やっぱりこうなつたです」

「榎木先生、見逃してよ」

三人は嘆きながら、命照に懇願するが、

「ダメだ。せめて2時間はそうしててもらつたらな」

「・・・そんな」

その頃

「近衛さん、命照先生はロビーにいるようです」

「そうなん?よくわかるな」

茶々丸は自前のセンサーを使い命照の居場所を逐一詮索していた。

そして動きが止まった所で木乃香に伝えたのである。

「それと茶々丸さん、うちのことはこのかであえよ。」

「そうですか。では行きましょう。このかさん」

そういつて木乃香達はロビーに向かつていった。茶々丸の指示のおかげで他の組とも新田先生とも会わずにロビーに着いたのである。

そこでは少し騒動が起こっていた。

少し前

命照は操作していたパソコン（生徒が居るのでカモフラージュの為）を操作していると、ネギの部屋に異変が起きていた。

そこにはネギが寝ていてのどかが寝込みを襲おう？としていた時、それが現れた。

「あちゃ、失敗したはずの紙型が動き出してやがる」

そう書き損じて捨てたはずの紙型がネギの姿を取り現れたのである。のどかはそれを見て軽く失神、暴走した紙型が他の生徒に対してキスを強要したのである

2班・古菲

「その。お願いがあつて・・・キスしてもいいですか」

「へ？」

逃げられた命照を探してロビー近くにいた古菲と楓

3班・龍宮

「キ・・・キスしても・・・いいですか？」

「なっ・・・なに」

「なんであなたなのですか〜」

どの班とも会わずネギの部屋に近づいていた雪広達、決して後ろを取られない龍宮の後ろからネギが現れ、驚く龍宮にさらに追い打ちがかかり、それに対して掴みかかる雪広

4班・まき絵

「チューしてもいいですか」

「えっ？」

裕奈と別れ、旅館を一人寂しく彷徨っていたまき絵

5班・夕映

「キス・してもいいですか？夕映さん」

「なっ！？」

気絶したのどかを布団に寝かせ改めて、ネギを探そうとした夕映

そしてそれぞれが困惑している時、いち早く正気に戻った夕映はモ

ニターに複数のネギが映っていることを知り、持っていた分厚い本で叩いた。そしたらネギだったものが紙型に戻ったのである。そしてリーダー紙型が居なくなり、他の紙型達はロビーに集まった

ついでにその頃刹那とアスナは手にタオルなどのお風呂用具を持ち自分たちの部屋へ戻るべく廊下を歩いていった。

風呂上りなのか彼女たちの髪の毛はまだ濡れており、頬も赤みが差していた。そのせいか二人とも微妙に色っぽく見える。彼女たちは浴衣を着ていた。

「いい湯だったわねー、刹那さん」

「ええ、そうですね」

「明日からまた大変になるからここで英気を養っておかなくちゃ」軽くガッツポーズをとる明日菜を刹那は笑顔で見る。

「ところでなんかさ、ホテルの中が騒がしくない？」

「そ・、そうですねー。害意は感じませんが」

そういいながら二人はロビーに差し掛かった。

そこには何故か複数のネギが居て、それを追いかけてきたであろう、クラスの友達がいた

「これは一体何なのよー」

こうしてイベント出場者 他二名はロビーに集まった

「あゝめんどくせー」

命照は集まった偽ネギ達を見て呟いた。

(どれもいいからチューするアル。楓捕まえるアルよ)

(あいあい)

そういつて古菲は近くにいた偽ネギを捕まえて、ほっぺにキスをする。

その瞬間、偽ネギは爆発した。

「アル」

「11ねー」

その騒ぎに新田先生が駆け付けたが、偽ネギの襲撃を受け会えなく  
気絶

そしてそのまま他の偽ネギは逃げだしたのである。

「こうなれば自棄ですわ！ いきますわよ。真名さん！」

「しょうがない。報酬の為だ」

「私だつて！」

そう言つてそれぞれ偽ネギを追いかけていったが会えなく【ボン】  
となつたのである

そしてその時、ロビーにはなんと本物のネギがやってきたのであつた

そして偽ネギが居なくなつた後、刹那が恐る恐る命照にことの経緯  
を聞いた。

「そんな、私が渡した。紙型が原因だつたなんて・・・す・・・すい  
ません」

「そんなに謝らなくてもいいつて」

そのとき、後ろか声がかげられた

「せつちゃん、何してるの？」

木乃香であつた。木乃香は刹那を軽く押した。刹那は不意を突かれ  
たのかそのまま、前に倒れてしまった。

なんと刹那が命照を押し倒した状態になっており、なおかつ命照の  
唇に彼女の唇を押し当てた状態になっているのだ。そのまま二人は  
顔を赤くしはじめる。

突然ガバツと刹那が起き上がった。

「ももも・・・申し訳ございませんでした~~~~」

刹那はものすごい勢いで去つて行つた

「む~~~~ええな~~~~せつちゃん、そうや」

そういつと木乃香は放心している命照に近づき

「みよう君、本気やで〜」

そういつと倒れている命照の唇に自分の唇を押し当てキスした。

奇しくもその時、のどかが本物のネギとキスしているのと同時であ

った

テレビにかじりついていてる生徒たちは大騒ぎだ。

「本屋ちゃんがやった!!」

「このかもキスしちゃったよー!!」

「誰か二人にかけた人いるのー!？」

「ハッ……、桜子あんた二人とも当てたんじゃ……」

「えへへー」

「ゲーム終了!! なんと大穴の宮崎のどか選手がネギ先生とのキスに成功!!そして柁木先生のほうは本命のこのか選手がキスに成功しました!!よって両者が優勝となります!! 配当については後ほどお知らせいたします!!」

朝倉は実況を終え、片付けに入った。

一方カモはオコジョ専用のノートパソコンから離れるとにんまりとした。

今回成立した仮契約カードは三枚。宮崎のどか、近衛木乃香、桜咲刹那

刹那のほうは完全に予想外だったのでうれしい誤算だった。やはり相手は命照だろうか？

カモは出てきたカード刹那と木乃香のを見て首をかしげた

「あれ、こんな絵柄あったか？」

彼はカードをじっと見てこれが何を意味するのか考えていると、後ろから朝倉の声がかかる。

「カモツち、なにやっているの!? ずらかるよ!!」

見れば彼女はすべての機材をしまい、背中にしよって撤収準備を完了させていた。

「お、おう!! 大掛かりだった割りには成果が少なかったが仕方ねえか!」

一人と一匹は部屋を脱出しようとしたが、そうは問屋が卸さなかつ

た。

戸口には鬼の新田が怒り心頭で待ち構えていた。

結局朝倉とカモは選手共々（アスナと茶々丸を除く）新田先生に捕まり、ロビーで正座させられたのだった。何もわからないネギも偽者が暴れていたのを目撃されたため正座させられていた。

その頃、命照は部屋で悩んでいた。

「まったく俺は・・・しょうがない全部を話すか・・・受け入れてくれるといいんだが」

命照にとって修学旅行最大のトラブルが終わった

修学旅行二日目・3 (後書き)

ついに木乃香と刹那が・・・次回は映画村での襲撃です

## 修学旅行三日目・1

昨晚の騒動が終わり、次の朝

ロビーでは、昨晚のイベントの優勝景品であるカードが宮崎のどかと近衛木乃香に渡されていた。

「これが豪華商品かー」

「本屋の絵が描いてあるねー」

「木乃香のはなんか本屋のとは少し違うけどなんですか？」

そのどかのカードには制服姿の、のどかが本を広げている姿が描かれている。

それに対し木乃香のカードは樹をバックに見たことのない服装で立っていた。

「これがうちの、あーうれしいわー」

そういつて木乃香はカードを抱きながら嬉しがっていた

「そや、せっちゃんも持つてるはずや、見せてもらいにいこー」

そして木乃香は刹那の所に行こうとしてロビーを出ようとした時、

何故かのどかが通路の陰から何やら見ているのを見てどうしたのかと声をかけた

「のどかーこんな所でどうしたん？」

「いひゃっ!?!?こ、このかさん。いえ実は、そちらにネギ先生達が居るんですけど、なんか様子が変なんです」

「変ってどうゆうこと?」

そういつて木乃香ものどかと一緒に、覗きこんだ

「ちょっと、どーすんのよ、ネギ! こーんなにいつぱいカードを作っちゃってどう責任を取るのよ!」

「ぼ、僕のせいですか!?!」

「まあ、まあ、姐さん」

「そーだよ、アスナ。もうかったからいいじゃん」

「朝倉とエロガモはだまってなさい!!」

ロビーにある和風ベンチの上に座っているネギ、カモ、朝倉は明日菜に説教されていた。

明日菜の隣には刹那がいるのだが、彼女の顔は赤く、目が泳いでいる。時折彼女は自分の唇を指でなぞるといふ行為を繰り返していた。どうやら昨日の命照との「事故」がまだ尾を引いているようだ。

「本屋ちゃん是一般人だから厄介ごとに巻き込むわけにはいかないでしょ。イベントの景品ってことでコピーを渡したけど」

「ま、魔法使いということも秘密にしておいたほうがいいでしょうね…」

「そうですね。のどかさんには魔法については秘密にしておきます」「それと、このかにも渡してたけど大丈夫なの？」

「ああー宮崎に渡したんだ渡さなきゃおかしいだろ。柄は違うが豪華賞品として渡したさ」

「惜しいなー。あのカードらは強力そうなんだけどなー。まあいいや。おっと、刹那の姉さんにもカードを渡しておくぜ」

刹那に渡されたカードは木乃香と同じで樹をバツクに刹那が気であつた剣のようなものを持っている姿である

「へー、私のは少し違うのね。」

「ええーそうですね。」

刹那は顔を赤くして話もあまり聞こえていない様子

「そうだ。命照の旦那。忘れるところだったぜ。」

そういつてカモは命照になにか渡した

「それは二人のオリジナルのカードだから大事にしてくれ」

「ああ、ありがと・・・そうか、たまにしか会わなかったのに・・・命照は刹那と木乃香のカードを見てなにか感ずいたようで

「どうしたんですかい、旦那？」

「いやなに、このカードの効果がな」

「そうよ、そのカードって通信できるだけでしょ。だったら持っていて意味ないじゃない」

「違っつて！！ このカードがあれば自分で道具だけ出せるんだよ！！」

アスナの言い分にカモが力説した。

「カードがあれば兄貴が居なくても道具が出せるんだよ」

そういつて使い方を説明するカモに半信半疑なアスナだったが、言われたように呪文を唱える

「来たれ”（アデアット）」

彼女が手に持ったカードが光ると、おととい彼女が使った大きなハリセンが現れた。

「わー、ホントにでた」

「「おー」」

周りも驚きの声を上げる

ちようどその時、命照達に声をかけてくる人がいた

「そんな所でなにをしている」

エヴァンジェリンである

「おっエヴァちゃん。おはよ」

「ああ、おはよう・・・って質問に答えんか!？」

軽いポケも入ったがここでの説明を見ると、エヴァは命照の方を向くとカードをかすめ取りどんな内容か見た

「なるほど、命照これはアレでいいのか」

「エヴァの思っておることで大体は合っていると思う」

「そうか、よし桜咲刹那、アーティファクトを呼んでみる」

「えっ、私ですか!？」

「そうだ。どんなものか見てみないと使えんだろうが。」

「わかりました”来たれ”（アデアット）」

アスナの時と同じようにカードが光ると

「って何も変化ないじゃない」

アスナがそう呟くと刹那も自分の変化を探し出す

「刹那、左手首」

命照はそういうと刹那のは自分の左手首を見る。すると手首に宝石

のようなものが付いていた

「何なんですかこれ？」

使用者である刹那本人もどのようなものか戸惑っていた  
すると命照が

「それは【頂神の宝玉・レプリカ版】だ」

それを聞いたみんなは、前半で何かすごいものを見るような感じだったが、後半を聞くと何人かへたり込んだ。

「レプリカ版って」

「それよりもどんな能力なんだ」

「そうだな、刹那、左手に気を集中してみる」

「えっあっはい」

そういつて刹那は言われたように左手に気を集中してみた。すると手のひらに気の玉ができたのだ。

そもそも気は、体を強化したり物質に纏わせてそれを強化するのが一般的で、放出したりするのは別の才能が必要である。もちろん神鳴流にも放出系の技はあるが、どれも得物に纏わせた気を飛ばしているので純粹な放出とはいかない。

「これは・・・」

気の玉を作り出した刹那は驚いていた。さらに命照は続ける

「そして、出来た気の玉を握りしめる」

「はい」

刹那は命照の言うとおりに握りしめてみると、弾けるような音と共に握った拳から気の剣ができたのだ

「これは・・・」

刹那はもう同じ言葉しか出せないでいた

「気の剣か・・・なるほどな」

エヴァも感心していた

「そうだ。その気の玉や剣は飛び道具としても使える。それに無手や組合った状態から相手の隙をつくのにも向いている。でも自分の気を使ってる、だから使いすぎには気をつける」

そういつて締めくくった

それを静かに見ていた木乃香とのどかは、廊下を歩きながら話していた

「みよう君達、何話してたんやろ？」

「私もちよつと遠くて、お話よく聞こえませんでした。」

そういう二人だが、聞こえた話の中で一番気になったことをしてみた

「「来たれ」（アダアット）」

二人がそういうと、のどかには分厚い本、木乃香には十枚のスカーフの様なものが現れた

「わー、カードが本になった」

「うちのは、なんやきれいなスカーフや」

そういいながら自分の出した物に触れたりして楽しんでいた

修学旅行三日目の今日は班別の完全自由行動だった。

生徒たちはみんな私服で行動である。

しかしこんな日も命照はスーツ姿である。もちろん樹雷の生糸などで作られたスーツなので耐久性にも優れている逸品である。

ネギと明日葉はこつそりと抜け出して関西呪術協会の本山へ向かう予定だった。しかし、途中で図書館三人組の一人である早乙女ハルナにつかまり、いっしょに班行動をするハメになっていた。

ちなみに命照は今日も六班と行動をとるといふと触れ込みでいっしょに来ていた。

ハルナがニヤニヤしながら命照にその理由を尋ねると、

「他の班といるとおごらされそうだったから」

そんなこんなネギたちは途中抜け出す機会を伺うべく、宿の周りを五班、六班のメンバーとともに散策していた。

宿の周りは伝統的な建物が並んでおり、風情のある町並みとなっていた。

途中、ゲームセンターのプリクラを見つけたのでみんなで記念に撮

ることになった。班員たちがキャツキャツとプリクラを撮る組み合わせを決めている。

ネギは宮崎のどかや明日菜、図書館部三人と撮った。

命照は木乃香と刹那と共に撮ったり、二人で撮ったりした。何故かエヴァとも撮ったりしていた。

そのままなし崩し的にゲームセンターの中へなだれこむことになった。

「もー、みんなったらー。何で京都に来てまでゲーセンで遊ぶのかしら？」

木乃香たちの後を追いながら、明日菜は苦笑する。

「この隙にさつさと行かんか。坊主に小娘」

「ああ、このままみんながゲームに没頭しているスキを狙って抜け出せばいいんだからな」

エヴァと命照の意見に明日菜とネギは頷いた。

命照は辺りを見回すとクレインゲームの前で悩んでる木乃香と刹那を見つけた

「どうしたんだ？」

「あつみよう君、実はなコレ欲しんやけど、うちこついつの苦手で「私もなんです」

景品とは京都限定のストラップである。

「だから悩んでたんか。それじゃ俺がやってやるよ」「ホンマ？」

そういつて命照はクレインをやり始め5回で3個の景品を取ったのである

「わー、ありがとー。はいコレせつちゃんに、それとみよう君にも・これでおそろいやね」

そういつと、向こうの大型ゲーム機の方で遊んでいたハルナが木乃香を呼ぶので木乃香はそちらの方に行き、その後刹那と話している

とエヴァもやってきて今度の行き先などを話し合った

そしてネギの方を見れば、彼と同じぐらいの年頃の少年がゲームで

対戦をしていた。

少年は学ランを着ており、ニットの帽子をかぶっている。そのニットの帽子にはなぜか梵字が入っていた。

命照はその少年の姿を見ると表情を変える。ふとエヴァンジェリンの方を見ると、彼女も命照の方を見て頷く。

やがて対戦が終わると少年は立ち上がった。

そして何かいいながら去って行った。

その後、他の班員たちがゲームに熱中し始めたのでネギと明日菜は今のうちに本山へと向かうことにした。

「じゃ、刹那さん、命照先生。あとは頼むわね」

「はい、二人とも気をつけてください」

「それと助っ人だけど、近いうちに姿現すと思うからよろしくな」

「いまいち、頼りないわね。まあいいわ。それじゃ」

二人はカモを連れてゲームセンターを出て行った。

「少し心配ですね」

「あの二人はまだ戦闘慣れしていないからな」

「だがなエヴァ。それを言い出せばキリがない。まああいつも向かわせたし大丈夫だろう。」

## 修学旅行三日目・1（後書き）

刹那・カード説明・

頂神の鷲羽の宝玉のレプリカ版、能力は魍子が使うエネルギー弾やソードと同じ。使いこなせれば壁抜けやテレポートもできるようになる。背後の樹は将来契約するであろう皇家の樹、仮契約なので力などのサポートはない。これらはすべて鷲羽の仕業かも、その内鷲羽が出てくるかも

## 修学旅行三日目・2

今、ネギと明日菜は関西呪術協会の本山の入り口まで来ていた。

目の前には大きな鳥居が立っており、その後ろには石畳の階段がある。石畳の階段が終わるとひたすら奥へと道が続いており、その道をまたぐように無数の鳥居が奥へと並んでいる。

あたりに人気は無く、風の音が耳を打った。

「ここが関西呪術協会の本山か……」

「うわー、何か出そうねー」

「伏見神社つてのに似ているな」

二人と一匹は口々に感想を漏らす。

そのとき彼らの近くの虚空に光が現れた。

「明日菜さん、ネギ先生、大丈夫ですか!!」

可愛らしい破裂音をたてると二等身大で袴姿の人形サイズの刹那が現れた。

「わっ!?!」

「せ、刹那さん!?!」

「はい、連絡係の分身のようなものです。ちびせつなとお呼びください」

ちびせつなはぺこりとおじぎをした。

横ではなにやらカモが出番を取るなど暴れていた。

「関東魔法協会からの使者であるネギ先生が歓迎されるとは限りません。」

罨などに気をつけてください。」

ネギと明日菜は緊張する。

そして覚悟を決めて明日菜はアーティファクトのハリセンを出し、ネギも杖を構えた。

「行くよ、ネギ!?!」

「ハイ!?!」

明日菜を先頭に二人は本山へと続く通路を駆け出した。その時、入り口の鳥居の前に誰かが立っているのに気づき、あわてて止まった。「アスナさん、あそこに誰かいますよ」

「えっ!？あ、ほんと女の人みたい」

「あれは、まさか・・・」

ちびせつなは見覚えのある服装だと思い、声を掛けようとする

「お待ちしておりました」

声をかけられたネギ達は、とっさに距離を取りそれぞれ武器を構えた。

そんな中、ちびせつなはちょうど真ん中で安堵の表情を浮かべていた。

「お久しぶりです。KOS・MOSさん」

「あなたは・・・ああ、刹那様でしたか。ずいぶん小さくなられて」

「これは、式紙ですから」

「ええ、わかってます。冗談です」

ちびせつなは近づいて挨拶した

そんなやり取りを見ていたネギ達は恐る恐る聞いてみる

「あの、ちびせつなさん。その人はどなたでしょう?」

その声を聞いたKOS・MOSはネギ達の方を向いて

「はじめまして、私は命照様の侍女のKOS・MOSと申します。

この度は命照様のご命令であった方の護衛をする為にまいりました」それを聞いたネギとアスナは戦闘態勢を解き、安堵の表情を浮かべた。

「あなたが、命照さんが言っていた助っ人ですか。はじめまして僕、ネギ・スプリングフィールドです」

「神楽坂明日菜です。それで、コスモスさんはなんでこんな所で、私達を待っていたんですか?」

「はい、私ももう少し先まで行こうとしたのですが、この先はどうやら結界が施されているようなので忠告と警戒を知らせるためにお待ちしておりました」

KOS・MOSはこの先を偵察しようとしたが、すぐに鳥居に広がる結界をセンサーで感知し、しかたがないのでここでネギ達を待っていたのである。

「結界ですか!？」

「はい、観測の結果中心から500M程の半円球のつまりドーム型の結界が仕掛けられています。そこは無限ループのような終わりがない所になっております」

「まさか、無間処方の呪法!??・・・なるほど敵はネギ先生達を結界に閉じ込めてお嬢さまを攫うのと親書の妨害、二つの時間稼ぎを・・・どうしますネギ先生?」

ちびせつなはこの先に仕掛けられている罠を木乃香の誘拐の時間稼ぎの為と解釈した

そんなネギ達を監視する目

「なんやあの女は〜うちの計画全部オシヤカにするきかあ〜」

「せやからこんな、小細工せんで、正面から叩けばよかつたんや」

そこにいたのは着ぐるみを着た千草と先ほどまでゲームセンターで戦った少年である

「うるさい。こうなつたら意地でも結界の中に入れてやるわ〜」

そういうと千草は数枚の呪札を取り出しネギに向けて放り投げた

「これからどうするのよ〜ここから先には行けないんでしょ。」

「大丈夫です。本山にはまだいくつかの入り口がありますからそこにまいりましょう」

そういうとちびせつなは先導するように飛んで行くとした、その時10匹近くのサルが急に現れ、数匹ずつネギやアスナに纏わりついてきた

「きゃー又おサルって・・・まさか!えっ、きゃー」

「アスナさん?ラス・テル・マモがー」

「みなさん!このー!きゃ」

「ちくしょー何だっというんだー離せ」

纏わりついてきたサル達はアスナのスカート・オコジョのカモ・ちびせつなを抱え鳥居の中に入って行った

「こらースカート返しなさい」

「カモくーん」

「ネギ様、アスナ様、お待ちください。そちらは・・・しょうがありません」

二人を止めようとするKOS・MOSだったがもういつてしまったので急いで追いかけていこうとしたがそう遠くない所から視線を感じ声をかけた

「出てきなさい。そこにいるのでしよう。」

近くの物陰から音がして誰かが倒れこんで出てきたのだ

「ほう」

「あなたは命照様のクラスの・・・」

「えっ！？ 柎木先生？・・・はいそうですけど・・・」

KOS・MOSの質問に戸惑いながらも答えたのは宮崎のどこであった

「まあいいでしょう。あなたはここで待ちますか。それともネギ様の所に向かいますか？」

「ネギ先生の所・・・はい、お願いします。」

「わかりました。それでは私の後を着いてきて下さい」

そういうとKOS・MOSは結界のある鳥居の方に歩き始めた。

のどかはKOS・MOSの後をついていった。

「この感じは・・・」

ネギの後を追い鳥居の結界の中に入ったKOS・MOSは何やら違和感を感じたがとりあえず合流を目的としたためのどかと歩いていった。しばらくすると休憩所の様な所が見えてきて、なにやら声が聞こえるのでそこにネギ達が居ると見た二人を急ぐことにした。

しかし、ちょうどその時、その休憩所の付近に何者かが降りてきた

のである。

KOS・MOSはようやくこの結界に入った時に感じた違和感に気付いたのである

「私のセンサーが働かないなんて……ここの結界のせいでしたか。のどかさん、あなたはそこの物陰に居て下さい。」

「えっ。あつ、はい。」

いまいち今の状況についていけないのどかは、とりあえず言われたと通りにした。

「一昨日の猿のお姉さんと同じく、護鬼を連れてる。彼は陰陽術師？」

前回と同じく、護鬼を連れてるので彼を術者と思っていると明日菜の声が飛んできた

「ネギ!!!」

「ハ、ハイ!!!契約執行90秒(シス・メア・パルス・ペル・ノーナギンタ・セクンダース)、ネギの従者『ミニストラ・ネギ神楽坂明日菜』!!!」

ネギが呪文を唱えると彼の魔力が明日菜に流れ込んだ。

彼女は体全体に淡い光を纏うと、一気に駆け出した。

「ガキだからって手加減なんかしないわよ!!!」

明日菜の渾身の力を込めた右ストレート。

少年は軽くかわしたが、鬼蜘蛛の体にはきれいに決まり、吹っ飛ばした。

「アデアット!!!」

明日菜はアーティファクトのハリセンを取り出すと、大きく跳躍し、鬼蜘蛛に振るう。

すると鬼蜘蛛の姿は消え去り、呪符へと戻されてしまった。

「おお!!!」

「や、やるじゃん、あたしってば!!!」

明日菜は自画自賛する。

「あつはつはつは！！やるなー姉ちゃん。一番固いのを借りてきたのに即効でお札に戻されてしもたわ」

少年は自分の連れてた式紙を倒されたというのにとても平然としている。

それを見たネギはある予想を立てた

（前の猿のお姉さんはあの式紙の護鬼がやられたらとてもあせって次の護鬼を出してた。でもこの人はまったくあせらない）

ネギは相手を見ながら考えてると少年が

「でもお前の方はたいしたことないな、チビ助。女に守ってもらって恥ずかしいと思わんのか？

だから西洋魔術師はキライなんや」

それを聞いたネギはムツとして考えるのをやめ飛び出そうとした。

「ちよつとネギ、そんな挑発に乗らないの。」

明日菜は今にも飛び出しそうなネギをなだめながら、少年に向かってさらに

「前衛の護鬼ちゃんもやつつけたし、負け惜しみはカツコ悪いわよ！」

「おつともよ、おめえにはもう勝ち目はねえ、さっさと降参しちまいな」

明日菜と力毛は勝ち誇った顔でいう。

しかし、相手の少年は全く動じる様子を見せないで

「へへっお姉ちゃんも何か勘違いしてへんか。俺、術者ちゃうでー」  
少年はそういうとネギに向かって飛んだ。

「へっ？」

「気をつけて下さい。もしや、奴は・・・」

そして明日菜の前に着地した少年を見て

「とっ・・・やっ・・・この・当たりなさい」

「へへっ、そんなに当たるかいな」

明日菜は攻撃を仕掛けるが、簡単にすべて避けられしまいには足を掛けられ転ばされてしまう。

「アスナさん！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

それを見たネギはとっさに呪文を唱え始めた。そして少年はネギの前にやってきて懐から何か取り出す。

フランスエグザルマティオー  
「風花武装解除」

「甘いで！」

ネギは武装解除の魔法を放ったが少年は取り出した護符で防ぎきった

デフレクシオ  
「風楯……」

「おらー！」

ネギは防がれたのを見て防護壁を出そうとしたが少年の方が早く殴られ吹っ飛ばされてしまった

「ネギーー！！！」

そこから少年の一方的とも見える攻撃が始まった。

「オラオラオラオラー！」

「くっ！」

少年の連続パンチに唯防御しかできずにいるし、ネギが動き回ってかわそうとするとある程度は、受け流せているが代わりに、明日菜の攻撃がまったく当たらなくなっていた。

「待ちなさい！」

明日菜が追いついて攻撃しても簡単に防がれてしまう

「ちょこまか逃げんな。チビ助！」

そういうとかなり力の込めたパンチがネギの障壁を抜けて、ネギはもろに喰らってしまった

「ネ、ネギー」

「どや、今のは障壁抜けたで、効いたやろ。」

「う……」

ネギは立ち上がるが少し血を流していた

「こりやまずいな」

「ええ」

カモとちびせつなはなにやら相談し始めた。

「ははやっぱ、西洋魔術師はダメやな。弱々やな。こんなんじゃお

前の親父のサウザンなんかってゆーのも大したことないんやろ。  
チビ助」

その言葉にネギはかなりカチンときたが、ここでカモとちびせつな  
が行動を起こした。

カモがペットボトルのお茶を投げ、それにちびせつながら術を掛け目  
くらましの霧を作り出したのである

「あーネギ先生は大丈夫なんでしょうか。それにしてもKOS・  
MOSさんはどこにいったんだろー」

KOS・MOSと別れたのどかは、本に載ってるネギの身に起こっ  
ていることを読みながら追いかけていた。そして物音がしたので急  
いで本をカードに戻した。

「見つけたでー・・ってあら」

いきなり出てきたのは例の少年である。ネギを探している時、人の  
気配を感じ取り出てきたのである

「なんやゲーセンにおった姉ちゃんやないか。(あちゃーついて来  
てもうたんかー)」

「あ、あなたは確かあの時の」  
先ほどゲーセンでぶつかつた少年だと気付いたのどかは、少年と少  
し話しこの少年がネギと戦っているのだと気付かせめてネギの役に  
立とうと思ひ勇気を振り絞って

「あ・・あの」

「なんや?」

「わ・・私、宮崎のどかです。あなたのお名前は?」  
のどかは少年の名前を聞き出そうとしたのである。

そして少年は

「俺か?俺は、犬上小太郎や。じゃーな。」

そう言うと小太郎は走って行ってしまった。

「来れ!(アベアット)・・ごめんめ・小太郎くん」

そういうとのどかも走り出した。

ネギ達は小さな小川で体勢を直していた。

「大丈夫？ネギ」

「はい、何とか」

明日菜はネギの腫れた頬や血を拭ってやっていた。その時物音が鳴り始めた。

「もう見つかったの？」

そう言うと明日菜はネギを背にハリセンを構えた

「ようやく見つけました。みなさま、ご無事ですか」

「KOS・MOSさん！」

現れたのはここにはいいいた時からはぐれていたKOS・MOSであった

「ネギ様、大丈夫ですか。とりあえず事のあらましを教えてくださいませんか。」

KOS・MOSはネギの怪我をみて、今までに起きたことを力モやちびせつなに聞いた。

その間、明日菜は簡単にネギの手当てをしていた

「ありがとうございます。これで大体のことはわかりました。それにしても狗族ですか」

「そうなのよ、また訳わかんない奴が出てきてやんなっちゃう」

明日菜は手当てしながら文句を口にする。それを聞いたちびせつなは顔を伏せた。

それを見たKOS・MOSは

「ふーわかりました。ここは私に任せて下さい。」

「そんな、これは僕の・・・」

ネギはKOS・MOSの方を向くとこれは僕の戦いだからと拒むが「私の使命はあなた方の護衛です。そのようなお怪我をさせてしまった責任を取らねばなりません」

そういうとKOS・MOSは歩き始めた。

ネギ達も急いであとを追いかけた

「ようやく出てきおったか。んっ？またチビ助とちゃうんか。（この姉ちゃん、入り口でチビ助と一緒におった）」

KOS・MOSは小川を出て鳥居の通路に戻るとすぐに小太郎は見つかった。

「あなたには恨みも何もございませんが、みなさまがここから出られるよう捕縛させていただきます」

「なんやと！」

そういうとKOS・MOSは小太郎に向かっていった

「R・BLADE」

KOS・MOSがそう呟くと彼女の腕が電磁ナイフに換装された。

そのまま接近し小太郎に斬りかかった。

しかし、小太郎は後ろに下がることによって避けたのである

「危ないなー姉ちゃん。」

「なるほど、少しはやれるようですね。」

そういうと腕を元に戻し再び仕掛けた

「俺は姉ちゃんには用はないねん。用があるんはそのチビ助や」

そういうと小太郎は影から犬の様なものを呼び出した

「何アレ？影から変な犬が」

「あれは狗神と呼ばれる・・・狗神使いが使う。まあ式神と同じと思っってください」

「姉ちゃん達はいつらと遊んどり」

そういうと呼び出した狗神をKOS・MOSや後ろで見てた明日菜達に向かって放った。

「そももいきません。F・GSHOT」

いったん止まっていたKOS・MOSはなんとガトリングガンを転送し構えた

「なんやて〜！そない卑怯なもん使うかいな」

「どう卑怯か分りませんが私ができることはやらせていただきます」  
そう言うのとガトリングガンを掃射した。

小太郎の呼びだした狗神はすべて数秒もしないで消え去った。

「すぐ。あつという間に倒しちまったぜ」

カモは歓喜の声を上げた。

「ちよつと、ちびせつなちゃん！」

「は・・はい！」

呆然と見ていたちびせつなに明日菜が声をかけた

「あのコスモスって人なにもなの！？いきなりあんなもん平気でぶつ放すのよ」

「え〜とそれは、私も詳しい事はわからないので命照先生に聞いてください」

「なんなのよそれー」

「あつ、やめつ、ゆすらないで」

ちびせつなの曖昧な答えに明日菜はちびせつなを掴み揺さぶった

「わいの狗神達が・・・つたくホンマえげつない事しよるわ。ええわ、姉ちゃん相手してやるわ」

小太郎はそういうとKOS・MOSに向かって飛びかかり連続で攻撃を仕掛けた。

「これでどや！」

しかしKOS・MOSはその攻撃を全て見切り避けていた

「まだまだですね」

「なんやとー」

小太郎は勢いを利用してそのまま回し蹴りを放った。普通であれば反応するのも難しいと思われる攻撃であったがKOS・MOSはそれも読み切っていたのかしゃがむことで避けたのである

「これで決めます。S・SOLT」

KOS・MOSは立ち上がる力を利用しそのままバク宙をしつつ相手を蹴りつけた。いわゆるサマーソルトキックである。

「ぐはー」

小太郎は派手に吹っ飛ばされた。

「姉ちゃん随分強いやないかー」

なんと小太郎は起き上がった。ダメージはかなり溜っているようではあるがまだ戦えそうである

「姉ちゃん、そない強いのに何であない卑怯な飛び道具使ったんや。あないもん使わんでも狗神達なんか倒せたとちやうんか」

「卑怯と言われましてもあれも私の力です。力は使えるときに使わねば意味がありません。」

「へっ、だったらこれを使っても卑怯なんていうなや。これもワイの力や」

小太郎がそう言うと全身に体毛が生え爪が凶悪そうに伸び、先ほどとは全く印象が違う感じになってしまった。

「獣化！変身しやがった！」

「ええ〜なによそれ〜。ずるいわよー」

「ずるくないわい！その姉ちゃんがいったやろ。力は使えるとき使わな意味がないって・・・」

小太郎は騒ぐ明日菜達に反論している

「確かにそうです。しかし相手を間違えてはいけません。R・CANNON」

KOS・MOSは小太郎が明日菜達に反論している間に接近し小太郎の腹部にガンアームを撃ちつけた

「がはー」

小太郎は再び吹き飛ばされた。

「コ・コスモスさん・・・」

「安心してください。スタンモードにしておりますので命に別状はありません」

KOS・MOSが小太郎を撃つたことに動揺していた明日菜にKOS・MOSはフォローを入れた。

「やつぱり、姉ちゃん卑怯やー！」

「あなたがよそ見しているからですよ。しかしあの攻撃を受けながらも意識があるとは驚きです。ですがさすがに起き上がれないでしょう。そのまま1時間ほど寝てください」

「くっそー」

小太郎はそのまま仰向けで倒れたまま叫んだ。

「やったー。倒したよ」

「すごいです。どうすればあんな風に動けるんですか」

「落ち着いてください。．．出てきてもいいですよ」

「「？」」

KOS・MOSが近くの茂みにむかって声をかける様子にネギ達は首をかしげた

ガサツガサツという音と共に茂みから出てきたのはどかであった

「のどかさん!？」

「本屋ちゃん!？」

現れたのどかにネギと明日菜は混乱していた

「ののの、のどかさん、なななんでこんな所に．．」

「えーと、この本に．．．」

ネギ達の質問に答えようとしているのどかの後ろにKOS・MOSが立つと

「お話はここを出てからにしてください。のどかさん」

「はい、大体の事情はこの本で知りましたので大丈夫です。ようはここから出る方法が分かればいいんですね。」

「本屋ちゃん?」

のどかはそういうと倒れている小太郎の近くに寄って行く

「姉ちゃんは確か．．」

「小太郎君、ここから出るにはどうすればいいの?」

「アホか、そないこといえるわけないやろ．．．ってなんやその本?」

のどかは質問の答えは帰ってきていないのにネギ達の側に帰ってくと

「この広場から東へ6番目の鳥居の上と左右の隠された印を壊せば出られるようです」

「なにー!ー!わい何も言って．．．まさか」

「わかりました。R・CANNON」

KOS・MOSは言われた箇所をセンサーで調べ正確に印を撃ちぬいた。そうすると空間に日々の様なものが現れた。

「あの光っている所が空間の裂け目です。神楽坂さんお願いします」  
みんなで急いでその鳥居の近くに来てちびせつなが明日菜にそういうと

「わかったわ。【来れ】（アデアット）」

明日菜はハリセンを呼び出すとその空間の裂け目に向かって振りぬいた

パリーンという音とともにネギ達は結界から抜け出たのである

「やっと出られたー」

「でも兄貴、あいつほっといいていいんですかい」

「任せて下さい」

ちびせつなそういうと結界のあつた所の近くに立ち

「再度、結界を閉じて奴を閉じ込めます。無間方処返し呪」

「こらーちび助ーわいはお前に負けたとちゃうからなー今度会ったときは必ずわいが勝つからなー」

ちびせつなが呪文を唱え結界が閉じようとした時、小太郎の叫び声が聞こえた。

それを聞いたネギは手をぐっと握りしめていた。

ネギたちは川辺にある適当な広さの岩場の上に座り、ジュースを飲んでいた。

辺りには川のせせらぎの音が響き、小鳥たちの鳴き声が聞こえた。

「コスモスさん、どうもありがとうございました。」

「いえ、それが私の使命です。」

「そうですね、それと」

ネギはのどかの方を向くと頭を下げた

「あの、だまつてすみません……。魔法のことは秘密にしくちやいけなかったの……」

「いえ、まえからうつすは……」  
どうやらのどかまえからネギが魔法使いではないかと感じていたようだ。

怪我はさほど大きくないようで簡単な手当だけで済んだ。

一休みできたところで、本山に出発することになった。

そのときだった。

ちびせつなの姿がとつぜんブレはじめ

「ど、どうしたの!？」

「いけません!! ほ、本体の方で何かが起こって……」

するとちびせつなは紙型に戻ってしまった。

「こ、こりゃマズイな。刹那の姉さんのほうに何かあったな」

「「えー!?!」」

その時と同じくしてKOS・MOSの元にも何やら連絡があったよう  
うで

「どうやら、敵が何か仕掛けてきたようでそれから逃げているよう  
です」

「そんな、どうしよう」

「あわてないでください。あちらには命照様が一緒にいらっしや  
います。」

「でも……」

「くれぐれも、余計なことは考えず、本山に向かきましょう」

その言葉にネギは顔を伏せた。

とりあえず、ネギ達はもう少し休憩してから本山に向かうことにな  
った

## 修学旅行三日目・2（後書き）

遅くなって申し訳ございません。なかなかうまく書けないのと他のことに気を取られてしまい遅くなりました。まだまだ書くつもりでいますので皆さままどうか長い目で見守ってくださいますようお願いいたします。今後も掲載は不定期になりそうですが1ヶ月は無いようにしますので

### 修学旅行三日目・3

ネギ達との連絡係としていた式神のちびせつなが消えたちょうど同じころ

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

「せつちゃん、いきなり走り出してどうしたん？」

刹那は木乃香の手をつかみ制止も聞かずに走っていた

そのとき刹那の元に針状のものが投げつけられた。

彼女はそれをさっと掴み取る。

「くっ．．．」

今、5、6班は何故かマラソン状態。刹那、命照、エヴァンジェリン、そして茶々丸はともかく、他の班員たちは息も絶え絶えであった。

命照はエヴァンジェリンといっしょに最後尾を走っていた。

「まったく、白昼堂々と襲ってくるなんて暇人め」

「暇人ではないと思うぞ」

命照の呟きにエヴァアっこみをいれる

そのとき命照にも千本が投げつけられる。

命照はそれを刹那と同じように掴み取り、それを投げ返し相手を少し足止めをした

「そのまま、仕留めてしまえばいいのに」

エヴァンジェリンは軽く息を吐くと、前方に京都の名所であるシネマ村が見えてきた。

「あれ！？　ここ、シネマ村じゃん！　桜咲さんシネマ村に来たかったのー！？」

早乙女ハルナは言った。

確かにここは京都でも有数の観光の名所である。

木乃香を直接狙われて相当あわてていたのか、刹那はとんでもない

ことを口走り始めた。

「す、すみません！ 早乙女さん、綾瀬さん！ 私、こ、このちゃんと二人きりになりたいんです！」

「えっ！？」

刹那はそういうと木乃香を抱きかかえ大きくジャンプして塀を飛び越え、シネマ村の中に入っつていった。

「今、何か言っただなあ」

エヴァンジェリンはこれから刹那がクラスメイトに何を言われるか想像がついたような気がした。

そして命照は呆れたように溜息をつくと残った生徒たちに

「どうする？お前たちも中に入るか？」

観光シーズンなのか、映画村の中では人でごった返していた。

シネマ村の人通りの多い場所に来た刹那は多少荒れた呼吸を整える。

これだけ人が多ければ容易に襲っては来れまい。

彼女はそう考え、今後の方針を考えた。

ちびせつなを通してみた感じではネギは多少傷ついたものの、少し休めばほとんど回復する程度の消耗で済んでいた。

その程度で済んだのは護衛のKOS・MOSのおかげである。

そこまで考えて刹那はハッと思い出した。

そういえばあわててここへ来るあまり、命照のことをすっかり忘れていたのである。万一のことを考えると彼にはここにいてもらったほうがありがたい。

しかし彼のことからさすくに見つけるだろう。

「しかし、この国は面白いこと考えるな。昔のことを振り返りこうして演じようとするなんて」

命照はシネマ村を宇宙に作るうかと考えていた。宇宙ではこのようなテーマパークがしばしば人気になる。

刹那は通りに命照の声に気づくと我に返った。

見ればエヴァンジェリンと命照が周りを見ながら歩いており、続い

て茶々丸が歩いていった。

エヴァンジェリンが刹那に気づくと彼女の方へとやってきた。

「ここにいたか、桜咲刹那」

「エヴァンジェリンさん、命照先生。よかった」

刹那はとりあえず命照たちと合流できたことに安堵の息を吐いた。

「あれ？ 木乃香はどこへ行った？」

「このちゃんなら……」

刹那が言いかけたところで、木乃香の声が響き渡った。

「せつちゃん、せつちゃんー！！ それにみよう君とエヴァちゃん、

茶々丸さんもいるんかー」

みんなが振り返ってみてみると、番傘をさし、着物姿のお姫様といった感じの木乃香がいた。

「こ、このちゃん！？ その格好は！？」

「知らんの？ その更衣室で着物、貸してくれるんえ」

「ほおー、なかなか似合うじゃないか」

「ほんまー、うれしいわー」

命照は木乃香の衣装を見て素直にそう思い口にした

「よし、命照。私たちも着替えるぞ」

「何！？ 俺たちもやるのか？」

「ここはそういうところだろ。」

「あ、ええやんかー。ほら、せつちゃんも。みよう君もやるんだから。衣装はうちが選んであげる」

「あ、あのこのちゃん？ 私はこーゆーのはあまり……」

五人はそれぞれ更衣室に消えた。

しばらくのち……。

「お、エヴァは着物姿か。似合っているじゃないか」

「ふん、当たり前だ」

彼女は木乃香が着ているものとはデザインの異なる着物を着ていた。

「しかしエヴァ、着物に着慣れていない？」

「私たちは茶道部で着る機会がありますので」

同じく着物姿の茶々丸が答えた。

「しかし……、なぜ私は男物なのですか？」

刹那はなぜか新撰組の格好をしていた。腰に差している彼女の愛刀、夕凧が非常に浮いている。

「ええやんか、ほら見てみ」

そついうと木乃香は命照の方を指差した。

「命照、貴様もなかなか様になっているではないか」

「そうか？これはこれで動きやすいな」

命照は刹那と同じく新撰組の格好をしていた。

5人はお土産物を覗いたり、写真を撮ったりしていた。

刹那は木乃香と写真をいつしよに多く撮っており、彼女も楽しそうだった。新撰組の扮装のせいか、刹那はよく男の子に間違われていたが。

命照も同じ新撰組の恰好のせいか刹那と一緒に写真を撮られていた。そんな中でも命照は追いかけてきているであろう敵の動きを気にしていた。

そのことをエヴァと相談しようとしたが

「おーあそこはこの前見た時代劇に出ていたところだ……あつあそこも見たことがあるぞ！」

エヴァは時代劇のセットで使ったであろう所を嬉しそうに眺めていた。

茶々丸はそんなエヴァを写真に収めていた。

「はあくしょうがないな……」

命照は溜息をつきながら空を見上げた

すると通りの向こう側からなんでか西洋風の馬車が走ってきて、命照たちの前に止まった。馬車の中からなんと貴婦人姿の月詠が現れた。彼女は扇で口元を隠しながら馬車を降りてくる。

「どうもー、神鳴流……じゃなかったその東の洋館の貴婦人に」

ざいますー。

そこな剣士はん、お姫様を貰い受けに来ましたえー」

どうもお芝居と見せ掛けて堂々と木乃香を誘拐する作戦に出たらしい。

「そうはさせんぞー！ このちゃんは私が守るー！」

「キヤーー！！ せつちゃん、かつこえー！！」

ノリがいいのか、木乃香は刹那に抱きつき、彼女をあわてさせていた。

「そーおすかー。ほな仕方ありまへんなー」

月詠はそう言つと、白い手袋を脱いで刹那に投げつけた。

「このか様を賭けて決闘を申し込ませていただきます。場所はシネマ村の「日本橋」にて。逃げたらあきまへんえー、刹那センパイそれとこの旦那さん先日はどうもー、旦那さんも一緒にどうぞー」

彼女は最後の台詞を殺気の籠もった不気味な目で言った。それを感じ取ったのか、木乃香はビクツと身をすくませる。

月詠は馬車に乗って去っていった。

「やるしかないだろ」

「ええ、今のところ連中の誘いに乗るほかありません」

命照はとりあえずこれを使い切るか相談しようとした、そのときシネマ村に来ていたクラスのみんなが刹那の周りに集まってきた。朝倉、いいんちよ、村上夏美といった三班の面々と、早乙女ハルナと綾瀬夕映だった。

「ちよつと桜咲さんー！！ いったいどーゆーことよーー！！」

「今の心境は！？」

「いつから二人は付き合い始めているの！？」

クラスメイトの面々は刹那を質問攻めにした。

「な、なんのことですか！？ べ、別に付き合い合っているわけでは…

…」

刹那は顔を赤くし、命照の方を一瞬ちらつと見た。

命照は空を見ていたので気付かなかったが

刹那は慌てる。  
まさか木乃香との関係を疑われるとは夢にも思っていなかったから  
だろう。

命照たちは月詠が指定した決闘場所、日本橋へと向かう。

当然というかなんというか、いいんちよたちもついてきてしまった。

「こ、困りましたねー」

「これじゃ、派手な技や能力は使えんな。みんなの目の前で魔法使  
つても大丈夫だと思っ？」

「絶対だめでしょ。幸い私たちの恰好は刀とか使えますからそれで  
行きましよう」

ちなみにエヴァンジェリンはなにやら疲れた様子で後ろの方から歩  
いてきている。

先ほどからのはしゃぎぶりだと相当動きまわったのだろう。

とはいえエヴァを戦闘に加わるのは駄目だろう今のエヴァを見てる  
と忘れがちだが世界屈指の賞金がかかっていたのである。そのエヴ  
アが戦闘に加わると相手が何をしてくるか分からなくなってしまっ  
命照たちが日本橋に到着すると、すでに月詠が待ち構えていた。

「ふふふ、これは楽しくなりそうどすなー」

月詠が本当に楽しそうな顔で言った。

月詠が命照の顔を認めると、心なしに表情を変えた。

「そこな旦那さんもやっぱり来てはりましたかー。刹那センパイと戦  
いたどすが、うちの姐さんが旦那さんをつていうんですよ」

「そうか。じゃ俺が相手をしてやる。刹那、木乃香を連れて逃げろ。  
例の場所で落ち合おう」

「命照先生！？私も！」

「行け！木乃香を守るんだ」

そんなことを言うと周りで見ていたギャラリーたちが一斉に拍手な  
どが拳がった

「そうですね。刹那さんここは私たちが引き受けますわ。」

なぜかそばで見たいいいんちよたちが刹那の手を握り加勢の意を伝えた

「くっ。ツクヨミと言ったか。この人たちは」

「わかつとりますえ。その人たちはうちのペットがお相手します。」

「そういうと懐から大量の式神の札を取り出した

「きとくれやす。ひゃきやこ」

出てきたのはファンシーな小型の妖怪型式神であった

「刹那・・・」

「はっはい。このちゃん行きましょう」

「えっ？なんでなんここで見てこうや」

「いえ。そうもいきません。さあ」

刹那はそういうと木乃香の手をとり走り出した。ちょうど式神が出てきギャラリーたちはそちらに気を取られていた。

「さあーこちらをはじめましょう」

月詠はそういうと命照に向かって切りかかった

「にとつれんげきざんてつせーん」

命照は腰のバツクから得物を取り出しそれを防いだ。

その時月詠は目を疑った。ついでにそれを見ていたギャラリーたちも驚いた

「そないもんでうちと戦うんどすか？」

命照が持っていたのは

「・・・フライパンとお玉ー」

そう月詠の攻撃を防いだのはただのフライパンとお玉だった

「あちゃ間違えた。まっこれでいっか」

そう呟くとひゃつきやこうと戦っている生徒の近くに移動し

「みんな耳ふさげよー」

そういうと気をフライパンとお玉に集中し

「秘儀・『死者の目覚め』」

命照はお玉をフライパンに叩きつけ気の乗った音波攻撃をやったのである

生徒やギャラリーたちもいきなりの大音量の音に耳をふさぎ悶えていた。

一方式神たちはやはり低級なのだろうこの攻撃でほぼすべてが消えていった

音がやみ悶えていたギャラリーたちが近くの城の天辺をみて騒ぎだした

「くっ刹那、なんであんなところに!?!」

「よそ見はいやどすえ〜」

彼がそちらへ目を向けると刹那と木乃香が眼鏡をかけた女性と翼の生えた巨漢の使い魔に追い込まれていたのが見えた。

刹那が安易にあのような場所に行くとは考えられないので、どうやら誘い込まれたようだ

「さて、どうするか……」

「きーとるか!?! お嬢様の担任!?!この鬼の矢が二人をピタリと狙っているのが見えるやろ!お嬢様の身を案じるなら手は出さんときー!」

いつぞやのメガネ猿天ヶ崎 あまがなまきちへん 千草の声だった。

見ればお城の上で額に呪符を貼り付けた怪物が弓に矢をつがえて、ネギと木乃香を狙っている。

「も〜いいところでしたのに〜」

月詠は文句の声をあげて構えを解いた。

命照はそれを見て視線を周りに向けた。

生徒や観客のほとんどは城の方に目を向けていた。

今なら多少派手なのを使っても、命照だとはばれないだろう。

とそう思い仕掛けようとしたとき

風に吹かれてよろめいた木乃香を刹那が庇いそれを見た怪物は矢を射ったのである。

「このちゃん、せつちゃん!？」

木乃香は矢が射られた刹那の瞬間謎の声を聞いた

(さあ唱えなさい。あなたの決意の証を)

「(えっ!?)」

(さああの子と共に歩むと決めた証を)

木乃香は懐に入れてある仮契約のカードに触れ唱えた

「『来れ!(アデアット)』」

その瞬間あたりは光に包まれおさまったとき木乃香は十枚もの羽衣のようなものをまとっていた

その羽衣は主を守るように前面に集まった

そして矢がその羽衣に触れると吸い込まれて行くように矢が消えていった

「なー」

千草はその光景に動揺していた。

「なんやそれアーティファクト?でも・・・くっ撤退や。月詠」

「えゝ、しょうがないどすなあゝではまた今度ゝ」

そういうと千草たちはどこかに行ってしまった

そして少し遠くで見ていた白髪の少年

「あの光、そうかあれが・・・そして今度は僕も会つとしよう。

樹雷の皇子・・・」

そう呟くと溶けるように消えていった

「大丈夫か!？」

命照は急ぎ城の天守閣上までやってきた

「は、はい、大丈夫です。あの、このちゃん、カードを使ったん?」

「ウ、ウチさつき何をやったん? 夢中で……」

しかし混乱する二人の周りでは十枚の羽衣がゆらゆらと漂っていた  
「まあ、それについてはあとで考えることにしよう。刹那、すぐに移動した方がいいな?かなり派手に暴れてしまったからな。一般人

に捕まると厄介な展開になる」

「そ、そうですね……」

刹那はそう言っつて、考え込んだ。

「敵の数も多いですから一度合流しましょう」

「そうですね。命照先生、これから関西呪術協会の本山へ向かいましょう」

木乃香にもその旨を伝え、命照たちは大急ぎで普段着に着替えるべく更衣室に向かった。

そこに着くときすなわち命照のことを聞くということ

### 修学旅行三日目・3 (後書き)

ようやく書けました。戦闘になってないし。それと木乃香のアーテ  
イファクトは次の機会に説明します

## 修学旅行三日目・4（前書き）

長らくお待たせしました。いろいろ考えることがありまして、遅くなりすいません

和風情緒あふれる、石畳の道を行く男女の一団がいた。この道は関西呪術協会総本山へ続く道であり、何も知らない一般人の通る道ではない。それにも関わらずこの団体にはあきらかに一般人が混じっている。早乙女ハルナ、綾瀬夕映、朝倉和美、宮崎のどかである。シネマ村の件が終わった際、命照たち三人は急いで着替え、ネギたちと合流するはずだったが、朝倉が刹那の荷物にGPS機能付きの携帯を忍ばせていたみたいでネギたちと合流する前に追いつかれてしまったのだ。

普段ならこんなことになる前に命照はGPS携帯や朝倉たちに気付くのだが、シネマ村の事が終わり命照は警戒網を少し緩めてしまったようだ。

ちなみにエヴァンジェリンと茶々丸もいつしよに来ている。世界でも有数の賞金首であった彼女が関西呪術協会の総本山へ行くのは少々ためらいがあった。しかし魔力を抑えることで力そのものは封印されているように見せかければ何とかなるだろうと思ひ、結局同行することに決めたのだった。

しばらく歩くと、ハルナが騒ぎ出した。

「あ、見て見て。あれ、入り口じゃない!？」

全員が前の方に目を向けるとなにやらお寺の入り口にあるような木造建ての門が現れた。

「うおー!! なんか雰囲気があるねー」

「レッツゴー!!!」

ついてきた図書館探検部四人組が走り出した。

「ああー!!! ちよつとみんなー!!! そこは敵の本拠地なのよ!」

「いったい何が出てくるか……!!!」

明日菜とネギが身構えながら追いかけて行った。

「KOS・MOS、そつちはどうだった・・・」  
「はい、こちら、ネギ先生の方には狗族の犬神小太郎が。」  
「そうか・・・」  
命照は報告を聞きながら皆のあとについて行った。

「お帰りなさいませー、このかお嬢様　！！」  
「へ？」

ネギや明日菜の想像に反しなんと迎え出てきたのはズラツと並んだ巫女さんたちがお出迎えしていたのである。

あまりにも豪勢な展開に一般人の生徒たちは大騒ぎである。

想像と違うことに明日菜は刹那に説明を求めた。

「これってどーゆーこと、刹那さん？」

「えーと、つまりその……。ここは関西呪術協会の総本山であると同時に、このかお嬢様のご実家でもあるのです」

「ええ〜〜〜！！！」

「それ初耳よ！！　なんで最初に言ってくれなかったのー！？」

「す、すいません……」

刹那は明日菜に謝っていた。

「ここも久しぶりだな。」

「なんだお前、ここに来たことがあるのか？」

命照の呟きはエヴァに聞こえたのか聞いてくる

「ああ、10年ぐらい前とつい最近にな。」

「そうか。」

そついつて命照とエヴァ達も屋敷の中に入って行った。

命照達が案内されたのは大広間で左右の壁際には多数の巫女たちが並んでいる。

周りの雰囲気にもまれそうなのかネギや事情のわからない生徒達は

周りを見渡している。

そんな中、命照は平然とした恰好で座っていた。

「命照さん、よくそんなに堂々としてますね。僕、なんだか緊張しちゃって。」

「俺は、まあ慣れた。それよりも来たぞ。」

そういうと、中央の御簾のかかった階段から誰かが降りてきた。足を踏みしめるたびに木がきしむ音が聞こえる。

「お待たせしました」

姿を現したのはやせ気味で、顔色が少し悪く、眼鏡をかけた中年の男性だった。

それは命照が過去二回会っている関西呪術協会の長。近衛詠春である。

「ようこそ明日菜君。そしてこのかのクラスメイトの皆さん。そして担任のネギ先生」

歓迎の意を述べた後、詠春は命照の方を向き

「お久しぶりですね。命照君」

命照に挨拶をする詠春、そして我慢できなくなったのか、木乃香が彼に駆け寄り、抱きついた。

「お父様、久しぶりやー」

「ははは、これこれこのか」

どうやら木乃香は久しぶりに父と再会したようだ。

一方明日菜はまったく別の反応を示していた。

「渋くてステキかも……」

「ええ〜!!」

「あなたの趣味はわからんわー!!」

どうやら明日菜は渋い中年好きなようで……。

ともあれネギは学園長から預かった親書を西の長に渡すことに成功したのである。

今から山を降りると日が暮れてしまうとのことなので命照たちはここに泊まることになった。なんでも身代わりの式神を飛ばしてくれ

るとのことだった。

しかし件のラブラブキッス大作戦のときの悲劇が脳裏に浮かんだので命照は一瞬不安を感じた。

あれからしばらくして、ネギたちは歓迎の宴に参加していた。

目の前には大量の高価な和食が並び、巫女さんたちもいつしよになつてのドンチャン騒ぎだ。

そんな中、命照、KOS・MOS、木乃香、刹那、詠春、エヴァと茶々丸は別の部屋にいた

「こんなところに呼んで一体どうしたんだ。」

「いやなに、一応エヴァも事情を知ってるからね。とりあえずいてもらおうかと」

「ねえ、みょうくん。なんでここに呼んだん？うちたちもみんなと一緒に参加しようや」

「木乃香、いいから命照君の話聞きなさい」

詠春はそういうと、命照の方を向いた

「よし。じゃ行くよ」

そして、命照がそういうと部屋にいる者たちの周りが輝きはじめ突如と姿を消した。

「ついたよ。」

光がおさまると、そこは先ほどまでいた部屋ではなく広大に広がる大地が見えていた。

「ここはどこやる・・・？」

「はい。ですがどっかで見ることがあるような・・・」

突如と広がる大地に戸惑う木乃香と刹那であったが

「そや、ここは昔、みょうくんにつれてきてもろつた場所や。」

「そうだよ。さあこっちだついてきて」

命照はそういうと全員をブリッジに連れて行った。

「ここはたしか」

「ええー。私も見覚えが・・・」

木乃香達がブリッジを見まわしていると二人の付けている櫛と首飾りから子虎と子龍が出てきた

「あつ虎ちゃんに龍ちゃんや」

そういうと木乃香は二匹とじゃれ始めた。するとじゃれていくうちに子虎の数が増えていき木乃香と近くで見ていた刹那を飲み込むように溢れたのである。

しかし

「（パン！）」

つと手をはたく音が聞こえると子虎たちは一匹ずつを残し消えてその二匹は命照の横に着いた

「さあどこから話そう。つとと言っても詠春さんやエヴァ達は事情知ってるから気持ち的には少し軽くていいかな」

「えっ！？どういうことなん？お父様？」

「まあ話を聞いてなさい。木乃香」

父親が事情を知っていることに驚いた木乃香は訳を聞こうとするが詠春はそれを止め話を聞くように言った。

「事実から言うと、俺はこの星、地球の人間じゃない。他の星から来た者だ」

「ええくと・・・電波かなんかなん？」

「いや、違うから・・・」

木乃香のボケを制止、命照は静かに話し始めた。樹雷の事、銀河アカデミーの事など資料などを合わせて説明していった。

「これが俺の秘密さ」

「ほえ〜ほんまに宇宙人つておつたんやねえ〜」

「そうですね。このちゃん、でもなんで早く教えてくれなかったんですか？」

「まあなんだ。魔法使いと一緒に秘匿の義務があるんだ。正確には初期文明の現地人との接触や介入なんかも本来は禁止されている。」

「なるほど・・・」

剎那はもとから裏の世界にかかわってきていたのでその重要性は分かっている。

「それともう一つ、言わなければならぬ事があるんだ。」

「何なん？」

「それは俺の寿命の事だ。宇宙の人達の寿命は基本的には100年そこらだ。でも俺のような軍人なんかは生体強化と呼ばれる処理をするから数百年を軽く超える。さらにこの皇家の木のような特殊な物を使えば延命調整をし万年レベルで生きれるようになる。」

「それはどういうこと？」

「このちゃん、君の気持ちはとてもうれしい。でも、俺についてくるといふことはこの星での生活を捨てなければならぬ。そのことを踏まえてよく考えてほしい。」

修学旅行三日目・4（後書き）

全然、調子が出ません。次話もいつになるか・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3964i/>

---

麻帆良に来た皇子様？

2010年10月9日12時32分発行